

この時、國民會議派の議會局を握る溫建派の代表たるサルダー・パテルが、突然飛込んで来て同國の政治状態に猛烈なる攻撃の火蓋を切つた。これ迄彼は藩王國問題に一切干渉しないと云ふ同派の方針を支持する一派の代表者であるためその行動は非常に注目された。彼は更に進んでその鬭争を有効ならしめるため、カシヤワールの××主義者とも共同戦線を結成すべしとも主張した。(註一)

(註一) この問題は極めて興味ある發展を辿り、一九三九年三月にはガンデイの断食騒ぎ迄起きた。即ち、パテルの加入に驚いたラジュコットの主権者タコール・サヒーヴは妥協する事に決し、十名から成る國政改良委員會(内七名迄會議派の推薦)を任命して解決に當る協定がパテルとの間に成立した。然し三月に至り會議派推薦の委員數名が同國居住の英人の反對で拒絶せられたため、これに憤慨したガンデイは同三日から断食を開始してこれに抗議した。この有效適切な國民會議派の抗議には印度政府も驚愕し、直ちに總督は断食の中止を要求する一方、最高判事のサー・モリス・グウヤーをして一切の解決に當らしめたため、ガンデイの断食は九十六時間の後中止せられた。然しその後ラジュコットの宗教團體が會議派に協力しないのに憤慨し、遂に同派の大衆行動の中止をガンデイは命ずるに至つたため、パテルの努力も水泡に歸し結局會議派はラジュコットの支配者に欺かれて失敗する結果に終つた。

然しより重大な意義を持つのは、最も進歩的な藩王國の一に數へられるトラヴァンコールの現状であらう。この國に於ては、國民會議派の全印不服従運動の展開せられる度にこれに呼應し果敢な鬭争を開始してゐるのであるが、一九三八年から九年にかけても又軍隊の發事砲件が國內三ヶ所に起き、警官の暴行事件が毎日のやうに繰返された。同國會議派の指導者達は投獄せられたが、民衆の團結は堅く、彼等の政治的權力獲得の決意をより高く高唱した。全印に著名な同國首相サー・C・P・ラマスワミー・イェールは藩王國人民會議を粉碎して見せると豪語したが、粉碎

する所か今なほ解決しない大衆運動の飛沫を全身に浴びてゐる。政府の集會禁止も一蹴せられ、市民非協力の要求に學生も参加し、女學生も又示威運動の先頭に立つた。労働者も参加し、數千の紡績工がクイロンに集合した時には軍隊が發砲し、死者二名を出した。又同國內に勢力を持つシリアン基督教徒もヒンズー教徒と提携し、印度の癌たるコムミュナル問題も同國に於ては忘れられてしまつた。彼等が何故ヒンズー教徒と提携するに至つたかと言ふと、最近政府の息のかかるトラヴァンコール銀行の一角が破産し、その最も甚い經濟的打撃を受けたからであつた。

かくてラジュコット事件を契機に、藩王國問題から一切手を引くと宣言したガンデイも、このトラヴァンコール事件には少からず食指を動かした。又、現在は殆んど鎮壓された形で、印度政府もその禍根を絶つべくその駐在官を通して干渉の手を伸べやうとしてゐるが、これ等の全印度的運動へ結び付かうとする藩王國の民族運動的空氣こそ、その封建的障壁が現在如何に高く、如何に堅固であらうと、やがてはそれを突破して向ふべき方向を暗示してゐると言ふ。

第五篇 印度在住の英國人

一、統治方針の史的變遷（その二）

サーヘブなる印度語は、「旦那」或は「貴君」と言ふ極めて一般的な敬語に過ぎない従つて、これを特定の社會を形成する英國人の代名詞に使用する事は、誤りであるかも知れない。然し現在十七萬七千人を算へる印度在住の英國人階級は、それ自身印度の支配者として、少く共印度人全體を對象する場合にはサーヘブの社會的地位を保つてゐるのであるから、これを比喩的にかく呼ぶ事は一向差聞へないであらう。

然し我々が過去三百年の印度統治史をひもとく時、この印度のサーヘブであつた英國人には、常に二つ型のあつた事に直ちに氣附くのである。

その好き方の型を代表する一人に、アムハースト總督（一八二三—二八年）治世のマドラス行政管區長官サー・トーマス・ムンローと言ふ人がゐる。彼は一八二四年十二月三十一日附の覺書によると、次のやうに述べてゐる。

「若し我々が印度人の人格向上に努力しないとすれば、例へば彼等をして公正な法律と適正課税の恩恵に浴せしむると言へ共十分とは言へないであらう。然し外國政府の下にあつてはそれを抑壓する幾多の原因あるため、それを没落から救ふ事は容易でない。自由を失ふ者はその徳性の半を失ふ者なりと言ふのは、古來の格言である。この事は單に個

人の場合のみならず、國家の場合に於ても眞實である……隷屬化せられた國家は、宛も奴隸が自由人の特權喪失を意味すると同様、國家たるの資格を失ふのである。それは課税の特權を失ひ、自らの法律を造る特權を失ひ、その國の統治或は内務行政に容喙する權利を失ふからである……それは國家主權の任意の權力ではなく、國家的性格を破壊し、國家的精神を喪失せしめる所の外國主權への從屬を意味してゐる……我々が結局この國から追出されるとして、それは我々の政府組織が結果に於て全民衆を侮辱するものとなるよりも遙かにましであらう

かくてこの印度を熱愛した行政長官の事蹟は今なほ印度人の頭腦に深く刻まれ、舊マドラス行政管區へ行けば今なほ小唄や民謡となつて口の端に残つてゐる。この事は恐らく全英國人の胸に波打つケルト人とサクソン人の血の混合體に原因すると思れる所謂ジョン・ブル型と正反對の今一つの型を我々に想ひ起させるのであつて、我々も又英國の印度統治史を見る場合、必ずこの矛盾する二つの流れの上に立つて理解する事が必要であらう。

その所謂ジョン・ブル型に反對する今一つの型は、ワッツワース、ミルトン、ブレイクの詩に秘められた純宗教的な熱情に促されて時折り生れた英國の自由主義傳統と言ふ事が出来やう。ジョン・ポール、ウイリアム・ラングトン、トーマス・ムーア、チャーティス一派(註一)、トム・マン、チャールス・キングスレイ、クエーカー教徒等一聯の亞流がその系統に屬してゐる。彼等の等しく特徴とする所は「英國を異國の奴隸たらしむな」と叫ぶ愛國的純情である。事實、英國は過去に於てこれ等の人々の存在により、第三者の認める以上に革命的であつたし、燃ゆるが如き熱情を示した事もあつた。又自由のための戦士、英雄的な諸侯、或は又正義の殉教者に必要以上の歴史の頁を割いた時代もあつた。

(註一) 一八三六年から一八四八年——即ち英國産業主義の勃興の前夜に生れた英國民權運動の一派

然し我々は又英國歴史の今一面に、英國を所謂商人の國として資本主義的僞善の典型國——そして現在の英國に支配的な——ならしめてゐる今一つの流れのある事を、忘れる事は出来ない。その流れを代表する一派は、これ迄如何なる事態に直面しても常に冷酷そのものの感情を表現し、最悪の事態から最大の利潤を生み出す不思議極まる能力の所有者である。その點冷酷無比な政治家として知られるソ聯の巨頭スターリンすら「英國の資本家程弾力性に富む不思議な人物は世界にゐない」とアメリカ新聞記者との會見に於て語つてゐる程である。然しこのジョン・ブル型の氣質を代表する冷靜さは、その中に爆彈を秘めた所の冷靜さで、この爆彈は前者の生命とする正義感からではなく極めて功利的な原因で時折り炸裂する。例へば獨逸のポーランド侵入を見て、「最早や我慢が出来ない」と立上つたチエムバレンやチャーチル以下の激怒がそれで、それは全く彼等の感じた獨逸の××に對する正義感からではなく、世界の覇者を以つて任ずる彼等の矜持を傷つけられた事に對する激怒に過ぎなかつたからである。それは彼等の資本主義的感情の爆發とも言ひ得るであらう。

この理想主義と重商主義——勿論その基底に於いては同一な——が混淆して今もなほ典型的な形として残つてゐるのは英帝國を構成する最大の植民地、印度であると言ふ事が出来る。然し不幸にして英國人は、印度人とその英國史を讀む事を禁ずる事が出来なかつたので、彼等はその理想主義の一面のみを見て、我等も又英國の奴隸に非ずと信ずるに至り、その運動を抑制する所か、却つて助長した事は皮肉である。

事實、前記トーマス・ム の覺書が印度に於ける英國理想主義を代表するものである事は先にも述べたが、か

かる理想主義——即ち本國と同一水準の自由をその植民地にも移入しやうと言ふ英國側の考は、少く共その印度支配の初期には決して珍しい現象ではなかつたのである。即ち當時の理想主義肌の小壯官吏の中には上司の怒りも恐れず自己の信念に忠實な者も多數ゐた。例へば一八三〇年インダス河航行案が政府部内で論議せられた折も、小壯官吏を代表するサー・チャールズ・メトカルフの如きは、次の如き激烈な口調を以てそれに反對してゐるのである。

「彼等の承諾もなく我等の隣人を欺いたり、暴力を用ひたりしてその土地や河川を測量し、彼等を警駭せしめたり激怒せしめたりする事は、單なる無法に過ぎない……表面マハラージャのランジット・シングへ贈物を届ける口實の下にインダス河を測量せんとする計畫は、私には實にいやらしく思はれる。最も可能性のある事として若し見破れた時には、その國々の嫉妬と怒りを招くと言ふ事は、私の意見によると失敗する事の出来ない我々政府の政策としては無價値なトリックとしか考へられない」

當時に於ても彼の意見は、勿論採用せられなかつた。然し渺たる一屬官の地位を以て、上司の壓迫激怒も恐れず、自己の信念のためにはかくも烈々たる激語を以て争ふ氣魄は、貴族主義的傾向の強い英國人社会に於ては全く珍とするに足る事であつた。然しこれが當時に於て決して稀有の現象でなかつた事は、その後司法官制度を繞つて起きた論争中に提出されたサー・フレデリック・ハリイデイの意見書によつても立證せられるのであつて、ブール・チャンド氏も一九三八年二月號の「モダーン・レヴュー」誌に於てこれ等當時の統治問題に關する論争も言はゞ直接その任に當る官吏層の責任感の表現であつて、印度總督がその周圍に議會的役割を演ずる一團を持つてゐた事を立證するものであると述べてゐる。事實當時の官吏は、かくの如く政府の統治方針を批判しても別段その昇進の妨げとはならな

かつた。勿論當時の政府報告や覺書を見ても、別段統一ある英國支配の精神的構造を形成する有機的な各部分であると言つた印象は與へなかつた。然しその一人一人がそれ／＼各個人特有の觀念や感情や同情を持つて生きた心の生きた表現と言つた印象を與へる事は否定出来なかつたが、かうした現象も最近起きたキルロー事件(註一)を除いては、今日殆んど跡を絶つたと言へる。

(註一) この事件は警官殺害の廉で起訴せられた一印度人が、その實その警官にひどく苛められ自衛行動に出發してゐたと言ふ理由で無罪となつた事件である。

然しこれに續く時代には、その理想主義的熱情は拋棄せられて、印度占領の初期に見られた英國重商主義の僞暁と強奪の復活した事を見逃すことが出来なかつた。この僞暁と強奪こそ前記英國重商主義が本國の資本主義社會建設に貢獻する道であり、本國産業の工業化を促してその資本蓄積を招來した道であつた。かくして十九世紀の中葉本國に近代産業の霸權が樹立せられるや、ランカシャ製品は印度にも氾濫して、古來歐洲にも覇を唱へた印度手工業を一朝にして壊滅に歸せしめた。

この重商主義的掠奪が如何に暴虐を極めたかはマルクスの資本論中にもその一例を示されてゐる。即ち、阿片栽培の契約が東印度會社の一社員に賣渡されるや、彼は直ちにそれをピンズと呼ぶ仲買人へ四萬磅で賣渡し、ピンズも又即日これを六萬磅で轉賣して、鰻上りの暴利が貪られたにも拘らず最後の購入者がその栽培を實施した時には莫大な利潤を擧げたと言ふのである。

十九世紀に入るや、英國統治の性格には悲劇的な變化が起きた。これ迄は多少共自由主義的性格を有してゐたので

あるが、彼等の支配権が強固になるに従つて漸く官僚化し、印度人の利益を一切無視するやうになつたのみならず、彼等の行動の一切をも悪意に解釋するやうになつたからである。それは印度が單なる英國の寶庫としてその搾取の對象に轉落し、同時に又近代的植民地統治の形體が始めて完成した事を意味してゐた。

この近代統治期の先頭に登場したのは、コーンウォールス總督（一七八六—一八三三年）である。彼は英國の地主階級の出身者であつたので、印度にも又地主階級をつくる事を企圖し、これ迄は徵稅請負人に過ぎなかつたベンガル、聯合、ビハール三州のゼミンダールを地主に昇格せしめる事によつて、不幸な農民に對する支配を強化した。又印度人の官吏登用によつて複雑な印度社會に又新たな支配階級をつくつたが、これ等印度人官吏には決して最高の政治的地位に就く事が許されなかつた。それと言ふのも彼の持論が「ヒンズー教徒は一人残らず墮落してゐる」と言ふのであり、例へば前記のムンローが「彼等は單純、無邪氣、率直であり、世界の何れの人種にも劣らぬ誠實さを持つてゐる」と言ふのと全く正反對のものであつたからに外ならない。彼こそ、印度に對する英國最初の讓歩と言はれるメント・モレー改革案（一九〇九年）に於て強力に地方立法參事會から印度人官吏の追放を叫んだ印度事務相モレー卿の先驅者と言ふ事が出来る。

然し彼が正義派の一人として、當時の政府官吏が貿易を副業として豪華な生活を送る腐敗振りを痛烈に攻撃した事は、唯一の異色ある事蹟であつた。然し不幸にして彼はその原因を彼等の道德的腐敗に求めずして待遇問題に求めたため、英國人官吏の俸給は一躍今日の水準に飛躍し、印度人官吏との間に大きな懸隔を生ずるに至つた。これは最早や彼が單なる職業的官吏として印度自體には何等の愛着も感ぜず、單に義務として統治事務の處理に當つたからに外ならない。従つて彼自身は質素な生活を送つた事を以て有名であるが、印度に對する熱情と智識の欠如は、やがて彼をして民衆嫌惡病を嵩ぜしめ遂に執居生活に轉じ、而もこの事が更に統治者と民衆の間を疏隔せしめる原因となつた。ミル及ウイルスン共著の「印度史」も、彼に就て次の如く述べてゐる。

「西洋文化の輸入に先立つ事數世紀、印度に於ては既に法律や裁判が印度人自身の手で處理せられ而も社會の團結は強固、人口又稠密にして繁榮し、人民又富んで幸ひなりし時代のあつた事をコーンウォールスは、忘れてゐるやうである」

彼に續くジョン・シヨア總督（一七九三—一八三九年）は、その容貌から見ても前者より狹量であり、同時代の人人も彼の印度民衆に對する偏見の甚しかつた事を、筆を揃へて書殘してゐる。あらゆる事情を綜合し彼等は印度に對して完全に無智である事が唯一の資格として總督に任命せられたやうで、この事が却つて英國統治の基礎を強化した事は疑ひを容れない。ベンガル州の知事ウエズレイが奴隸を鞭打つ如く、カルカッタ市の州政廳から印度人官吏を一齊に追放したのも、この當時の事であつた。

然し統治機構と勢力の確立は、必然これ等の英國人社會にもヒンズー社會を支配するカスト制度の影響を與へずには措かなかつた。即ち、彼等は印度社會の最高に位置する階級を構成するに至り、マツカレーなどはこの英國人社會を「波羅門階級の新種」と呼ぶに至つた程である。これは傳統と因襲を尊ぶ印度人社會に、新な憤激の種を蒔く事に外ならなかつた。形勢は果然險惡となつた。ウイリアム・ベンティンク總督（一八二八—一八三五年）はこの危機を回避すべく登場した人物であつただけに、前二者とは異なり、先づ印度人に對する理解と同情に出發し、英國人社會か

らがうがうたる非難を受けたにも拘らず、先づ印度智識階級の最も中心的な怨嗟的である英國人官吏の俸給削減——勿論年平均二千二百磅の高給を依然保障してゐるが——を斷行した。又言論の自由保障にも苦心し、コーンウォリスの政策によつてポイコットされた印度人官吏の採用を復活しやうともした。そのためメトカルフも、彼の統治方針に就て次の如く批評してゐる。

「若し彼が我々英國官吏の幸福がその収入の増加に比例して増加するかと聞かれたならば、彼は彼の信念に従つて否！と答へたであらう。何故なら我々は外國の征服者であり、印度民衆の我々に對する反感が自然増加して來るからであつた。我々は印度を單に力によつて保持し、力によつてのみそれを維持する事が出來たのであつた」

トレンスは、又次の如く述べてゐる。

「彼にとつて彼が世界最大の牢番人と見られてゐると考へる事は、耐がたい苦痛であつた」

かくの如く人道主義の假面を被つた彼の施政方針は遂に印度人の感謝を受けるに至り、見事危機を回避する事に成功した。彼は特に我々が第三章に於て言及した教育方針を以ても有名である。

これ迄に述べた近代統治機構の整備——言ひ換へれば自由主義的政治から官僚政治への轉換は何故起つたかと言ふと、それには勿論種々の原因があつた。然しその中でも最も有力な——或はこれこそ直接の動機となつた事件は、かの有名な一八五七年の印度兵の叛亂であつた。

この印度兵の叛亂を英國の、そして世界の歴史家は、單なる一部軍隊の叛亂と見てゐる。然し我々にはこれを過大に評價する事なくして、實に英國に對する最初の反英運動であつたと言ふ事が可能であらう。勿論この叛亂が全國的

に組織された叛亂であつたかどうかは疑はしい。或は單に時を同じうした叛亂の自然發生的に連続したものに過ぎなかつたかも知れない。然し少く共この叛亂は、單に英國軍隊のみならず一般の英國人社會をも目標とした事、烽起した軍隊にヒンズー、回教を問はず共に参加した事等によつて、本質的に反英運動であつたと言ひ得るであらう。この叛亂によつて、印度各地には流血と殺人の修羅場が現出した。従つて英國人はそれに千倍する惨虐さを以て印度人に報ひ、彼等に對するこれ迄の考を一變せざるを得なかつた。

然し狡猾な英國は、飽く迄も英國である。その本國小學校に使用する國定教科書には、自己の暴虐と壓政によつて導いたこの暗黒時代を、印度人の蠻性と無智に歸し、野人ガンディを師の如く熱愛するラスキンすらもが、憤激の餘り次の如く叱鳴つたのである。

「人類がこの世に罪の道を辿り始めて以來、たつた今幕を閉じた昨年度の印度人の行動程、あらゆる獸性を表現し、その獸類にすら劣る墮落を表示したものは、未だかつてないと言へやう」

これに對してJ・T・ジョージ教授は、その著「印度に於ける英國人」に於て、印度兵叛亂事件の主因をなすのは「印度に住む英國人の智的便祕、精神的亂視、民族的精神錯亂」の三つであると主張してゐる。事實、この英國人の亂視と精神錯亂は事件終了後に於ける暴虐さによつて今なほアラハバットやカウンプルの各市に聳へる英國人犠牲者のそれに對するより大きい今一つの印度人犠牲者の記念碑となつて残つてゐるのである。又、エドワード・トムプスの著書「記念碑の裏面」には、叛亂主謀者と目される印度兵が事件終了後、生きながら大砲の砲口に縛付けられて發砲せられ、一瞬にして一塊の肉片に化した凄惨な慘話などが満載せられてゐる。

「又英國が事實の歪曲に如何に巧妙であるかは、これに先立つ一世紀前の「黒い穴」事件によつても立證せられるであらう。知られる如くこの事件は、一七五六年六月モガール帝國のベンガル大守シラージ・ダウラが五萬の兵を率ひてカルカッタを陥入れ、逃げ遅れた英國人百四十六名を要塞の穴倉に檻禁、一夜にして二十三名を除く百二十三名を暑さに蒸殺したと言ふので、現在カルカッタ市の目貫きクライア街の中央廣場に、事件を追慕する花崗石製の豪奢な記念碑が聳えてゐる。所が最初から疑問を以て見られたこの事件は、最近もカルカッタ市歴史協會によつて組織的な調査が行れダウラのカルカッタ占領は事實であるが、「黒い穴」の名を以て知られるこの虐殺行爲は全く政治的意圖の下に英國側によつて捏造せられた事件であると協會を代表してヒューマン・カビール教授が發表した。然しそれが事實とすればこの記念碑は印度人に對する侮辱であるとして、ベンガル會議派の巨頭チャンドラ・ボースがその撤廢方を叫んだ時、彼は昨年七月大戦下の治安を亂す行爲をなりとして逮捕せられてしまつた。然し偽は眞に勝たず、ボースの檢擧後僅か二ヶ月にしてベンガル州政府は、遂に問題の政治化する事を恐れて移轉する事を承諾した。

かくて誇大に本國へ報告せられた叛亂事件は、これ迄も切れがての理解の糸をブツツリ切つて、印度は完全な植民地の地位へ轉落しなければならなかつたのである。

二、統治方針の史的變遷（その一）

この事件後の對印政策を明確に規定した最初の人は、印度事務相サー・ジエームス・ステファンであつた。彼は常

に「英國の印度支配の持續」と言ふ術語を使用し、「印度の眞の利益」と言ふ假面の下に新政策を強行した。かくて印度支配の初期に見られる如き英國人官吏の政策批判も、「印度の眞の利益」に反すると言ふ理由で禁止せられ、勢ひ本國への政府報告も獨斷的、反動的となつて行つた。政策の實行は理由を説明せず、命令せられるだけであつた。

最早や民主主義政治の面影は姿を消し、官僚政治の全機構が完成したと言ふ事が出来た。官吏も次第に無氣力となり、後に印度相となつたモンターギユの如きも、「印度の官吏は餘りにも長い間、理由を説明せずして結論だけを述べる習慣に慣され過ぎてゐる」と述べてゐる程である。

この統治方針は、その後次第に勢力を獲て來た民族運動に對抗する必要上、強化せられる一方であつた。數次の闘争によつて向上した印度民衆の政治意識は、痛烈に政府の政策を批判し始めたので、その官僚機構はそのまま抑壓機關に轉ぜざるを得なかつた。印度兵叛亂事件の生々しい記憶が、本國をして在留英國人が如何に危険な地位に曝されてゐるかと憶測せしめたので、この上には非常に都合がよかつた。何故なら萬一印度政府に民衆への同情をほの示せば、必ずや危険な民衆は第二の要求を提出し、聞かざれば結局民族主義者と社會主義者に共同戦線を張らしむるだけでは濟まなくなると信じたからである。

この官僚機構の完成がかかる反動的意味を持つものである限り、その機構の一部を構成する印度人官吏の社會も、又印度の獨立を目指す一社般會から遊離せざるを得なかつた。事實、印度人官吏はそれ自身「獨立」と言ふ代表的感情を持つ中産階級の出身者であるにも拘らず、その社會は今日完全に一般社會から遊離してゐるのであつて、如何に

それが轉向者と言へ、一旦獨立運動に参加した一切の者を拒絶する極めて高い障壁さへ設けてゐる。現に一九三七年度の優秀なるケムブリッジ大學卒業の印度人が、全くこの理由によつて官吏登用試験の受験を拒絶せられた。

かくてこの統治方針の性格は、その本質に於て些かも變化がなかつたが、とも角もその後三轉しなければならぬ事情が起きた。一九一四年に始まる英國覇權の衰頹がそれである。即ち英國貿易の減少は、本國をしてその傳統的な自由主義貿易を拋棄せしめ、一九三二年のオタワ協定を餘儀なくせしめた保護貿易に轉せしめた上、一九三一年の金本位制拋棄によつて世界金融の覇權をもアメリカに讓渡してしまつた。従つてこれに先立つ事數年、失はれんとする世界覇權を維持せんとす努力は英本國の大きな苦悶となつて現れ、そのためにはこれ迄壓迫に壓迫を重ねて來た屬領との妥協をも辭せない形勢となつて現れて來た。即ちこの傾向は印度に於ても、一九二七年のサイモン委員會以後強く現れてゐる。

勿論それは英國が統治者として矜持を失はない程度の極めてつましやかなものではあつた。然しそれ以後の妥協過程が極めて急速に進み、修正印度統治法に基く一九三七年の英領十一州の自治實施となつた。かくて行かれた自治州の總選舉の結果、印度統治史上最初の印度人内閣が出現し、行政官廳の英國人官吏に直接命令を下す事になつたのである。それは正義の假面を被る英國人の等しく屈辱とする所で、更にその屈辱は更に中央の統治形體にも及ぶ筈であつたが、危機は今次の歐洲大戰を迎へて一應避けられた。然し國民會議派内閣の辭職に當面しては、早速自治七州の統治權も完全に奪回し、これ迄の妥協も要するに政治上の技術的問題に過ぎず、英國統治の中心をなす官僚機構の本質には些かの微動もない事を示した。

然しこれ等自治州に國民會議派或は回教政黨を主體とする内閣の出現した時、或る英國人の灌漑監理官などはこれ迄幾度提出しても却下せられたダム計畫が、ただの一度で採用されたと言つて狂喜し、或る山林監督官もその仕事に對する州政府の理解を喜ぶ餘り、俸給は一錢も要らぬと陳情した程である。又これ等印度服を着た色の黒い閣僚が英官僚機構の中心をなす官吏及警官に命令する姿は、確かに奇觀であつたには相違ないが、決して彼等には英國人にラチャリなど、それ處かこれ迄の英國人にまさる行政手腕を發揮し、英國人社會との關係も極めて圓滿であつたと言はれてゐる。従つて英國人であるマドラス州行政長官や聯合州の知事など、印度人閣僚から贈られた印度服を着て登壇する姿の方が、それよりも遙かに奇觀であつた。何故ならこの場合の行政長官や知事は、印度人閣僚の好意を喜んで、これ等印度服を使用したものではなく、この印度服を飽く迄も政治的に解釋し、それを使用しなければならぬ客觀情勢に憤慨しながら、無理矢理英國人特有の融通性と諧謔を立證しやうとした結果に外ならなかつたからである。従つてこの一事を以ては、決して英國人の中に潜む傳統的な慘虐性の解消した事を意味するものでなく、却つて行政の技術的變化に官吏を適應せしめる事は容易であつても、決してそれだけでは政府の政治的性格迄變化せしめる事にならないと言ふ眞理を如實に裏書してゐるやうなものであつた。然し少く共この一事によつて英國も印度の民族陣營に多少共敬意を表せざるを得なくなつたと言ふ事は認め得やう。

これ等の英國人官吏は、依然今回の大戰下に於ても、印度民衆より超然たる存在である事を示す幾つかの實例を提供してゐる。例へば大戰直後、印度の物價政策が全面的に破綻した折も、中央政府は一、二の特定物資に價格の釘付

けを行つた外、これを州政府への委任事項として全く放任し、印度民衆を塗炭の苦しみに陥入れた事や、その本國が浮沈の境をさまふ時、中央政府以下植民地印度の英國人は悉く平然として避暑地行を續けてゐた事などが擧げられるであらう。殊に後者は印度に住む官吏社會の最も特徴をなす事務怠慢と印度民衆に對する傲慢な民族意識を意味するもので、彼等は太陽が北上して所謂「乾季」の始まる三月になると、一齊に各地の避暑地に移轉し、暑さに茹る平地の行政官廳は一齊にガラ空きとなつてしまふのである。而もエラム大尉の如きはその著「自治」の中にこの避暑地行を政治的に辯護し、「歐羅巴人である限り、夏には宜しくこれ等の高原に避難すべきである。かくする事によつて、平原の暑さと同時に、民衆或はその政治的要求たる獨立運動の指導者との接觸も避くべきである」と主張してゐる。従つてそれに政治的意味の含れてゐる事は事實であらう。然しこの時燃ゆるやうな暑さに包まれた平原には、金を持たぬ數億の印度民衆の残る事を忘れる譯にはゆかない。又その一例を、印度でも最も中心的な避暑地であるシムラにとつて見やう。するとこのシムラと言ふ海拔八千呎の狭い山中には乾季を迎へると、中央政府や立法議會以下の各種政府機關を始めバンチャブ、中央、聯合等の各州政府が目白押しに軒を並べるのである。従つて此處で實際政治の開店は不可能で、印度の統治活動迄避暑してしまふ譯である。かくて起きる行政事務の澁滞は印度統治の痛であると同時に、例年民衆の圖り知れない憤懣の的となつてゐる。このため各州に印度人内閣の組織せられた時、興味ある現象が起きた。即ち彼等は英國統治の傳統を破つて州政府の避暑地移轉を拒絶し、英國人官吏にも又休暇に非ざる一切の旅行を禁止したからであつて、この事は遂に中央政府にもシムラ行を制限せしめるに至つた。

然しこの避暑地行も今回の大戦下に政府が再び實權を回収するや直ちに復活せられ、一九四〇年度の中央政府など防空を理由に記録破りのシムラ滞在を行つて興味をひいた。想へば會議派内閣の一齊辭職など、それ自身最も効果的な政治的抗議であつたかも知れないが、これを印度民衆の立場から言へば、技術的に拙劣な問題であつた。事實それを立證する幾つかの政治現象は、その後に於て表面へ現れて來てゐる。

三、印度搾取の諸形態

印度下層階級の解放のため、一生を戦つて死んだ一英人社會事業家は、嘗て英國の印度統治を酷評して「牛車と馬車の國に於ける高級自動車ロールス・ロイスの行政」と叫んだ事がある。

英國がこの牛車の國に於て何故ロールス・ロイスの行政を必要とするかに就ては、印度を支配する英國資本主義の中にその理由を求める事が出来る。即ち現地機關に課せられる投資利潤の保障と官僚搾取の保障が、最も大きな理由に算へられてゐるのである。

現在印度に對する英國の投資額は、正確に判らない。然し政府の發表では、全世界の投資額三十七億磅の約一・八%、即ち四億七千磅と言ひ、最も普通に引用せられる元ボンベイ商工會議所C・B・セイヤーの計算によると、それは一九二九年の過去に於て既に五億七千三百萬磅（註一）から七億磅の間と主張せられ、ダットその他國民會議派の經濟學者は五%の利潤を保障せられた十億磅、即ち邦貨に換算して百七十五億圓以上であると主張してゐる。

（註一）セイヤーの計算による五億七千三百萬磅の内譯（單位百萬磅）は、次の如く見積られてゐるが、これがその後如何に激増してゐるかは、フレドリック・グリーンFrederick Greenの計算で會社投資額が國外登録のものだけでも二億三千萬磅以上である一事を以

でも覗れる。ポンド拂政府負債二六二〇〇〇〇〇五五分利附戰時公債一七〇〇〇〇〇〇印度内登録會社投資額七五〇〇〇〇〇印度外登録會社投資額一〇〇〇〇〇〇〇

又英國の保障するその投資利潤を中心に、英國が印度から一ヶ年に搾取する金額も諸説があつて一定しないが、極めて古いシャール、カムバタ兩氏の一九二一—二二年度の計算に於て左の如く二十一億九千八百萬ルピー、邦貨に換算して實に二十五億六千餘萬圓と見積られてゐる（單位百萬ルピー）。

本國費 五〇〇△事業利潤 五三二△銀行手数料 一五〇△海運利潤 四一六△資本利潤 六〇〇△計二一九八
右表に明かな如く、英國資本主義はその最も特徴をなす金融投資以外にも、印度の各産業部門に根強く喰ひ込んで居るのであつて、それ等は一應金融機關、海運、鐵道の三部門に集中せられてゐる事が注目せられる。それが最も普遍的な英國の植民地經濟の支配形態であるからである。又右表は極めて古い統計である上本國費が過大に見積られる缺點を有してゐるが、若しその後起きた鑛山熱と世界的軍擴の開始を考慮に入れると、この線に添ふ英國の投資活動は特に製鐵、造船、黃麻工業の部門に著しかつたのであるから、少く共現在には三十五億圓以上と極めて常識的に見積る必要があるであらう。

然し右表に列擧された搾取項目も、その劈頭を飾る「本國費」を除けば、通常の資本主義活動に於て極めて常識的な項目を網羅するに過ぎない。ただ一つ奇異の感に打たれるのは、通常の國家間の活動にはあり得ないこの「本國費」で、この中にこそ近代的な印度搾取の謎が潜むと言はれてゐる。事實これは植民地と植民地所有國家の間のみあり得る搾取項目で、内容とする所は英本國が印度の統治上に必要とする一切の費用——即ち、本國に残る印度派遣軍隊

の費用及募集訓練費、本國任命官吏の俸給及年金、英貨公債の利子、政府保證鐵道株の配當、本國にて購入する物資代金等がこれに含まれ、一九三七年迄は本國にある印度ビルマ事務省の費用迄含まれてゐた。この金額は年々増加の一路を辿り、過去十ヶ年の平均金額は三千九百萬磅であつたが、一九三七年には遂に四千百十萬百六十七磅となり、邦貨に換算して實に七億萬を突破するに至つた。

又これ等の本國費が凡て貧困のドン底に啗ぐ印度民衆の負擔に於て賂はれる事が、同時に注意せられる。従つて昨年未無謀な大戰下の生産擴張によつて三億八千萬ルピーの大幅不足を來たした一般豫算（註一）やその全部を印度の負擔と義務づけられてゐる軍隊の海外派遣費（註二）の増大等をこの本國費と通算する時、極めて老大な金額となつて表現せられる。故に平時に於てすら英本國民の二倍に上る課税（註三）を強制せられてゐる印度民衆に今後もなほ負擔の能力ありや否やは大きな疑問であると見られ、ネールの如きもその著「世界史阿見」に於て、「印度人の背骨の折れない方が不思議である」と述べてゐる。

（註一）財務委員ライズマンは、昨年度の議會報告に於て、現在印度の國防費は一日二百萬ルピーに上り、昨年末に於て軍事費一億七千萬ルピー、一般生産擴張費二億一千万ルピーの不足した事を述べ、所得税及郵税二五%の大幅増税を斷行した。

（註二）これ迄の海外派遣費は原則として本國支拂ひとなつてゐるが一向實行されず、今次大戰下の印度軍隊派遣費も大戰當初四十萬磅を計上し、内十萬磅を借款形式とする外英・印折半と決定せられたが、その後本國財政の窮迫を理由に一向支出せられず、止むなく印度の支出となつてゐる。

（註三）一九三八—三九年度の豫算額は、中央政府一二億二七七萬ルピー、州政府八億五九七四萬ルピー、藩王國六億乃至八億ルピー、地方自治體二億五千萬乃至三億ルピーで、これを假りに三十五億ルピーと抑へる時、一人當納税額は九・五ルビ

一、邦貨約十二圓三十錢になつて丁度英國國民負擔額の二倍に當つてゐる。
 又この問題の本國費に於て常に國民會議派以下が不満を鳴らして攻撃するのは、この中でも特に不當な總督以下英國官吏の俸給である。事實、英國官吏はその非難も道理、印度と言ふ赴任地の不健康と印度兵の叛亂事件によつて印象づけられる民衆の危険性に對する本國の過信によつて、世界で最も高給を食ふ階級になつてゐる事は事實である。今假りに印度總督以下の年俸を月割にしてこれをルピーに換算した日、米兩國官吏のそれとを比較すると、次の如き興味ある數字を示すのである。

印度	アメリカ	日本
總督	大統領	首相
二一、三三三	一七、〇六二	七七〇
行政會議員	各部長官	閣僚
六、六六七	三、四一二	六二二
州知事	州知事	縣知事
八、三三三	五、六八七	四三〇
州最高法官	大審院長	大審院長
六、〇〇〇	四、五五〇	四二三
デリー市長官	ニューヨーク市長	東京市長
三、〇〇〇	—	八三四

右表にも明かな如く、在住印度英國官吏の俸給は、世界のドル國を以て知られる最も富裕なアメリカの官吏よりも高給である。事實、このドル國の大統領の報酬が、印度總督のそれより少いと言ふ事自體興味がある。然し印度總督とアメリカ大統領の場合は勿論、州知事の俸給に於ても印度は最高の八千三百三十三ルピーを得るパンジャブ州知事から最低の二千五百五十ルピーを得るオリッサ州知事迄が、アメリカ最高のニューヨーク州知事の五千六百八十七ルピー

一から最低の南ダコタ州知事の六百八十二ルピー迄、その悉くを凌駕してゐるのである。従つて、アメリカがその人口數に於て印度よりも少く、その國庫收入に於て印度に十倍するにも拘らず、國民の膏血を絞る官吏の俸給に於ても印度より少いと言ふ點は注目に價する。事實、一九三五—三六年の統計によるとアメリカの熟練工の月收三百乃至五百ルピーであつたのに對し、印度人熟練工のそれは僅か十八乃至六十ルピーであつて、國富の懸隔のかくも著しい事は勿論、生活程度の上から言つても多くの俸給を必要とする國が却つて少い事實の錯倒が平然と行れてゐるのである。

然しこの比較は、その本國たる英國との對象に於て、より甚しい懸隔を示す事は更に興味がある。事實英本國の人口は、知られる如く印度の一割二分に過ぎないのであるが、その國庫收入は一九三六—三七年度に於て印度の三一七倍に當つてゐる。又この時國民の所得は一人宛一日平均額が、印度人の二アンナ(邦貨約十六錢)に對して英國民は二ルピー(邦貨約二圓六十錢)と言ふ十倍余に當る貧富の差を示してゐたのであるが、その時の英國首相の俸給は皮肉にも丁度印度總督の半額にしか當らなかつたのである。これを換言すれば本國から派遣せられる屬領長官が、その上に立つべき監督官廳や首相の二倍に當る高給を食ひ、その一日の收入に於ても前者が民衆所得の九千倍をとる時、後者は僅か九十倍しかとらず、前者が税額千ルピー毎に一ルピーを搾取する時、後者は實に十萬ルピーから一ルピーを取るに過ぎないのである。又ベンガル州政廳英國人官吏の定員は戰前三百九十九名で、この平均月俸千三百一ルピーである時、本國官吏の平均月俸は僅か八百八十八ルピーであり、最高と言へ三千三百三十三ルピーを出ないのである。従つてそれが如何に植民地官吏の俸給であると言へ、直接植民地民衆の搾取の上に支出せられる俸給とし

ては全く法外であると言はざるを得ない。

この本國費は、右の如く印度統治機構の官僚的性格を最も顯著に表現するものと言へるであらう。然しそれ自身を持つ政治的意義に於ては決して代表的なものとは言へないのであつて、その點では英國が官僚機構の保障として印度人議員を含む立法議會に一切干渉せしめない所の印度の軍事豫算が擧げられなければならないであらう。

事實それが、本國の利益のために必要な植民地の平和維持を目的とする軍隊であれば、道義的にもその費用は本國の負擔すべきが當然である。然し事英國の支配する植民地に關しては適用されないであつて、印度が寧ろ敵とも言ふべき英國のために戦ふ海外派遣費すら彼等の自腹である事は先に述べた。然しそれに止らず國內に保有する軍隊の裝備その他一切の費用も又その九七%迄が彼等の負擔でそれを内容とする軍事豫算も最低總歳入の二三%を要求せられ、通常總督の責任事項として一般豫算から分離せられてゐる。然しながらそれが常に一般豫算を凌駕し、一九三八—三九年度には五億二千二百八十一萬ルピー、一九三九—四〇年度には五億四千八百五十萬ルピーに躍進し、更に大戰を迎へて昨年上半年期に一億七千萬ルピー、同下半年期に一億二千萬ルピー、合計二億九千萬ルピーの軍備擴張費すら民衆の負擔として計上せられてゐる。従つてK・T・シャーもその著「封建機構」に於て、印度の國防費は政府豫算の四割強を占め、これに公債利子を追加すれば實に六割六分になると述べてゐる。

而も印度軍隊の總數は、後にも述べる如く平時に於て僅十八萬九千二百人の常備兵員と四萬八百六十五名の豫備兵員を擁するに過ぎないのであるから、この老大な軍事費を浪費する英國防衛陣の横暴も又民衆憤懣の的となり、これを裏書する幾つかの記録も残されてゐる。例へば數年前の記録に於て、或る地方都市の病院には印度人五萬人に癩瘡

一臺の割合である時、その都市の英國駐屯軍には兵士十人に就き一臺の割合であり、ある都市に於ては普通病院すら一つもない時、軍隊のためには印度人の診察を拒絶する士官専門の病院、兵卒専門の病院及家族病院がある上、家畜病院迄完備してゐると報告せられてゐる。又スコットランド部隊が十數年前に駐屯した事のある或る町には、今なおその部隊專屬の長老派教會が残つてゐて、その風雨に錆付いた豪華な鐵の扉も徒に昔語りとなつてゐる時、その中には何一つ仕事もしない牧師八名が依然残つてゐて、主任牧師は五千ルピー、長老牧師は千四百五十ルピー、最年少の牧師ですら九百ルピーと言ふ高級を月々國防省豫算の中から支給せられ、歸らぬ部隊をばんやり待つてゐると言はれる。而もこの時印度の立法議會は、英國搾取の骨幹をなす六割餘の特別豫算には一指も觸れる事が出来ず、僅かに残る三割餘の一般行政費の審議權に満足しなければならぬのである。想へば狹隘な民主主義政治の正體であり、英國官僚機構の強靱さである。

四、英國人社會の構成要素

英國の印度統治は現在迄約三百五十年で、決して短い期間とは言へない。又その間に英國の統治方針が本質的に三回變つた事は先にも述べた通りであるが、これが又印度に住む英國人の個人的性格に大きな變化を影響したと言ふ事も否定出来ない。と言ふより常に本國社會との接觸に於て、その歴史的集積として表現せられる個人性格の變化が、却つてその統治方針を變化せしめたとも言へるのである。

然し興味のあるのは、この個人性格の歴史的變化には、彼等を本國と結ぶ交通手段の變化が同時に大きな役割を演

じてゐる事である。即ち具體的には、喜望峯を經由して印度迄に六ヶ月を要し、一四九七年から一六一二年迄の統計によると喜望峯を經由した船八百六艘の中四百二十五艘迄が沈没した時代と、ロンドンからカルカッタ迄の航空路に僅か三日しか必要としなくなつた時代の差の個人的性格——直接にはその生活に基礎を置く心理状態に與へた影響である。何故ならこの印度へ来る迄に六ヶ月を要した英國支配の初期に於ては勢ひ英國に永久の別れを告げ永住の覺悟で乗船しなければならなかつたからで、これが即ち印度へ來てはその印度に注ぐ激しい熱情となつて表現せられてゐるからである。

事實この熱情が初期の統治方針に反映した事は先にも述べた通りで、この當時の英國人の中には政略的意味もあつたかも知れないが兎も角も印度服を纏ひ、印度煙草をふかし、或は又印度哲學、或はヒンズー語の暗記に浮身を棄す者も決して珍しくなかつたのである。その代表者としては「植物學と梵語學者との交際」を最大の娛みとしてゐたと言はれるサー・ウィリアム・ジョーンズが擧げられる。彼はサンスクリットとアラビヤ語を學ぶ過程に、印度文化への興味を感じ、そのために雇つた波羅門教師も餘り多數に上るため食事を採る時間もなかつたと言はれてゐる程である。又當時のコーンウォリス總督に宛てても、「私は英國にゐた時も、決して不幸とは言へなかつた。然し印度に住むやうになる迄は、一度も幸福と言ふ事を知らなかつた」と言ふやうな手紙を送つてゐる。

又「私は今その門を叩いたばかりのサンスクリット鑛山を、このまま開發しないで残す位なら、寧ろ病氣になつて死んだ方が増しだ」とも言つてゐる。

この熱情は兎も角も斷續的ではあつたが、十九世紀の前半迄續いて、英本國のため印度支配の基礎を築いたやうである。事實次々に來る英國商人も、ボンベイやスーラット商人と軒を並べ、貴族的な本國のヅクトリア王朝よりモガール王朝の方が遙かにまじだと、減らず口を叩く者もゐた。サー・エドウィン・アーノルドの如きも、その著「アジアの光」に於て、限りなき佛教への愛着を描き、ヅクトリア王朝特有の誇張的言辭を用ひてではあつたが、兎も角も印度との別離の詩を發表し、印度人を「太陽の國々の人々」と迄讃へ、後世にはその亞流としてカーゾン、ロナルド・シャイ等を生んでゐる。

然し交通機關の發達は、彼等と本國の距離を短縮することによつて再び斷ち離れ故國への思慕を彼等の胸に湧立せて、これが今度は印度への嫌惡となつて表現せられる時代が訪れたやうである。又これを更に悪化する幾つかの物的條件も起きて來たやうである。例へば本國に於ける紡績業の發達によつて印度に氾濫するランカシヤ製品は遂に狡猾な印度商人と柔順な農村手工業者を膝まづかせるに至り、この經濟的優越感が更に文化的優越感とも結付いて、前記の印度輕蔑乃至は嫌惡に拍車をかけたからである。然しこれは又印度支配の政治力が確立するに伴ひ、彼等の間に復活した國家意識の表現とも言へた。

この一派の先頭に立つのは、在任當時、英國の華かな文化を想ふて氣の狂ひさうになつたと言ふマツカレーで、彼は一生印度に住んでも幸福と感ずる日は一日もないであらうと叫んだ後「熱帯地方のあらゆる果物を集めて山と積んでも、恐らくコンヴェント・ガーデン（譯註、ロンドンの青物市場の所在地）の一籠の果物に及ばないであらう」と述べ、「カルカッタの宮殿とは言へ、ロンドンの裏町の屋根裏にも劣つてゐる」と言つたやうな言葉を吐く事によつて、ジョーンズと全く正反對の立場に立つてゐた。このマツカレー流の嫌惡は、しかし又彼等が到る所で見せつけら

れる印度人の不潔と貧困が一役買つてゐる事も事實で、今日彼等が印度人と接觸する場所に於て椅子に腰を下ろす姿はめつたに見られない。然しこの傲慢さと偏狭さも、印度の過去に花咲いた雄渾絢爛たる文化を背景として見る時、如何に英國人社会の内容が空虚で貧弱で、からくもその體面を保つてゐるのがその背後に持つ政治力である事が一目瞭然としてゐる。従つてこの矛盾は往々個人生活に於ても飛んでもない破綻を生じ、例へば炎熱百二十度と言ふカルカッタのあるアバートの軒下、傍に印度人ボーイがゐるばかりに夜會服を着込み汗だくとなつて夫妻差向ひで夕食の食卓を圍む英國人の姿など往々に見る所である。

然しかうした東洋的なドン・キホーテには印度の智識階級もあきあきするやうになり、一九三二年以降の立法議會など、——オタワ協定をめぐる紛争と民族運動の擡頭を主要原因として——全く政府議案を審議する政治殿堂である事を止め、これを揶揄しこれを嘲笑する場所と化してしまつた。従つてこれ以後英國人社会の權威は現實に轉落への一步を踏出し、これを喰止めんとする一聯の努力が英國側によつて企圖せられるに至つた。その先頭に立つのはアーウィン總督（一九二六——三一年）であり、これに續くのが現在のリンリスゴウ總督（一九三六年—現在）である。知られる如くアーウィン總督は、歴代中の總督中最も印度民衆から愛された事に於てリッボン總督（一八八〇—八四年）と併稱される人物で、その併稱せられる所の理由は、彼が一九三一年のアーウィン・ガーデー協定を以て著名である如く、始めて統治者としての威嚴と高踏性を捨て、ガンデーと政治取引の口座を開いた最初の人であつたからに外ならない。又リンリスゴウ總督は、一九三八年オリッサ州知事がその旅行に際して行政長官を知事代理に任命した折、その下位に立つ事に不満な同州會議派内閣が辭職問題を起した時から、このガンデーとの取引を開始してゐる。

又この取引は更に同年二月の聯合、ビハール兩州に於ける政治犯人釋放問題をめぐつて兩州内閣の辭職問題の起きた時も繰返され、今次大戦を迎へては更に英國の死命を制する印度の參戰問題をめぐつて前後七回もこれを繰返してゐる。この最後の取引は、結局何等の具體的な政治結論に達せずして、今日に至つてゐる。然し英國人社会ではこれ等を契機として印度人をこれ迄の如く「裸の野蠻人」と呼ぶ事を禁止し、マツカレ—亞流の影も一應は表面から消えるに至つたのである。そしてこれは英國人社会と印度民衆の相對的關係に於て、後者の力を具體的に表現する印度民族運動の擡頭と云ふより寧ろ前者の力の喪失によつて起きてゐるのであるから、結局これは彼等の威嚴の現實の拋棄でなくて何んであらうか。

然しこの權威の拋棄も未だ政治上の技術問題の範圍として、所謂英國人社会の健在を説くとすれば、それは取りも直さず英國官僚機構の健在を説くものでなければならぬ。印度に於て、英國の官僚機構の支配力はそれ程大きいのである。然しこの官僚機構をしてその權威を維持せしめるものは、取りも直さず現實に英國人社会を構成する各種の要素——例へば商人、軍隊、警官、宣教師等であつて、これ等の擔ふ役割も決して輕視出來ないのである。

この中商人はこれを狹義に解して所謂中小商工及貿易業者の概念に於て考へるとすれば、一ヶ年に彼等が印度から搾取する商業利潤は英國搾取額の九分前後、即ち九百萬磅となる。又これを廣義に解して苟も經濟面に關係ある一切の要素、即ち印度を本據とする産業資本家をも含めて考へるとすれば、その經營部門は印度紡績業の七割五分とタタ—印度財閥の經營する製鐵、水力電氣、一九三〇年以後の製糖業の六割五分を除く全部門に亘り、その投資額も國內

登録の會社で前記の如く七千五百萬磅、國外に登録するものを合すれば實に三千萬磅を突破し、それ等の擧げる利潤も年二千三百萬磅、即ち英國總利潤の二割二分に當つてゐる。彼等は言ふ迄もなく、英帝國の今日を築く英國重商主義の正統を受つぐ者である。従つてこの莫大な數字は、取りも直さずこの重商主義の英國人社會に占める重要性を物語り、今なほその生命線である事を示してゐる。

この英國人が主力を注ぐ商業部門は、茶、黄麻、棉、機械製品、雜貨の五部門である。然しこの中黄麻、茶を取扱ふカルカッタ商人と棉、機械製品、雜貨を取扱ふボンベイ商人の間には、極めて對蹠的な性格の差異を見出す事は興味がある。即ちボンベイ商人は印度人商人と軒を並べて店舗を開く事を些かも意とせぬ民主主義的性格が極めて強いのに對し、カルカッタ商人は極めて高踏的である。例へば一九三〇年市民不服従運動の最も酷な折、機を見るに敏な一英國人青年は街頭デモに繰出す民衆を顧客とする晝飯の屋臺店をボンベイに開いて大儲けした折も、これを英國社會の面汚しと叫んで憤慨したのもカルカッタ商人であつた。このカルカッタ商人の高踏性も、好意的に考へれば英國人社會の傳統たる重厚性の表現と言へるかも知れない。然しかうした高踏性が、激しい現在の經濟活動に於ては、彼等の上に重大な危機を招く結果となつてゐる事も事實で、それ等は企劃や大衆性の創意を缺く結果となり、猶太系のアメリカ商人や愛蘭商人に地盤を食ひ荒される結果となつてゐる。ただ多少活氣を呈してゐるのは、最近盛んに領内の工業化を企てるバローダ、マイソール等一流藩主國を相手とする機械製品の賣込みと、ホワイト・ウエー、ホールアンド・アンダースン等大規模の商業資本で經營される百貨店程度であるが、この後者も又全東洋の規模に經營されるもので印度特有のものではない。又この上に立つて印度に生れ、印度に育つたサッスーン財閥の如きも、一九三〇

年以後は過酷な營業税を脱れるため、その本據をわざ／＼ボンベイから上海へ移した事が注意されなければならないであらう。

かくて印度に活動する商人階級の最も重要であつた時期は、過ぎたと言ふ事が出来る。然しこれに反して第一次大戦以降特に重要な地位を占めて來たのは、非生産的な階級ではあるが、軍隊である。殊に今次大戦の如くスエズ運河の閉塞によつて本國から孤立した今日、彼等の任務は單なるインド防衛から全東洋屬領に擴大せられて、一段と重要性を増して來た。その兵力は一九三七—八年度に於て、左の如く英國兵五萬六千四十三人、印度兵十四萬二千二百五十三人であつた。

印度の常備兵力

司令部	英人士官	同下士官以下	本國任命の印度人士官	その他印度人士官	同以下士官	予備兵	その他
司令部	六〇五	四四六	一六六	三三	一三五	三〇、九三	一七、六六
戰團部隊	三、五七四	四六、八五六		三、七三〇	二六、八〇		
訓練機關	一〇七	一九三		六	九		
教育機關	七	一六五		四九	三		
輻重部隊	二〇五	二六三		二六六	一三、〇七		
軍需部	二四八	七五九		三			

軍醫部	八二六	七五	五〇			
獸醫部	四三	四	一三			
馬政局	二九	一〇	九			
その他	三三八	八七	一三九			
邊境部隊	二二	三七	七			
合計	六二六	四九、七五	二九七	三、九七一	一三七、九五	三、九七
						一七、六六

然し右表の數字の中、一九三九年三月以降は豫算の關係で英國兵が約一萬人減少したため、その數字を四萬六千九百四十二人と訂正しなければならない。又準印度軍と見られる藩王國軍は約四十九ヶ國に組織せられ、駱駝隊を含む公稱五萬一千人、實數四萬六千六百三十七人がゐるので、これ等を綜合する時その兵力は約三十七萬六千七百七人となる。又今次大戰に際し本國より派遣されたチャッターフィールド軍事委員會は、印度に内亂の起る可能性なしとの錯誤に基き、兵力四倍の擴張に着手し、昨年末迄に五十萬とする筈であつたが、國內政治情勢の悪化に伴つて本年六月迄に延期を餘儀なくせられ、海外派遣部隊も本年三月末迄に第一次大戰當時の百二十萬に比し僅か十七萬四千入しか送り得なかつた事は皮肉である。然し以上は陸軍の兵力であるが、通常これが印度軍と呼ばれる場合には次の三種から成つてゐる。

- イ、海軍、總トン數十六萬トンを超えないスloop艦五隻、巡邏艇一隻、測量艇一隻、母艦一隻
- ロ、陸軍
- ハ、空軍、八ヶ大隊、一飛行廠、二飛行學校、兵力(士官英國人二四六、印度人一九)、下士官(英國人一九二六、

印度人(一一六八)、合計三三五九人

又右の中海軍はイギリス海軍と協定の上、平時は港灣、海岸線の保護に任ずるのみで、戰時に於てのみ、海洋の警備に當る事になつてゐる。又陸軍は次の三部隊から編成せられ、全國的には東、西、南、北の四軍管區に分れてゐる。その三部隊とは第一に州クエツタその他に軍司令部を置く國境軍で、二ヶ師團の國境守備軍と四ヶ師團の野戰軍から成り、現在海外へ派遣せられてゐるのは主としてこの部隊である。又第二は國內の秩序維持を目的として全印に配置する部隊であり、第三は英國人及英印混血兒の義勇兵から成る補助軍、インド地方軍、各州の州自衛軍等である。以上の如く印度の廣大な面積に比して三十七萬と言ふ兵力は、一見極めて寡少の感を與へるかも知れない。然しそれは一朝事ある時、直ちに全英帝國から無限に集る兵力の供給網を持つ事と、英本國の兵力自體平時は二十六萬を超えない一事によつて否定せられる。寧ろ印度軍の現在腦みとする所は、その兵力の保有量問題ではなくて、英本國との間に矛盾する關係とその印度人部隊の間になる各種の不滿問題と言ふ事が出来る。事實、英國がこの印度軍の維持に對して年三%の補助しかせず、残る九七%は全部印度の負擔である事は先にも述べた通りであるが、この九七%の中からは英國が印度に派遣すべき地上及空軍部隊の募集、訓練、裝備の一切——これは對人數補助費(Capitation Grant)と呼ばれる——を支出しなければならない義務を負つてゐるのである。従つて印度軍はその老大な軍事費に比して、自己の質的向上及兵力の増員を經濟的に著しく制限せられ、今次大戰の直前など避け得ない軍の近代化に費用を喰はれて兵力の點では前記の如く一萬人近くも減少せねばならぬ矛盾に陥ちたのである。又この點は印度の軍事豫算が總歲入の二三%を超え得ない嚴重な制限があるためこの經濟的な點と、今一つ印度

軍に課せられた作戦の性質上、必要とする軍の近代化自體迄著しく制限せられてゐる事情がある。印度軍に課せられた作戦の性質とは、山の多い國境軍はトラックによる輸送以外機械化部隊の使用を本質的に拒絶してゐる事であり、國內部隊も又殺人よりは秩序の維持を目的として民衆の鎮壓を任務とするため、これ又本質的に機械化部隊を拒絶する事である。従つて現在の如く印度軍の任務が、急遽自主的防衛に轉ずる場合には、その必要とする近代化途上に大きな障壁を投げる譯である。又この事は英國の印度に派遣する部隊が相當數あるため、今次大戰當初英本國軍の機械化途上にも非常な影響を與へた事が、王立國際問題研究所によつて素直に指摘せられてゐる。

又印度人部隊の不滿とは、その人種的偏見とそれに基く待遇の不當である。事實英國人と英印混血兒、英印混血兒と印度人の間には天と地程の待遇の差があり、更に印度人士官が英國のサンドハースト士官學校へ入學を許されるやうになつた一九三一年以後にも完全に解消されず、その待遇の差は昇進、地位の領域に迄及んでゐる。従つて英國側としては、平時からソ聯に備へる國境の守備とこの印度人部隊の叛亂に備へる二面作戦を餘儀なくせられてゐるのであつて、この後者のためには一九三六年迄は純印度人部隊の編成を許さなかつた。又軍司令部以上の軍令關係には如何に優秀な印度人士官と言へこれを採用せず、叛亂の場合有力な敵の武器に轉化する危険のある機械化部隊には出来るだけ印度兵の使用を避けてゐるのである。又藩王國に對しても二名宛の軍事顧問を派遣し、通常印度軍を入れ得ないその國の戰略的要地も又條約によつてカントンメントと稱し、軍隊の半永久的駐屯地として押へてゐるのである。然しそれにも拘らず印度兵の不滿は事毎に爆發し、彼等への依存の度を高めた今次大戰の前後にも既に二回その事件を見てゐる。即ち一九三九年八月始めて新嘉坡へ派遣された部隊の叛亂がその一であり、本年五月一日イラクに上陸

した部隊の叛亂がその二である。殊にその二は、次の點に於て注目せられる。その印度の大半を占めるヒンズー教徒がカストによる職業の制限によつて軍人になり得る者が極めて制限せられてゐる時、現實に印度兵の主力を構成するのが回教徒、特にバンデヤブ州の回教徒であると言ふ事である。即ちこの事は、同じ宗教的紐帯に繋がる近東諸國の作戦に彼等を使用する場合、深甚の注意を英國側に促す譯で、この點彼等の非常な惱みとも言ひ得るであらう。

彼等は現在これ等の惱みを押切つて、全東洋屬領の防衛に任ずべき軍の自主的編成と近代化に努力してゐる。それは數回に亘る軍備擴張費によつて空軍、戰車、砲兵の三者を中心に進められ、特に騎馬タンク隊、教育養成機關の充實を特徴としてゐるやうである。然しその詳細を論ずる事は、本章の任務ではない。たゞその結論を生むための参考として從來使用せられてゐた軍事豫算の内譯を示すと、例へば一九三八年度の四億六千八十四萬六千七百九十は、海軍に八百八十九萬五千七百九十、陸軍に四億六千六百五十九萬五千七百九十、空軍に二千九百九十六萬三千七百九十に八百八十九萬五千七百九十、陸軍に四億六千六百五十九萬五千七百九十、空軍に二千九百九十六萬三千七百九十に四百九十二萬三千七百九十が使用せられてゐた。その總額が常に一般の行政豫算費を遙かに凌駕し、それが如何に浪費せられてゐるかは先にも述べた。極く最近の一九三七年度にもジャッパルポールに恥すべき事件が起き、一農夫の娘を凌辱した兵士が農民に發見されて袋叩きに遭つた時、近隣に野營する印度軍は復讐として、その村全部を焼拂つたのである。又最近も旅行中の一日本人が、同車した英國人士官の××的な行爲により、その士官の犬に寢臺を占領されて、車室を追出された事件も起きた。そしてこれは植民地軍に特有な、重商主義時代の名残りである浪費に伴ふ軍自體の素質低下として論ぜられてゐる問題である。

又印度政府は、この軍隊と併行する英國支配の保障機關として一九三六年度に二百四十萬人の警官を擁し、千四百二十萬ルピーの警察費を浪費してゐる。これは純然たる英國人社會を構成する要素とは言へないかも知れないが、とも角この警官數は軍隊に十倍し、この警察費が犯罪件數の極めて少い(註一)事に表現せられる溫和な印度民衆に對し、中央政府の支出する農業及工業獎勵費の實に十一倍、醫療費の又三倍に上つてゐる事は、注目すべきである。

(註一) 宗教心の極めて強い印度民衆の犯罪は、一九三七年度の調査に於ても左の如く政治犯罪を除けば、その人口總數に比し犯罪件數の少い事と犯罪性質の消極性を特徴としてゐる。

政治犯 一九、〇〇二▽竊盜 一七一、五一〇▽強盜 二、七七一▽殺人 八、〇八二▽家宅侵入 二六八、四八二▽その他合計五七一、三九三

右に明かな如く強盜、殺人等の件數は著しく少い。又件數も右は不起訴のものを含む故、これを除外すると起訴せられたもの僅か三八六、七二〇件であつた。

印度の警察組織は、極めて特異性を有してゐる。第一にそれは首都デリーの警視廳と内務部に所屬する中央情報局顧問部を除いて、中央政府は何等の警察を有しないと云ふ事である。即ち、警察は凡て州政府の所屬機關であつて、中央政府にはこれに干渉する權限がなく、嚴格な地方分權制度が守られてゐるのである。この州警察は通常警察、C・I・Dと呼ばれる犯罪調査部、C・I・B、即ち情報局の三つから成つてゐる。犯罪調査部は科學的犯罪捜査に當り、情報局は政治警察を擔當し、その活動は又別個に前記中央の情報局顧問部に統轄せられてゐる。

第二の特異性は、徒に警官數の増加に拘泥しないで、常に民間諜報網の整備と擴張に努力してゐる事であらう。事實、政府は一八六〇年のカンニング總督以來、都市人口千名に就き一人、地方に於ては一平方哩に就き一人と言ふ

僅少な警官數に満足し、その背後に龐大な諜報網を有すると言はれてゐる。その諜報網は調査部關係で部員の×倍、情報局關係で×倍乃至×倍と言ふ多數の諜報員を有し、これに軍關係の機關を加へる時は、單に數の上のみでなく、その規模その活動力の點に於ても東洋で最も大規模な、東洋的な神祕に包まれた諜報網と言ふ事も出来る。我々は印度の到る所の町角、タクシー、ビルディングの入口に於て彼等の姿を見る。彼等は凡ゆる社會層、團體、時にはマハラヂヤの宮殿にも見かけて、時にボーイであり、時に宗教上の長老であり、時に貴婦人である。彼等の見えざる恐怖の手に就ては例へそれが架空の小説であるにせよ、キープリングの著書「印度の放浪兒」に述べられた幾つかの戰慄的な挿説を思ひ出す必要があるであらう。

英國人は、その軍隊の場合と同様その首腦部を構成する事によつて、右の龐大な警察力を掌握してゐる。又單に首腦部のみならず、例へば州警視總監直屬の武裝警官隊(二百名前後)や科學調査の部門は英國人を以て組織してゐる。

然し支那に於ける場合と同様、英國勢力の先頭に立つて未開の印度へ先づ平和的進駐を試みたのは、矢張りキリスト教の宣教師團で、ネールもその著書に「國旗、冒險的商人、そして宣教師が先づ印度へ來た」と述べてゐる。従つて、彼等が今なほ保安的な英國人社會に占める重要な地位に就ては、これを歴史的にも否定出来ないのである。印度に於けるキリスト教の布教歴史は事實極めて古い。紀元四世紀頃には、早くも回教徒の迫害を受けたシリアのキリスト教徒が遙々逃れて西印度に定住した。又これに續いては、紀元五世紀より六世紀にかけ葡萄牙の植民地ゴアにカソリック宣教師が大舉移住し、今なほゴアに墓を残すフランシス・サビエルは、キリストの再來と仰がれた。然しその

本國の没落に伴ふて彼等の西印度に培つた勢力は衰へ、十九世紀初頭に代つて登場したのが英國の新教宣教師團であつた。従つて彼等の來印は、既に重商主義時代を終つて産業資本主義の時代であつたから、比較的最近の事とも言へる。

彼等は、印度社會から相手にされぬ不可觸階級やアングロ・インディアン社會を相手に自由博愛の精神掲げて奮戦した結果、僅か一世紀の間に六百二十九萬七千人（一九二一年調査）の印度人信徒を獲得する事に成功した。當時はその宣教師の中から教會の事業を拋棄し、直接印度民衆の間に生活したC・W・アンドリュウスの如き人物を生み、教會に附屬する學校や社會團體からもその自由主義教育の影響で、カリ・チャラン・バネルジイ、S・K・ルドラ、S・K・ダッタ、ジョージ・ジョセフ、ジョン・バプティスタ等の著名な民族運動の指導者を多數出し、ミラー博士經營のマドラス基督教大學がその牙城の觀があつた。

従つて英國が帝國主義の段階に入ると、最先きに反動化する事を要求せられたのは、彼等である。最近のチャーチタイムス紙上に發表せられた一神父の書簡にも明かな如く、一九二八年のG・I・P 鐵道の大罷業に於て、この罷業を直接失敗に導いたのは、宣教師團の命令によるアングロ・インディアン及印度人信徒の労働者による裏切りであつたのであり、今次大戦下に於ても國民會議派に對し一敵國をなす不可觸階級の指導者アムベトカー博士をキリスト教陣營に獲得する事によつて反英運動の切崩しを行はんとしたが、遂に失敗した。又彼等は彼等の接する下層民衆を通じてのみの狭い印度觀を歐羅巴に於て誇張し、印度の暗黒面と彼等の兇暴性を宣傳する事によつて、教會經營事業の資金と同情を集めんとするに至つたので、遂に彼等も印度民衆から見離されるに至つた。ヒンズー系の新聞は盛んに

彼等を「英帝國主義の理論的代辯者」と書立て、印度の智識階級は教會經營の病院、學校、社會事業團體から宗教的要素を驅逐せんとする運動を開始した。かくて大衆間の布教は現在アメリカ宣教師團が代つて擔當し、英國キリスト教は方向を轉じて新に據頭しつゝある印度産業資本家階級と結付かうとしてゐる。英國キリスト教の尖兵的役割は、最早や終つた。然しこの結付きに成功すれば、依然一威力たるを失はない。現在印度のキリスト教はナグプールに本部を置く民族キリスト教會議の下に統轄せられ、一九三九年度に於て、所屬百五十の宣教師團（英人牧師三百八十九名、印度人牧師七百十六名）と三百萬二千五百五十八人の信徒を十の州會議に配屬せしめ、新しいコムミュナル問題を印度に提供すると共に、左記事業を經營してゐた。

一、教育方面

單科大學五三▽高等學校三一五▽中等學校同上▽工業學校二二七▽教員養成所一〇三▽小學校多數

二、社會事業方面

病院二五〇▽施療所二五〇▽癩療養院六八▽避病院一一▽盲啞收容所一五▽農業セトルメント六四▽協同團體

三一

三、その他

新聞印刷所四〇▽その他産業三六

第六篇 宗教闘争

一、宗教闘争の現實と印度宗教の特質

ラホールは人口四十三萬、古き歴史的由緒に輝く西北印度の首都である。然し一九四〇年六月、この古都はその姿にも似ぬカーキの服を着たカクザール黨(註一)の事件で戒嚴令の下に置かれてゐた。町は午後八時以後は通行禁止で、日中でも彼等の立籠る舊城内へ行く者は、その入口で嚴重に武装した印度人巡查の身體検査を受けなければならなかつた。その夜ホテルでぐつすり寝てゐると、荒々しくボーイに起され「いよいよカクザール黨の検査が始まりました」と教へられた。急いで窓を開けて見ると、舊城内に當る夜空は眞赤に焼け、豆を煎るやうな小銃の音が遠くに聞へた。

元來このラホールのあるパンジャブ州は印度でも回教徒の最も優勢地方で、その州首相シカンドル・カーンも回教聯盟の有力者である。そのため同じ回教徒から成るカクザール黨事件に對しても煮え切らぬ態度を採つてゐたのであるが、こゝ數日シムラの中央政府へ呼つけられて嚴重談じ込まれてゐたと思ふと、いよいよ同黨の検査を決意したものでらしい。翌朝新聞を見ると、同黨の検査は西北國境、パンジャブ、シンドの各州に互つて一齊に行れたもので特にラホールに於ては軍隊も千人程出動し、催涙彈を使用して黨員二百三十名を検査、死者一名、負傷者五十六名を出し

た上、C・I・Dの同市局長デュランドも又重傷を負ふた事を知つた。

(註一) 一九三〇年當時の西北國境州教育長局イナヤチュラー・カーンによつてラホール西北バンドキ村に結成された回教徒の政治團體である。カクザールとは「土」を意味し、その目的とする所は回教の復興で常に赤地新月の黨旗を掲げ、目的達成のためには暴力を辭せぬ事の特徴としてゐる。この團體が今次大戰下に注目を惹くに至つた理由は、第一に同黨の組織である。即ちその結成の目的は前記の如く印度回教徒の腐敗を憤慨する點に出發してゐるのであるが、その組織方法に於てイナヤチュラーが嘗て獨逸に遊んだ事があつたため、ナチス突撃隊の組織そのまゝを採つた事である。即ち黨員の組織を指導者、現役、豫備、後援者とし、更に機密調査機關も持ち、黨員の服装もカーキ服にシヤベルで全く獨逸色に染んでゐた事である。

その二は黨員中に印度兵の主力をなす回教兵が七割五分を占め、有力な反英勢力を構成する危険性のあつた事である。

その三はシンド藩王國のラージャ・ミル・ヌル・フツセンが私財九十萬ルピーを投じたのを始め、ハイデラバッドその他の回教藩王國が續々自國のヒンズー教徒壓迫のため、同黨を後援し始めた事である。然し以上によつて、同黨の勢力は異常に發展し、黨員三十萬を擁するに至つたので、イナヤチュラーは「東の聖賢」と稱し、ラホール放送局、西北國境州の教育機關を占領せんと企てて檢舉されたため、残る黨員は寺院保護令の下にある回教寺院に籠つて氣勢を揚げてゐたのである。

勿論これは宗教社會に屬する一政治團體の檢舉であつて、所謂印度に喧しい回印兩教の衝突ではない。然し印度人口の五分の一を占める回教徒——その數は七千七百萬餘人で、イラン以西アラビヤ、トルコの所謂回教國々民を合した數より多い事が注目せられる——は、東のベンガル州を除けば殆んどその全部がこの西北印度に集中し、ヒンズー教徒に對抗し得る唯一の地方なのである。従つて兩派の勢力摩擦から起る宗教衝突は殆んど年中行事の觀があつて、現に本年四月もダッカに起きた衝突がアーメダバッド、ボンベイと全印に擴大し、遂にガンデイをしてこれが民衆の反戦空氣を他に逸らせんとする英國側の策動であると警告を發せしめた後、左の如く悲しませてゐるのである。

「現在印度の各地に起きてゐる回印兩教徒の衝突は、凡ての眞面目な人の心を暗くした、放火、掠奪、子供を含む罪なき人々の殺戮、數千の人々は既に命惜しさに家を捨てて逃出した。我々はかくする事によつて、英國に民衆彈壓の口實を與へ、我々自身これ等の地方に於て野蠻人であり、卑怯者である事を示したのである。これは余の特に遺憾とする所で、その暗黒の期間は余に國民會議派の勢力が事實上無視せられてゐる如く感じられる……従つて英國が萬一この事態に於て印度から引上げるとしても、國民會議派では爾後の責任を一切負ひ得ないであらう」(一九四一年五月七日附ガンデイ聲明書)

かうした宗教闘争の起きた場合、その町の情景は全く前記のカクザール檢舉當時と同じになるが故に、筆者は敢へてこれを冒頭に引用した。ただこの場合異なるのは、それが警官と回教徒の對立と言ふ形を採らないで、一方ではギラギラ光るナイフを磨く若い回教徒がゐるが思へば、一方では又ヒンズー寺院の暗闇に波羅門教徒が額を集めてひそひそ囁くと言ふ形を採るだけである。又戒嚴令下に商店の表を開け得ない日が長く續き過ぎるため町全體も飢餓状態に陥入り、その生産機能も一切停止せられると言ふ事だけである。

又この年中行事勃發の原因が何時も明瞭でない事も、この宗教闘争の一つの特徴である。或る時には回教徒のしめやかな葬儀の催される折、ヒンズー教徒の結婚式の興入れが鐘を鳴らして通りかかつて、騒動となつたと傳へられた。又或る時は回教徒の断食時期が、賑かなヒンズー教の春の祭、ホリイ祭と一致して事件が起きたと傳へられた。事實このホリイ祭は、好くこの宗教闘争の原因となつてゐる。何故なら、この祭日には奇麗に着飾つたヒンズー教徒が、何時も色水をかけ合つて喜ぶ習慣があるので、この折見物に現れた回教徒にうつかりかかつて、闘争の原因とな

る事が十指を越えてゐるからである。然し我々が過去の幾つかの宗教闘争を詳細に調べて見る時、何時もこの傳へられる原因の正體を正確に握り得ないのに對し、これを傳へて遂に觀念的實體とする所のデマが如何に大きな役割を演じてゐるかに氣附くのである。事實現在起きてゐる衝突も、それがアーメダバッドからボンベイへ波及した時その波久の原因はアーメダバッド回教寺院の前で牛を連れたヒンズー教徒が暴れ込んだと言ふのであつたが、これを國民會議派の調査した所全く根も葉もない嘘と判り、その衝突も主として戦時下の物價騰貴に基く回教暴徒のヒンズー商店襲撃と言ふ經濟闘争の形をとつてゐた事が判つた。かくてその原因をなすデマは、宗教的傳統を固守する印度民衆の無智による場合もあるが、それよりも寧ろ分離統治と言ふ傳統的政策を宗教社會へも適用せんとする英國側の作爲による場合の方が多いのであつて、二者に共通するのはたゞそのデマが、彈丸的速度を以て實體化すると言ふ事だけでも言へるのである。

現在起きてゐるのを除き、こゝ十年内に起きた大きな衝突は、ボンベイとカウンボールの兩市に記録せられてゐる。殊にカウンボールに於ては、一九三一年度に死者四百名、負傷者千二百名、焼失家屋五百餘軒を出して、その損害の最低見積り額も二百萬ルピー、即ち二百六十餘萬圓を超えてゐた。従つて宗教闘争の眞の原因を糾明する事は、或は印度のために緊急缺くべからざるものであると同時に、第三國人たる我々にして始めて可能な問題であるかも知れない。然しこの義務の遂行に當つては、常に「印度とは異教徒さへ見るとナイフをふりかざして喉首に飛付く野蠻國だ」と言ふ印象を與へる報告書を本國へ提出してゐる印度政府の態度と、印度の特異性を持つ宗教自體の認識を必要とする。

印度の宗教の中特にヒンズー教は、常にそれが單なる信教でなくて、信教、種族、社會組織、國家の四要素を不可缺とする社會組織の實體である事は言ふ迄もない。事實ヒンズー教は、その社會に於て最高地位を占める波羅門階級の單なる生活信條でもなければ、知性にのみ訴へる合理的信教でもない。それは古代印度の社會形態や制度の中に強く表現されて、著しい政治的性格を持つ事を知る。又その哲學的内容もアニミズムの最も低い形態から汎神論的哲學の達し得る最高の點迄含んだ複雑なもので、例へば南印度に多く見る偶像の誇張した裝飾の如く非常に念入りな形式主義があるかと思へば、それと同時に、個々の魂の教化問題のみを取扱ふ素朴な精神主義をも併存せしめてゐる。又それは社會的に高尚な文化陶冶の役割を果す一方、呪ふべき迷蒙とバーバリズムを併存せしめて、批判的宗教であるよりは寧ろ綜合的宗教の實體である事も示してゐる。即ちそれは征服者の宗教であり、その統一と統合を可能ならしめるものは、言葉を換へて血統、傳統、土地の三要素であると言ふ事も出来るのである。

傳統とは、日常生活の一切を處理する行動の基準であつて、それは本能的に受容れらるべき本質を有してゐる。然しそれはヒンズー教に於て教義の不變性から生れたものでなく、社會的環境の不變がその習慣制度を固定し、存続せしめてゐるためである。又宗教の眞諦をキリスト教に於てキリスト、回教に於てモハメッドを感情的、意識的に教養上の最高地位に受入れる點にあるとすれば、改宗の最大條件は信仰の受諾とこれを生活規範とする事の實踐にある譯であるから、この時には別段血統が問題とならない。然しヒンズー教の如く過去の傳統にのみ執着して、その間に信仰形式の一定してゐない宗教に於ては、民族的血統が重要な要素となつて来る。かくてヒンズー社會に於ては民族的血統を基礎として注意深く決定せられた四つの身分、即ち波羅門(僧侶)、クシャトリア(武士)、ヴェーシヤ(農商民)、

スードラ(奴僕)が、傳統的習慣及制度の内容を形成したのである。従つてそこには最早や改宗者を容れる餘地なく、若し何等かの方法で改宗者或は異階級のもものがまぎれ込むとしても、ダットがその著「印度の民族性」に述べる如くその眞の適應は不可能なのである。

「生れつきその宗教或は階級の者でない者でも、表面だけその宗教的教養をまねる事は出来るであらうが、その血統の變更によつてその宗教或は階級にふさはしい衝動、反省、本能を持つに非ざる限り、その宗教或は階級への適應は不可能である」

然しかの如く排他的なヒンズー社會にも、長い間の種の紛糾や祖先の混同によつて、最近はその血統の純一性が著しく失はれ、同時に嚴格に規定せられた四階級も二十餘階級、三千餘の副階級に分れ、宗教的、職業的、民族的三カストの混合體となり、この中特に職業ギルド的性質の著しくなつてゐる事は、注目に價す。

然しその保守的一面は、土地への愛着に於て最も強く残つてゐると言ひ得るのであつて、その土地への執拗な愛着は、海外に赴く折遙々バレスチナの土を携へて行くと言はれてゐるナーマンよりも強く、生れ故郷の土地を離れる事自體罪と考へられてゐる程である。事實ヒンズー教に於ては土地そのものにもその土地特有の神があるものであつて、これを見捨てる事はマヌの掟によりスードラ以上の三階級には禁止せられてゐるのである。然しこの土地の觀念も、アーリアン民族の發展に伴ふ地理的分散によつて全印度へ擴大せられた時、彼等は全印度の到る所に寺院を設け、これをその土地の文化的結合單位とする事によつて、危うじてその觀念の崩壊を防いだ。又この時設けられた聖地巡禮の制度は、この觀念崩壊の危機に際して、全印度へ分散した觀念の統一と強化を目的として設けられたもので、この

聖地巡禮の目的は見事成功し、現在ではR・K・ムカチーもその著「ヒンズー文化の民族性」に次の如く説いてゐる。「それは民衆をして、印度が單なる地理的斷片の集積ではなく、國土の隅々迄浴く波打つ生命の鼓動に充ち満ちた、無限ではあるが唯一の組織體であると考へ且つ感ずる事を可能ならしむる所の地理的觀念に迄發展してゐるのであつた」

かかる土地に對する態度は、唯物的觀念に基くフランス人の土に對する愛着等とは著しく異なり、飽く迄も精神的な、文化の神聖な表象としての土地への愛着と言へるのである。

ヒンズー教を基礎とする宗教社會の排他性及孤立的性質は、以上の如くである。然しこの社會の孤立性も、やがてそれを保障する政治力の衰退と言ふ歴史的條件によつて、破られる時が來た。即ち二〇〇六年印度に奴隸王朝を建設したアフガン回教の侵入が始り、西曆十一世紀から十二世紀にかけてこのヒンズー社會が、到底それと相容れぬ今一つの回教社會と接觸するに至つた事がそれである。この回教徒が彼等と共に、既に三世紀の古い歴史を持つ回教なる中央アジアの傳統を、印度へ齎らした事は言ふ迄もない。然しこの回教徒も最初の中は印度を單なる掠奪の對象地と見るのみで定住の考もなかつたため、回教を印度に布教せんとする精神的要求などは毛頭なかつた。たゞ彼等と行を共にした回教商人が南印度の經濟的征服に或る程度成功し、これ迄ヒンズー社會に受け容れられなかつた不可觸階級の一部を改宗せしめた程度に過ぎなかつた。

然しヒンズー社會も一三九四年のデリー王朝が建設される迄は、全印度的規模に回教徒の掠奪を受ける事がなかつた。そのため當時のラジュプタナの歴史家が彼等を「アーリアンの神の傳統的敵」と呼んだ以外には、この回教徒に

對しても何等の非難の聲も擧げられなかつた。事實、これ等の回教徒も印度に於て中央アジアの傳統に隨ひ一種の軍人貴族社會を組織した以外には印度社會の傳統に對する干渉を一切控え、政治的にも地方分權を實施し、租税を集め主要都市を占領する程度に満足したのである。又統治者としての誇りも壯麗な宮殿、寺院、庭園の建築に満足する程度であつたが、それと言ふのも彼等の持つ回教文化の誇りの故に嘗ての印度侵略者たるサカスや匈奴の如くヒンズー社會に同化する必要もなかつたからである。従つて印度社會の本質をなす各種の經濟形態——即ち農村協同體や封建的土地の所有關係もその傳統を維持する事が出来たのであつて、この回教政權の樹立による印度社會の本質的な變化の起り得る筈はなかつたのである。

この回印兩社會の互ひに孤立した併存は、アウランガゼブ皇帝の時代(註一)迄續けられ、當時回教王朝はヒンズー社會の神の使ひたる牛を殺す事を法令を以て禁じ、兩社會の友誼的關係の持續に特殊な配慮も行はれたのである。

(註一) 回教徒の印度侵入は、西紀十世紀のトルコ系、十二世紀のアフガン系、十六世紀のモガール系の前後三回に亘つて行はれた。このモガール系はテムール五世の孫バーバルの十五世紀初頭に於けるイスラム王國の建設に始り、續くその孫アクバル大帝に至つて遂に印度に侵入、一五五五年モガール帝國を建設したのである。このアウランガゼブはその孫に當り、爾來衰運を辿つて、一八五六年には名實共に滅び英國統治に移つた。

然しこの回教政權もアウランガゼブ皇帝を迎へて衰運に向ふや、その回教勢力を維持せんとする努力が客觀的にはヒンズー壓迫と見られるに至り、アクバル大帝以來廢止されてゐたヒンズー教對に徒する人頭税ゼジが再び一六五九年に至つて復活せられた時、早速ヒンズー社會からは兩社會の友誼關係も破られたものとして、次の如き抗議狀がヒンズー

社會より提出せられた。

「若し皇帝が、所謂神の下僕たる特異性によつてこれ等の著書に信頼を置くならば、神とは全人類の神であつて、獨り回教徒のみの神に非ざる事を教へられるであらう。異教徒も、回教徒も神の御前に於ては、何等異なる所がない。皮膚の色、神の配劑である。存在を許し給ふは、神である。回教の寺院に於ても、祈禱の際は神の御名が叫ばれ、鐘の鳴りひびく時は神は依然幻の家カマに描れて、禮拜の對象である。他人の信仰及習慣を誹謗するは、全能の神の歡喜を無視する事である」

この抗議狀は、古き回印兩教社會の關係から生れる一聯の思想に就て、次の暗示を我々に與へてゐる。その暗示とは即ち回印兩教社會も、その社會生活に於てこそ傳統的な孤立を守つてゐるが、「神」を媒介とする觀念世界に於ては強ち兩者に共通する要素を見ない譯でもなく、事實この共通點に立つて兩者の統一乃至は融合を實現せんとする試みも幾つか見る事である。ラマナンダとその弟子ガビール等がそれで、後者の如きは回教徒出身の職工であつたが、自分は回教の神アラールとヒンズーの神ラマの子孫であると主張し、回印兩教を折衷する一派を創設して今に残してゐる。又彼の末裔たるナナックも、後には回教に敵意を抱いてシーク教の一派を創設したが、その創設の出發點となつたのも回印兩教の折衷思想であつた。又ハヴェルの如きは、ヒンズー教の中心的思想が「神の統一」であるとして回教をヒンズー教の一部に包括する事によつて兩社會の民族的、社會的偏見を融和せんとし、その回教政治の理論的役割をも擔當せんとした。又著名な哲學者サンカラチャルヤの思想も、要するに「アラール以外に神なし」と言ふ回教思想をヒンズー教的に解釋したものであり、ラマメジヤの一神論的哲學やサティヤ・ナラヤナの禮讚は、それよりも更

に明確な理論體系を持つものと言ふ事が出来る。

従つてこれを受納しなかつたアウランガゼブ皇帝の態度は、現在永久に融和の途なきが如く噂される宗教闘争の端を開いたものと言ふ事が出来る。然しこの皇帝の態度、即ち兩教社會對立の原因が、英國勢力の攻勢によるモガール政權の衰退と言ふ政治的要素に求め得る事は、先にも述べた通りである。

二、回印對立の史的發展と英國の分離統治政策

この回印兩教社會の關係は、以上の如くして英國支配の確立した十七世紀以後次第に政治的意義を持つに至つた。又これを激化する要素として、印度回教徒の間にもアラビヤ回教ワハブ派(註一)の影響により、熱狂的な回教至上主義の分子が激増した事が擧げられる。

(註一) 一七九二年死去せるアラビヤ人アブドル・ワハブの創設せる一派、コーランの趣旨を墨守する事嚴格無比の回教清教徒で、現在サウデイ・アラビヤを中心とし、印度にも回教徒總數七千六百萬人の中約三百萬人がこの派に屬してゐる。

然しこの熱狂分子の激増は同時に又、英國側をして印度統治のスタートをこの回教壓迫に出發せしめるに至つた。何故ならこれ等の熱狂分子は、新しい印度の支配者を迎へて、祈禱の折は印度皇帝の名を唱ふべきか、それ共回教宗主の名を唱ふべきかに就て激論を戦はし、遂に後者が勝利を獲たからである。殊に一八五七年の印度兵叛亂には、ヒンズー教徒も参加したと言ふものの、結局それが回教徒兵士を中心勢力とする叛亂であつた事が、又有力な回教徒壓迫の口實を英國側に與へる事となつたためである。

回教徒のこれ等の反抗は、當時の政治的覇權を英國側に奪れたのであるから、當然の事とも言へた。然し狡猾な英國側としては當時既に分離統治の政策を採つてゐて、この回教壓迫の力にはヒンズー勢力を積極的に利用したため、遂に兩社會の對立は政治的意味を持つ決定的なものへ發展したのである。

この分離統治政策を英國政府に採る事を奨めた最初のものは、一八二一年の「エシアティック・ジャーナル」誌にカルナテイクスの署名で發表せられた一論文である。この論文は「分離統治こそ我々の印度統治のモットウでなければならぬ」と主張し、これに續いてコール中尉が「我々の努力は、異なる宗教、民族間に現存する分裂状態を全力を擧げて強化する事であり、これを解決する事であつてはならない」と述べてゐる。又エルフィンストンも一八五八年五月十四日附の覺書に於て、この原則を承認したが、これを實踐に移したのはそれに先立つ事既に十二年、エレンボロー總督(一八四三—四四年)の時代で、彼は一八四三年回印問題を具體的に取上げて左の如く論じた。

「余には、この民族(回教徒)が本質的に我々に對し敵意を抱くと言ふ事實に眼を蔽ふ事が出来ない。従つて我々の眞の政策は、ヒンズー教徒との和を獲得する事ではなければならない」

又彼はソムナス寺院の山門修復計畫に關聯して、この問題を次の如く論じてゐる。

「一方ヒンズー教徒も喜んでゐる。若し我々が十分の一の者(即ち回教徒)の敵意のみを獲得して、残る十分の九の忠實なる者(即ちヒンズー教徒)の熱狂的な支持を獲得しないとすれば、それは余にとつてこの上もない愚策のやうに考へられる」

又一八三七年オークランド總督(一八三六—四二年)時代に企てられたベルシャ語廢止は、この回印兩教社會の

教育問題に迄分裂と對立を發展せしめたものである。かくて文化的に遅れた回教徒は英國に對する反感もあつて、新に輸入せられた英國流の教育を受け入れず、独自の教育方針を續行した。このためハーディング總督（一八四四—一八四七年）は、一八四四年英國流の教育を受けた者に社會的地位の優先權を與へる旨を聲明するに至つた。かくて回教徒は政府官吏の地位からも除外せられ、その地位はヒンズー波羅門階級の獨占する所となつた。一八五七年の印度兵叛亂によつて回教社會が一段と迫害の對象となつた折、ヒンズー復興を目指すアラヤ協會運動と結付いて全印の白熱的支持を受けるに至つたので、彼等はいよいよ悲運の底に沈むに至つた。

然しこのため回教社會には再びヒンズー社會との過去の友誼關係を復活せんとする企圖が行はれ、一八七五年のアリガル回教大學の開校式に於ては、その設立者サー・シェッド・アーメッドが次の如き挨拶を行つた。

「回、印兩社會は言はゞ印度の二つの眼であり、同時に車輛の兩輪である。印度に住む限り、如何なる人間もその社會の何れかに屬し、同時にこの二つの社會に共通する國家に屬するのである」

然し彼もその時生れた國民會議派への参加を拒絶したため、遂にその妥協もそれ以上進まなかつた。而もその後のヒンズー社會を中心とする民族運動の擡頭は、遂に印度政府の足下を脅す勢力となつたため、英國側でも牛を馬に乘換へる事となり、十九世紀後半に於て突然回教徒を意味する少數黨の保護を宣言するに至つたのである。かくて回教社會は一八七五年遂に英國側と妥協に決し、これ迄頑強に拒絶し續けた英國流の新教育を承認するに至つた。一九〇〇年聯合州政府が少數者の使用語たるナグライ語を法廷語と定め、一九〇五年ベルガル州の分割令が中央政府から發表せられた事は前者に對する英國側の迎合である。殊にこのベンガル分割令は東ベンガル地方をアッサム州に西ベン

ガル地方をビハール・オリッサ州に合併し、同州を回、印兩區に分割せんとするもので、同十一年には再び廢止せられるに至つたものの、その目的に就ては、政府機關紙ステーツマンが左に述べる如く、民族陣營をも地域的に二分する事により結局回教徒を援助せんとする英國側の意圖であつた事を明かにしてゐる。

「その目的は東ベンガルに於ける回教勢力の成長を援助し、以て教育あるヒンズー社會の急速に成長しつゝある力を阻止する事に役立つものに外ならない」

かくて回教社會も最早や確實に英國側の支援を得たと信じ、當時の行政長官サー・B・フユラーの如きも英國側を代表して、「英國の持つ二人の妻の中では、回教徒と言ふ妻の方が可愛い」などの卑猥な言葉を公然口にするに至つたのである。又政府密使も回教社會に派遣せられ、イスラム復興のため回教徒は急據驟起し、ヒンズー勢力を打倒するやう慫慂した。この慫慂には事實回教徒も印度の各所に烽起し、一時はヒンズー社會の恐怖時代も起きた。従つてこの兩教社會の衝突には、決して英國側の政治的意欲を見逃す事は出来ないものである。

かくて英國側と握手した回教社會は、更にヒンズー社會と對立する勢力の政治的保障を要求し、アガ・カーンを委員長とする代表團の活動によつて遂に一九〇九年には、ミントウ總督（一九〇五—一〇年）時代の産物たるミントウ・モーレー改革案に於て分離選舉制度を獲得する事に成功した。その代表的政黨としても、回教聯盟がマドラス州ダッカに結成せられた。その政治綱領はこの間の空氣を反映して、(1)英國政府への忠誠、(2)回教徒の利益保護、(3)回教徒の團結強化等の微温的なものであり、マクドナルド元英國勞動黨首相も一九一一年發行の著書に於て次の如く述べた。「回教社會の指導者が、或るアングロ・インディアンの官吏の頭腦によつて行動してゐると言ふ事は疑はしい。然し

彼等が回印兩社會の對立に於て、常に前者に好意を寄せ、それによつて對立を激化してゐる事は事實である。

然しその後シリア問題に端を發する情勢の悪化は、遂に第一次大戰當時の英國をして回教宗家たるトルコ帝國を攻撃するに至つたので、この回教聯盟の綱領からは親英的な一項が除去された。即ち「英國政府への忠誠」なる一項が「印度自治政府の設立」なる一項に變更せられ（一九二二年）た事がそれであり、又一九一九年にガンデイの提唱する第一次市民非協力運動の起きた時には、アリ兄弟を先頭とする回教徒と國民會議派と共同戦線を張つて立つに至つた（註一）。然しそれが遂に敗北に終つた時、これ等の事も結局兩社會の對立を激化した形に残しただけである事が判つた。即ちその闘争中ヒンズー社會では強制的に回教へ改宗せしめられた者がゐると言ふ噂さに憤慨し、それ等改宗者の奪還を目的とするシュツデー運動が開始されたからである。

（註一）この共同戦線は、兩社會の間に分離選舉制度の承認を條件とする一九一六年のラツクナウ協定の成立に始つてゐる。

即ち回教社會では同年組織せられたビザント夫人の自治聯盟に参加し、ガンデイの出現後は、彼がトルコの宗主權復活要求を承認したため、引續き非協力運動に参加、アリ兄弟を先頭に奮戦した。然し一九二四年九月前記運動に憤慨した元自治聯盟議長ムハメッド・ジンナー（現回教聯盟總裁）等が、回教徒を率ひて脱退し遂に止んだ。従つてこの共同戦線はその間多少は斷續したが、兎も角前後八年續いた譯である。

この感情的對立は、大戰後の農村社會に起きた經濟事情——具體的には農村不況を繞るヒンズー高利貸及地主と回教小作人の深刻な抗争——を悪化の條件として更に悪化し、一九二二年から二四年にかけて未曾有の程度に達し、最早や救ひ難き程度となつたので、それ以後には最早や共同戦線の可能性があり得なかつた。かくて兩者の關係は險悪化の一路を辿る事となり、一九三〇年の第一次市民不服從運動の折も、運動参加を拒絶する回教商人の店に國民會議派

の看視が立つて血を流す争闘を繰返し、一九三七年に組織せられた州内閣に於て會議派内閣に参加した回教徒大臣は裏切り者と罵られ、聯合州大臣イブラヒムの如きは危く暗殺せられる所であつた。又今次大戰下に於ても、自治七州の會議派内閣が一齊に辭職するや、回教社會は「印度が國民會議派から解放せられる日が來た。一九三九年十二月二十二日を以てその記念日とし、再びかかる内閣の出現する事なきやう、神に祈るべし」と言ふ聯盟總裁ジンナーの指令（註一）に基き、ヒンズー社會を對象とする盛大な政治示威が行れた。又續く一九四〇年二月六日の總督との會見席上、ジンナーは、印度の獨立運動をも國民會議派と地域的に二分せんとするバキスタン計畫（註二）を正式に通告するに至り、兩社會の決裂は最早や全く決定的であるかの觀を呈した。

（註一）一九三九年十一月二日の總督・各派代表の會見に於て、リンリスゴウ總督は行政會議への参加を條件に、會議派・聯盟間の妥協を懇請した。このため、ネールとジンナーの間に兩派妥協の下交渉が行はれてゐる時、この問題が起きたのである。然しこれに對してはガンデイから猛烈な抗議が行はれ、ネール又諄々と説いたがジンナーは聞かず、意見の相異を王室委員會の公判に附せんと云ふ無暴な主張を行つたため、遂にこの交渉は本交渉に入らずして打切られるに至つた（第三章參照）。

（註二）この計畫は一九三九年十月頃から唱へられ、翌年一月のラホール大會を経て聯盟の正式要求となつたものである。その地域的區分は諸説あつて一致しないが、一般に回教徒の多く住む西北國境、カシミール、ベンガル、アツサム等の諸州を聯盟の獨立運動を行ふ地域に指定し、ここには會議派運動を禁止すると共に、首都をラホールに置かんとするものである。

勿論この場合、國民會議派と回教聯盟は何れも兩教社會を代表する絶對的政黨でないため、その抗争を以て直ちに兩社會抗争の具體的表現と考へる事は正しくないであらう。

事實國民會議派はヒンズー教徒を最も多く擁し、その社會を母胎とする政治團體ではあるが、現在では既にヒンズー

「社會のみならず、全印度を對象とする民族團體の形體をとり、その中には、有力な回教徒——例へば一九四〇度議長アザッドや「國境ガンデイ」ガフアル・カーン等——や彼等の率ゐる諸團體も参加し、一九三〇年の市民不服従運動の折、最も勇敢であつたのもこのバンジャブ回教徒であつたのである。又今次大戦下にも同じ回教社會を代表するアフラル黨やモミノフ回教徒會議等が、回教聯盟の分裂主義的傾向に嫌き足らずして、會議派支持を表明してゐるのである。而も一方回教聯盟は、回教社會の中でも極く一部の商業・地主階級の利益を代表する政治團體として、次第に激化する回教社會の發展に伴ふて大衆性を失ふ傾向にあるのであり、會議派との妥協々議に於ても、常に回教社會唯一の代表團體と見られない事が決裂動機となつてゐるからである。

三、國民會議派と回教聯盟の立場

嘗つて國民會議派に屬する一回教徒指導者が、次の如く語つた事がある。

「この宗教社會の對立は、全く封建社會の遺物である。それは宗教的問題と言ふより、寧ろ社會的、經濟的問題である。若し十八世紀の初頭英國の印度征服が行はれなかつたとすれば、印度にも必ずや近代産業の順調な發展が行はれ、恐らくはこれに伴つて生れる近代資本主義社會がこれ等の封建的遺制を悉く一掃して呉れたであらう」

この場合、「封建的」と言ふ言葉は正しくないかも知れない。何故ならこれ迄印度には正確な意味での封建社會は存在せず、ヒンズー社會のカスト制度もそれと異なると共に、回教統治の半重商主義や半軍事的性格もそれと本質的に相異なるからである。従つて強ひてこれに名稱を與へるとすれば、所謂「アジャ的」なる言葉の一部に包括される

「前資本主義的」なる概念に於て考へられなければならないであらう。

然しその言葉の不正確さにも拘らず、宗教が社會のイニシアテイツをとるのでなくて、社會が宗教を支配すると言ふ前記引用の内容は正しいと言へるであらう。事實ベルシヤや土耳其の過去に於ても、崩壊せんとする社會制度と結付いた古き宗教はそれと運命を共にし、英國の過去に於て勃興する産業資本主義と結付いたマルチン・ルーテル一派の宗教改革は成功し、新教の誕生となつたからである。従つて印度に於ても、十九世紀初頭に發展すべき苦の民族産業が、それに先立つて發達した英國資本主義の抑壓を受けて阻害せられ、結局回印兩社會の進歩も一種の停滞状態に陥入つたため、その宗教自體にも本質的な變化は遂に現れなかつたとも言へるのである。

然し英國が最初から印度社會の停滞に努力したのでなかつた事は、幾度も繰返して述べた通りである。事實十八世紀の初頭、外國文化との接觸によつて起きたラム・モハン・ロイの宗教復興運動にも、時のベンティック總督は惜しみなく援助を與へ、二十世紀初頭に於てなほモンターギユ印度事務相は「英國の理想とする所は、印度の自治を目標とする民主主義政治の印度への移入である」と述べてゐるのである。勿論これが善意の發露ではない。事は次の段階に於て、民衆の覺醒が英國側に無關心であり得なくなつた時、彼等が殊更獨善的な各社會の主張に對して無關心を裝ふやうになつた事によつて明かである。即ち英國はこの段階に於て、ララ・ラジュバット・ライの不可觸階級解放の運動資金として要求する僅か千ルピーを拒絶し、印度の幼女結婚を禁止するサドラ法（一九二九年）が議會を通過した折も、極めて無責任な態度を採り、この法律の效力の發生する迄の猶豫期間たる一九二八—二九年間に十五才以下の既婚者數を一舉八百萬人から千二百萬人へ飛躍せしめた程である。然しこの無關心は自由主義の名にかくれた惡意あ

る放任主義で、その消極的な態度の底には却つて印度民衆の革新的方向を引止めんとする積極的意志を持つものである。従つてこの悪意ある意志は民族運動に感ずる危険性の程度に比例して露骨となつた。即ち最近の英國が、積極的に努力する印度社會の停滞性の強化——即ち統治機構に於ける藩王國制度の如き封建的要素の強化、租税徵集人、高利貸、労働斡旋人等の前資本主義的要素と、分裂主義的傾向を示す場合の回教聯盟以下の政治、社會團體の支持等がそれで、例へば國民會議派の運動であるヒンズー法の改正——即ち婦人の財産權を完全に否定する一項の訂正要求に對する英國側の露骨な反對等もその一つと言へやう。

又この問題に就て印度の民族陣營を代表する國民會議派と回教聯盟の立場に就ては、先にもその一端に觸れた。然し叙述を完全ならしめるためには、更に幾つかの要點が附加されなければならない。

第一に國民會議派は、その出發點に於て英國の統治に不満な中産階級の横斷的組織を企圖したものであるから、その最大の任務は印度の解放とそのためへの戦ひでなければならぬ。然しその本流が英國側の積極的攻勢を原因とする印度社會の停滞性によつて著しく阻害せられ、時にはガンデーの展開する不可觸解放運動、時には又農村手工業運動となつて時折協道に外れる事が、先づ擧げられなければならないであらう。然し現状に於て國民會議派が國內の客觀情勢を顧慮せぬ運動の本流を積極化するとすれば、それこそガンデーの杞憂する新しいコムミュナル問題を提起する可能性があるのである。事實これを歴史的に見ても、最初ガンデーが革命的綱領を掲げて獨立運動の舞臺に現れた時には、アリ兄弟を先頭とする回教社會も欣然これに参加したのである。然し一九二二年のチャウラ・チャウリ事件を契機としてガンデーの態度が消極化するや、ジンナー等の先頭とする回教徒の智識階級が先づ最初に脱退し、現在

會議派に残る回教徒は貧困な労働、農民階級が多數を占め、同じ會議派内でも有力な回教徒指導者の下にブロックを形成して、直接ガンデーの掌握下にはないのである。従つて會議派が若しその運動を本流の上に進めんとする場合に、これ等回教徒指導者との完全な了解がない限り、この回教徒労働者及農民の大衆動員は不可能であり、萬一その動員に成功すれば今度は會議派の財政的背景をなす印度民族資本家——殆んど全部がヒンズー教徒で、その財政的援助は大衆動員に不可欠な——との階級的、コムミュナル的内部對立を醸す危険性を多分に有するのである。事實今次大戰下に於ても、國民會議派の輿論が常に大衆動員の問題をめぐつて左右兩派の間を彷徨し、遂に大衆運動に發展し得ないでゐるのも、要するにこの危険性が充分に解決されてゐない事に、大きな原因の一を算へるのである。従つてガンデーが今なほ消極的な態度を持つ理由として左の如く述べる場合、その意味する回印衝突の危険性は同時に又生産關係に基礎を置く階級的意味を持つものである事は、充分注意する必要があるのである。

「會議派同志の非暴力遵守の不確實と離れ、……この現状は市民不服従を通しての非暴力革命を成功的に組織する事を會議派に不可能ならしめ、併せて回印暴動を意味する内亂に轉化する危険性を意味するものである」(一九三九年十一月ハリジャン紙)

然しこれと性質は異なるが、同様の矛盾は回教聯盟の方にもある事を否定出來ない。何故なら回教聯盟は現在少數黨の保護問題を取上げて盛んに叫んでゐるのであるが、その理由とする所は、數に原因する宗教的意味の外に經濟問題も介在してゐるからである。事實現在の印度民族資本の勢力分野は、その國內投資額から見ると、回教資本家の一に對してヒンズー資本家のそれは四の割合である、従つて若し兩社會が平等の基礎の上に獨立を實現するとすれば、

たゞさへ文化的、數量的に劣る回教社會は經濟的にも又ヒンズー社會に壓迫せられる危険性を持つからである。又同じ民族資本家と言へ、回教徒のそれは先にも述べた如く商人階級を中心とするもので、その壓倒的多數を占める商工業者は單なる工匠、或は絹、絨氈等の製造及貿易業者で、何れも最近は大量の外國製機械品に壓倒せられて、明日の倒壊に一步近い連中である。従つてその分離選挙制の問題も、少數黨の保護を要求する政治的意味の外に、ヒンズー教徒より遙かに遅れ、遙かに貧困な回教徒大衆——全教徒七千七百萬人の九割を占める——の注意を、聯盟自體の消極的な階級性に對する非難から逸らさんとする意圖のものとも言へるのである。然し聯盟が會議派との對立を對等に發展せしめるには、矢張り大衆の獲得が必要であり、そのためには彼等も民主主義的經濟綱領を一應は必要としなければならぬのである。従つてこれをその階級的性質の矛盾と如何に調和するか、それを聯盟の運動方向に如何に表現するかは、この宗教問題とも關連して今後に残された問題となつてゐると言へやう。

四、宗教闘争の將來

我々は以上によつて、現在コムミュナル問題の中心をなす宗教闘争に就き、その本質をなす幾つかの問題を取上げて來た。又これを歴史的に見ても、過去から現在までこの間一貫して英國的要素を除外し得ない事、それを多分に受け容れる印度民衆の無智と偏見も見て來た。従つて此處に残るのは、その闘争の將來性、即ちそれがどの方向を目指してゐるかの問題だけである。

然しこの問題に就ては、先天的に溫和な印度民衆の性格や次第に經濟闘争へ移らんとするその本質的な變化等

が、先づ擧げられなければならないであらう。又それが印度の近代化過程の進行と併行して、次第に數を減じ、次第に局地的性格を持つに至つてゐる事も注意されなければならないであらう。事實、アメリカの印度研究家フレドリック・グリーンンの如きは、これ等の條件を基礎として次の如き結論を下してゐるのである。

「私は最早や印度には、純宗教的原因による衝突は、既に跡を絶つたと信じてゐる。成程一九三九年八月と一九四〇年三月の二回に、ボンベイとカウンプル市にかかる衝突が起きたが、その性質を詳細に調査すると過去のそれとは著しく異なる事を、我々は知るのである。現在印度では僻陬の農村へ行けば行く程、兩宗教社會の關係は圓満で最早や衝突の跡は完全に絶てゐるので、これは印度の將來を指し示すものとして、私は極めて重要だと考へる」

僻陬の農村には最早や宗教闘争が存在しないと云ふこのグリーンンの言葉は、飽く迄も正しい。何故なら記録せられる宗教闘争は、悉く都會に限られ現在全印に擴大してゐると言ふ闘争も、その實發地たるダッカ以下何れも人口十萬以上の都會に限られてゐるからである。然しこの都會に起きた場合でも、その件數が次第に減少してゐる事と共に、或る部分では全く跡を絶つた事が、指摘せられるのである。例へばカウンプル市である。この人口四十五萬の都市は由來紡績と毛織物を中心とする工業都市として有名であると同時に、これ迄宗教衝突の最も頻發する都市として有名であつた。然し此處に働く労働者は同市に始めて労働組合が生れた時、英國ではこれを宗教に基礎を置く回印兩組合に分つて、兩者の勢力を殺がうとしたのであつたが、彼等は斷乎これを一蹴して單一組合の下に團結した。又最近起きた宗教闘争も、これ等労働者の空氣が、今次大戦を迎へて次第に尖鋭化し、その經濟的要求が政治的要求に轉化する危険性が起きたので、急遽この注意を外に逸らすため、英國側によつて採られた非常手段であると言はれてゐる

る。然し又この近代産業の面に於て、原始的な宗教闘争が完全に跡を絶つてゐる實例としては、この回印兩社會に屬する勞働者が最も立派な團結を示した一九三六年の同市大罷業が擧げられる。この折勞働者は組合指導者の言葉に従ひ、彼等の要求内容に關する同市調査委員会の検討報告が發表せられる迄罷業を中止したのであるが、これを見るや英國側の命令を受けた未組織勞働者が工場の周圍に蟄集し、特に回教徒勞働者に組合指導者は會議派政府の犬だと罵り、その團結を盛んに亂さうとした。然し彼等はこれに一顧も與へなかつたのみならず、この調査委員会の報告が工業資本家の受容れる所とならず遂に再び罷業開始となつた時も、突然信望ある一回教徒の職工長が何者かに暗殺される事件が起きた。通常ならこれで兩社會の衝突となるに充分な理由であつたのであるが、これも又勞働組合の正しい斡旋で罷業寸前に解決せられた。又直接この衝に當つてゐた組合指導者が檢舉せられると、今度はこれ迄最も温健なガンデイ派の人と言れてゐた同市々會議長が立つて罷業を指導する事となり、その劈頭「カウンボールは今や狼の手に落ちた」と獅子吼し非常な人氣を博した。然しかくの如く罷業の指導權を會議派が握つたと知るや、今度は回教聯盟が聯盟旗たる綠旗を持つて罷業團へ駆付け、回教徒勞働者は罷業を拋棄してこの下へ集れと叫んだ。然し勞働者はその綠旗を嘲笑し、我々の組合旗はお前等の企てる宗教闘争の血に赤く染つたのでないぞと答へたため、彼等も遂にすごと引上げ國民會議派に對して共同戦線構成の申込みをするに至つた。これ等の経過は全く、完全に近代化された印度の社會面に、宗教衝突の如き原始的闘争が跡を絶つてゐる事を物語るものでなくて何んであらうか。然し僻陬の農村に於ける場合は、これと異つてゐる。事實それは無智な農民が宗教の本質と弊害を認識した事に出發してゐない。寧ろ宗教に對する無條件の信頼はかうした僻陬の村に住む農民程強いのであつて、現在宗教的儀式

や習慣の最も完全な形に保存せられてゐるのも獨り農村あるのみである。従つて彼等がこの高い宗教的障壁を乗越へて進む理由は、全く再社會に共通する經濟的利害に外ならない。即ち打続く農村の不況、灌漑及肥料の困難、果ては收穫物の不公平な分配と言ふ宗教には解決する力のない所の農民の現實生活に共通する利害、それが地主對小作の深刻な土地抗爭を通して兩社會の大衆を堅く結付けてゐるものに外ならない。然しこの事は、形こそ異なれ矢張り都會にもある事を今我々が見て來た。従つて印度の宗教對立も、結局階級闘争と言ふ現實生活の利害を境界線とする横斷的對立に轉化し得ると言へやう。たゞこの場合勞働者の文化程度は農民より高いのであるから宗教問題に對する認識も明瞭であり、従つてその兩社會の團結も強固であると言へやうが、同時に又現實生活の深刻さの點から見ると、印度に於ては農民の方が勞働者よりも遙か上であり、而もその苛酷な生活は普遍的であるので、結局この現象は農村に より普遍的であるとも言へるのである。

従つて我々は、印度の今後進むべき道がこの點にあり、宗教闘争の變化として行く方向があると考へる。従つて又極めて高く評價される印度民衆の無智も一應相對的條件としての考慮は拂ふが、それ程絶對的要素をなすものとは考へない。事實現實生活の激化が次第に他の社會層にも擴大すれば、必然この兩社會に共通して來る政治的、經濟的利害關係がその無智を征服し、その宗教的障壁を乗越えろと信するからである。従つてその精神的基調となるのは例へば一九三二年の第二次圓卓會議の折、回教社會の代表者ムハメッド・アリが叫んだ次の如き言葉、即ち「神の支配する世界に於ては、我々は飽く迄も回教徒であるが、事印度に關しては我々も飽く迄印度人であり、印度人以外の何者でもない」と言ふ生活態度であり、最近或る新聞に發表せられた一印度人キリスト信者の宗教觀——即ち「余は何

よりも先づ印度人で、然る後キリスト教信者である。決してその逆ではない」と言ふ宗教の社会的地位に對する明確な認識であるとも言へる。従つてこの上に立つて努力すべき方向或は目標は、次の事でもあるとも言へる。それは例へば印度の金融界が英國資本の掌中にあつて融通性を缺くため、この資本の硬塞を打開する道として高利貸が印度の農村及商工業社會に跳梁する事は先にも述べたが、この高利貸の中最も勢力のあるのが、ヒンズー社會に屬するマルワリー族やマルタニー族を主とするシユロフ或はバニアであると言ふ事である。従つてこの高利貸が回教徒に多い中小商人の下へ嚴重な貸金の取立に赴き、それが往々喧嘩となつて宗教闘争へ發展する可能性もあると言ふ事である。又この例はモブラ族の叛亂、或はヒンズー労働者の工場に罷業の起きた場合、この罷業破りとして回教徒に屬するバタン族等の労働者が工場主の雇傭に應じる場合にも見られるのである。従つてこの場合問題は二つある。その一は印度の近代化を極力阻止し、貸金の催促に基く喧嘩をも宗教闘争なる政治問題へ發展せしめて、中世期歐羅巴へ引戻さんとする英國の惡意である。又今一つはヒンズー・マハサバ（この中にはアラヤ協會系の分子が多い）や回教聯盟の如く、所謂宗教社會の偏見の上に組織されてゐて或はヒンズー教徒、或は回教徒のみによる印度復興を目指し、結局に於て印度民族の統一を妨げる團體の内部抗争である。従つて又この二つの問題の結論として、現在既に經濟的闘争へ轉化してゐる宗教對立の解決は、これを何れの側より見るもこれを阻止する政治力の破潰問題に還元する事が出来るとも言へるのである。

勿論これに對して持つ國民會議派の解決力は、未だ微少である。又これに關連する民衆の無智問題を解決せんとする場合にも、ガンデーとネールは明瞭な方法的對立を示してゐる。即ちガンデーはこれを印度民族の精神作興と言ふ大きな理想の實現過程に解決せんとし、眞理の把握を目標とする精神の侵透を問題とするのに對し、ネールは飽く迄も現實生活の激化によつてこの無智を征服せんとし、そのための労働者、農民の組織を重要視してゐるからである。

五、カストの持つ宗教的意義

然しコミュニティナル問題を構成する宗教社會の衝突は、強ち回印兩教社會のそれだけに限られてゐない。現に最近もトラヴァンコールに、ヒンズー教徒とキリスト教徒の衝突が起きてゐる。又このコミュニティナル問題には、今一つこの宗教闘争と並らんでヒンズー社會のカスト（身分制）問題があるが、その併存的地位にも拘らず、内的には極めて緊密な關係を持つ事が注意せられる。

このカスト（身分制）が、ヒンズー教に於ける血統の尊重の傳統化によつて生れた事は、先にも述べた。然しこれに就ても、更に幾つかの點が附け加へられなければならないであらう。その一は知られる如くヒンズー社會の制度は相當弾力性を持つものである。然しその弾力性はヒンズー社會に接近する異民族迄無條件に受容れて同化しやうと云ふ程積極性を持つものではないと言ふ事、又紀元四世紀前後に波羅門支配に對する反逆と言ふ政治的意味を持つて榮えた佛教の如きも、結局それが失敗に終つた時には、彼等の解放を企圖した當の非カスト社會が以前に優る困難と無力化の憂目を見なければならなかつたのみならず、却つて波羅門階級の支配も強化し、反動化せしめるに過ぎなかつたと言ふ事である。

事實、これ以後ヒンズー社會の波羅門階級は現實に民衆の上へ暴威を揮ふやうになり、その階級代表者たる僧侶が

實際の統治者たるクシャトリア（武士）階級の特権を壓迫し、直接政治面へ乗出したのである。然しこれは同時に彼等の墮落の始つた事を意味し、今日では公然たる貧農の寄生蟲と化してゐるのであつて、彼等がこのカストの制度の維持を最も嚴格に主張する裏には、これによつて自己の政治的、經濟的地位の保持を目的としてゐる事と、これによつてヒンズー社會の權威が却つて失墜せしめられてゐると言ふ事が、注意されるのである。

又第二には、このカストとは結局アメリカに於ける黑人専用車が黑人に對する差別待遇を意味すると同様のもので自己を「高貴」と恃む印度アーリヤン人種が自己種族の純粹性を保持する目的で血統の傳統を基準として作つたものであると言ふ事である。従つて其處には自己の民族性を誇る極めて高踏的な要素があるとしても、それは飽く迄も精神的なものに過ぎないのであつて、現在ガンデー一派が不可觸階級解放の名の下に努力する如く、果して非カスト階級に對置せられるカストの完全な除去を可能ならしめる如き物的基礎があるかどうか、疑問であると言ふ事が注目せられるのである。

第三は、このカストの持つ宗教的要素が現在では次第に薄れ、職業ギルド的性質を多分に持つやうになつてゐると言ふ事である。勿論このカストに課せられる職業ギルド的性質は、その成立の當初から僧侶、武士、農民、奴僕なる職業的身分を規定してゐるのであるが、兎も角それが明瞭なギルド的性質を帯び始めたのはヴェディック時代からである。即ちこの時代に職人及商人の全國的ギルドが生れ、國家の干渉以外に立つて自治制度或は聯合會形式を採つたのであつて、ダットの如きも、これと古代印度の農民或は市民の集會によつて運用せられた地方自治體の例をとり、「カストは、今や國家干渉の範圍外に立つ社會協同體となつた」と述べ、又「古代印度の國家とは自治體に許され、種

族によつて執行せられる所の法律に基礎を置く單なる行政體に過ぎず」、「共和制的、或は民主主義的性質を持つ種族的、氏族的組織は、グプタ王朝に對してその帝國主義的統治方針の拋棄を強く主張した」とも述べてゐるのである。

従つて我々は、古代印度のヒンズー社會に極めて民主主義的な、政治的な波羅門の横暴をさへ拒絶する現實的な政治哲學のあつた事を知るのであつて、このカストの職業ギルド的性質が、その後の鐵道や河川航路の發達、或は社會秩序の自然的崩壞によつて現實生活の表面へも強く浮び出て來た事を忘れる事が出来ない。事實、今日では波羅門階級のみでも十餘の階級が千數百の副階級に別れ、各々身分的職業を決定せられてゐるのであるが、例へばクシャトリア（武士）階級が今日多く中小産業資本家となつてゐる時、それより一段下で答あるべきのヴェーシヤ（農工商）階級が却つてヒンズー大資本家となつてゐるのであるから、少く共現在には現實の經濟關係にその決定權を握られ、その階級の倒錯、即ち、カストの崩壞が行れてゐる事に注意する必要がある。

又第四は、カストの持つ傳統や國家組織も、成程嚴重な階級從屬と言ふ一見唯物的に見える條件を前提としてゐるのであるが、その實この階級は所謂生産關係から規定せられる所のヨーロッパ社會のそれと異り、寧ろ逆にその身分關係によつて生産關係を規定せんとしたものであると言ふ事である。従つてそれは精神的なものであり、それが所謂東洋精神の基調をなす理想主義的性質とも密切な關係を有してゐるのである。我々はこの東洋の理想主義が、遠くシヨールペンハウエルやブラッドレイ、さてはニイチエ等にも影響を與へ、新ブラトール主義を通してグレコ・ロマンの世に傳つた時、それがキリストの猶太的解釋に影響する所も大であつた事を想起する事が出来る。従つてこの理想主義的傾向が現在の如く不正の形而上科學的合理化のみ努力し、或は没落する社會秩序に暴威を揮ふやうな事なく、

確實に民族的基調の上に足附ける事が出来るとすれば、勢ひこのカストの内容にも本質的な變化の生ずる事は容易に豫想出来るのである。

従つて我々は、以上の上に立ちガンデイの愛讀する聖典「薄伽梵歌」を、此處に想ひ出して見る必要がある。元來この書はガンデイの理想とする非暴力——それは彼の佛敎的影響によるものでなくて、寧ろ彼の出身地關係からジェーン敎の影響と言へる——を辯護するものでなく、却つて正當な暴力を主張する點が注意せられる。この二千年の古き歴史を持つ古典書の内容とする所は、古く印度に榮へたクル王國の先代の子百王子と先々代の子五王子の間に開れた極めて雄大な戦争の描寫である。又その中心をなす點は、先々代の第三王子アルジュナが従兄弟と言ふ肉身間の凄惨な戦ひに参加を躊躇する時、軍神クリシナが戰車の馭者に扮して現はれ、その戰車の臺座に身を投げて嘆くアルジュナに「正義は汝にあり」と叱咤して參戰せしむる経緯を述べた對話篇である。ガンデイがこの書に熱情を注ぐ理由は恐らく非暴力の精神を一應アルジュナの非戰論及至は平和主義に認めたと上、その平和主義もクリシナの説く客觀的な正義の前には潔く捨て、惡戰十八日、遂に勝利を獲る事によつて平和の絶對條件を確立せんとする所の平和主義であつて、不正乃至彈壓と言へ、その前に抵抗する事なくして屈服する所の平和主義でない點であらう。従つて彼自身は現在印度の當面する「反英抗争」と言ふ近代戰に参加を拒むアルジュナ一派に對し、軍神クリシナの役割を勤めんとする熱情に燃へてゐるのである。然し此處に説れる正義とは、決して抽象的な正義を意味するものではなく、それがヒンズーの聖典である事によつて生ずるカスト（身分制）的義務に忠實な事によつて生れる正義である。正義を信する感情は信念であり、信念のための戦ひが民族によつて戦はれる時には、民族精神の作興となるのである。ガンデ

イの狙ふ所も實に此處であつて、このカストも本來の理想主義を基調とする地位に正しく復歸せしめる事が出来るとすれば、その高邁な性質の上に再び輝しい古代印度の繁榮を咲かす事も決して不可能ではないのである。従つて現在の印度宗教も、既に現實的役割を終へて反動的地位に立つとは言へ、若しこれを民族宗教に轉化し得るとすれば、此處に却つて宗教問題を解決する新しい道が、印度の民族陣營に對して開かれると言へやう。即ち印度の宗教は、その特殊性に立つて唯物史觀的解釋を拒絶する事が、注意されるのである。

由來印度の民族運動に就ては、それが先づヒンズー社會の不可觸階級を解放し、次に回印敎社會の對立を解消し、更に藩王國問題を解決せぬ限り、獨立の達成は不可能であると言はれて來た。然しその時ウバニシャツドやギタ等の聖典批評家として知られると同時に、國民會議派の最も優秀な理論家であるラジャゴバラチャリイ（元マドラス州首相）は殊更このカスト問題を取上げ、カスト的義務による私心なき犠牲と努力こそ印度解放の鍵であり、自分も又彼の屬する波羅門階級のダールマに最後迄に忠實たるべき事を述べるのである。又現在ハドワラやベナレス等の聖地に群れ集まる何千何萬の巡禮者も、その持つ宗教的情熱故に、若しそれに印度の現状を正しく認識する民族精神を吹込む事が出来るとすれば、獨立運動に轉化する最も大きな力となるであらうとも述べ、その民族精神の何たるかを知らしむる正しき宗教と教育が國民會議派の當面取上ぐべき最大の問題であるがと主張してゐるのであるが、これ等は何れも所上の理由によるものに外ならない。

従つて我々は、次の如きラドハクリシユナン教授がラックナウ大學に於て行つた演説の一節を以て、この一文を終りたいと考へる。即ち彼は次の如く述べてゐるのである。

「徒に古代文化を理想主義と見做し、近代文化を唯物的とのみ見る我國の一般的傾向は、革新的である所か、却つて反動的である。それは徒に、現状維持へ道を拓く我々の保守主義を辯護せんとする言葉巧みな合理化の企てに過ぎない。疾病や貧困に苦しむ現實の前に理想主義はあり得ない。義務の重荷にさいなまれる制度の下にあつて、精神的ではあり得ない。又科學の力によつて人數の困難を救ひ、人類の平和に貢獻する時、それを唯物的と言ふ事は當を得ないのである。」

従つて宗教の徒らな古代復歸は避けなければならないし、傳統と言ふ古典的意味に執着する宗教に示す熱狂は打破せられなければならない。然しそれが古典的本質をそのまま科學的な方法に基礎づける事が出来るとすれば、眞に社會を指導し得る偉大な民族宗教が生れるであらう。情勢かくも重大な時、無關心である事は慘虐の罪を犯す事である。不正は民衆の無關心の上に榮へる。半ば飢えた、半ば裸の民衆によつて表現せられる所の肉體的、精神的苦痛の量をまざまざ眼に浮べると、諸君は決して無關心でおれないであらう。英國の支配下に腐敗する社會秩序に叛旗を翻す事は、諸君——即ち、青年の義務である」

かくて印度の宗教に就てはその現状が問題なのではない。問題は、これを將來發展の方向へ轉化し得るか否かである。従つてそれが政治的、經濟的、宗教的に如何に悲觀すべき状態にあらうと、些かも悲觀する必要がない。空が如何に暗澹と曇らうと、印度は未だ絶望でないと言へるであらう。

附

録

大戦下の印度と東方植民地の關係

第一章 東方植民地と英本國の關係

一、英帝國に於ける東方植民地の重要性

アレキサンダー大王以來、東洋がヨーロッパと直接交渉を持つに至つたのは、一四九八年葡萄牙人バスコ・ダガマが喜望峯を迂回して印度に現れたのが最初である。爾來葡萄牙、スペイン、和蘭が登場し最後には英國も加つてこの東洋の植民地分割を開始したのである。この植民地分割戦は、我が國が漸く鎖國の墮眠から眼醒め維新の大業を確立せんとした十九世紀の中葉頃迄には一應完了してゐる。爾後第一次大戦當時のヴェルサイユ會議によるアフリカ東海岸のローデシア及太平洋のニューギニア問題等も起きたが、これ等は要するに植民地所有權の移動問題で、新に植民地としてヨーロッパ諸國の手に落ちた地方は一もないのである。

然し皮肉にもこの植民地分割戦の最後の勝利者は、最も遅れて登場した英國である。事實英國は今日、アメリカの

持つフィリピン、和蘭の持つ蘭領印度、フランスの持つ佛領印度の三者を除けば、東洋に持つヨーロッパ植民地の殆んど全部を獨占してゐる。それは左の如く十四ヶ國に及び、その一、二を除けば何れもエリザベスに始つてダクトリアに終り、女王時代に始つて女王時代に終る收獲である事は興味がある。

英國東方植民地國家表

一、ア ジ ア	面積(單位平方哩)	人口(單位千人)	獲得年度
アデンその他	九、五〇	一六	一八三九年
英領ボルネオ	七、一〇六	八五	一八五〇
セイロン	一五、三三三	五、三三	一七九六
香港	三九	九四	一八四一
印度	一、八〇五、三三三	三三二、八三三	一七五七
英領マレー	五、七四	四、四〇	一七六六
バレスチナ	九、〇〇〇	一、二五	一九一九
二、アフリカ東海岸			
東アフリカ聯邦 <small>ケニア、ウガンダ、ザンジバル、タンガニカ、セーシェルを含む</small>	六八、四七六	二、九七七	一八八〇
南ローデシア	一四九、〇〇〇	一、二五九	一九〇〇
ソマリランド	六八、〇〇〇	三四七	一九〇九

三、大 洋 洲

南アフリカ聯邦	四七〇、七六七	九、三三七	一八四一
濠洲	二、九七四、五八一	六、七六六	一七七〇
新西蘭	一〇四、七五一	一、五九九	一八〇〇
英領ニューギニア	八九、二五二	九七九	一八四九
合 計	六、五四六、九三二	三九七、九七七	

(註) 此處に言ふ「東洋」とは、アジア的概念による東洋でなく、英國がその植民地政策の領野に於いて常に用ひる "Eastern Group"、即ち東方國の概念に包括せられる東洋の意に用ひた。従つてその東洋にはアジア全土が含まれるのみならず、エズ以南アフリカ東海岸及大洋洲諸國が含まれるので、或は印度洋諸國の概念に於て考へる方が適當してゐるかも知れない。

(註) なほ右人口は一九三三年度調査を基準としたので、それ以後の人口増加率の優位を考慮すれば、東方植民地の英帝國に占める地位は更に向上してゐる筈である。又右に對する英帝國全體の面積は一三、三五五、四二六平方哩、人口は四九五、七八四千人である。

かくて東は英領ボルネオから西はスエズ運河迄——その間十四ヶ國に上る英國植民地は、その面積合計に於て英帝國の四割九分、人口總計に於て實に英帝國の八割餘を占めてゐる。又英本國との貿易關係に於ても、英本國の輸入總額の一割六分、輸出總額の二割二分四厘を占め、英國資本主義の生命をなす海外投資の上から見ても總額三十七億磅の中十二億磅と言ふ約三分の一を占めてゐる。

従つてこれ等の諸國が「我が領土に太陽の没する事なし」と豪語する英帝國の中でも、特にその中心をなす動脈で

あり、その生命線である事は明かである。然しこれ等の諸國が眞の生命線、眞の寶庫である理由は、決してこの貿易及投資の搾取對象としてのそれではない。寧ろそれは小さな部分を占めるもので、英本國の眞の企圖する所は、その持つ莫大な物資資源——特に錫、銅、ゴム、鐵、ウオルフラム、鉛等の軍需資源と無限に持つ小麦、棉、茶、羊毛等の生活資源、そして英帝國の八割を占める世界最大の人的資源の一朝事ある時の動員に外ならない。殊にこの人的資源の動員は、原則としてはその費用を本國が負擔し、今回の大戦下に印度と結んだ契約に於ても費用は兩國の折半と言ふ事になつてゐるのであるが、これは一二の特殊例を除いて實行された事がない。又時に本國が支出するとしても、必ず當該植民地に對してその金額に相當する不要物資の購入が強制せられ、現に支那派遣軍の費用もその大半が印度から密輸する阿片によつて賄れてゐた事は周知の事實である。従つてこれを言ひ換れば英本國は一錢の費用も損ふ事なくして、他國の軍隊を自己のため使用し、これ等の植民地國家は莫大な費用を負擔して迄他のために自己の軍隊を殺さなければならぬのであつて、この點こそ實に英本國の期待する所である。

事實第一次大戦當時、印度は六十三萬人の戦闘員と四十七萬人の非戦闘員を送り、二億六千萬磅に上る戦費を支出した。又濠洲聯邦も騎兵及歩兵二ヶ師團宛、南阿聯邦又歩兵一ヶ師團を送つて總員百四十餘萬に上り、この他人のために自分の金で戦つて傷附いた犠牲者も又印度のみで二十八萬餘に上つたのである。而も又今次大戦を迎へては、我國とは同様の面積を持つとは言へその人口數に於て我が國の四分の一に過ぎぬ印度バングラジャ州では首相シカンダラ・カーンが英本國の要求の下に即時百萬の大軍を派遣すると宣言してゐるのである。従つて若し印度に現在の國內紛争の解決が可能であれば、少く共印度のみで今次大戦に×××萬人の兵力動員は可能であると言はれてゐる。こ

の點我我としても充分銘記する必要があると共に、誠に不思議な英本國と植民地の關係と言はざるを得ない。然し不思議と言へば、その不思議さは最も遅れて登場した英國が、東洋の覇者となつた過去に出發してゐる。従つてこの過程が一應歴史的に検討される必要がある譯である。

二、東洋に於ける英國覇權の形成過程とその特徴

英國人が最初に東洋へ來たのは、一五七九年葡萄牙領ゴアのジェスイット専門學校校長に招聘せられて印度へ來たトーマス・ステフェンスである。然し英國が國家的事業として東洋侵略に乗出したのは、一六〇一年東印度會社の第一回探險隊ジエイムス・ランカスターの率ひる英國船五隻がロンドンを出發してスマトラへ向つたのが最初であり、それが兎も角も東洋に基地を獲て漸く目鼻のつき始めたのは——色々觀方があるであらうが——一六六八年東印度會社によるボンベイ島の獲得乃至は一七五七年の印度ブラッシーの戦ひに於ける英國の勝利以後である。

従つてこれを一五一〇年の昔にゴアを占領し、同四三年には我が國の種子島へも來てゐる葡萄牙から見れば正に一世紀乃至二世紀も遅れてゐる譯で、この事實は取りも直さず當時の英國が未だヨーロッパの後進國であつた事を物語つてゐる。事實當時の英國はケルト人の喰荒す渺たる一島國で、既にノルマン系の王權が樹立せられてゐたとは言へ、依然産業的にも遅れ衣類その他の製造品はこれを對岸の和蘭に仰いでゐた國である。従つてこれが漸く先進諸國に追付いて海外進出を開始したはエリザベス女王時代——政治的には一五八八年の強國スペインの無敵艦隊撃破、産業的には紡績機及蒸氣機關——これが英國の手で行れた事が注意せられる——の發明が行れ、漸く國力も充實せんと

する前夜を迎へて以後の事である。

然し英國がかく遅れて植民地分割戦に乗出した事は、却て二つの點で英國に利益した。何故なら當時の植民地獲得は、その植民地に自國商品の販賣を企圖するものでなく、寧ろその植民地特産品の獨占とそれのヨーロッパ市場への供給と言ふ貿易上の利益を目的としてゐたからである。事實彼等が當時この東洋で最も眼をつけてゐたのはスパイス群島の香料で、初期の植民地獲得はこの香料獨占を目指して行はれたと言つても過言でなかつた。従つて當時未だ國力の微弱な英國としては獨力斷行の勇なく友邦國たる和蘭と提携してスパイス群島の占領に赴き、一六〇五年遂にこれを支配する當時の葡萄牙勢力を一掃する事に成功したのである。然しそれ以後兩虎立たず、今度は英和間にスパイス群島、更にはこれを含める現在の全蘭領印度の爭奪戦を開始したのであるが、これにはその掌に當る東印度會社が資本金僅か六十八萬四千磅の渺たる會社であるのに對し、相手の和蘭東印度會社はそれに八倍する大會社であつたので全く問題とならず、一六二三年のアムボヤ虐殺事件を最後として印度へ引揚げざるを得ず、暫くは和蘭の全盛時代が続いたのである。

處がこれが却て英國に、非常な利益となつたのである。何故なら英國が最初國家的に印度へ來たのは、東印度會社が一六〇一年から同十二年迄に東洋へ派遣した前後九回の探險の中第三回に派遣したキャプテイン・ホウキンの一行がスーラット海岸に着いた一六〇八年である。然しこの時はモガール帝國の全盛期と言はれるシャー・ジャハンギールの時代であつたため勢ひ貿易上の利益も少く、一應現在の蘭領印度へ向つたのであるが、この戦ひに破れた英國が再び印度へ引返して見ると、この時は既にモガール主國が急に崩壞の徴を示し始めたジャハンギールの末期で、この

衰へかけた政權を相手に英國の印度侵略が比較的容易であつたからである。又英國が印度を占領する事によつて齎された利益にも二つあつた。

英國が正式に印度を自己の領土と宣言したのは、一八五六年のモガール政權廢立後二年、これ迄功績のあつた東印度會社に解散を命じ、初代印度太守としてカンニング總督を派遣した一八五八年である。然し英國の主權はこれに先立つ事一世紀、一七五七年のブラッシーの戦ひ以後は事實上確立されてゐたのであつて、これは丁度本國にダクトリア女王を迎へて歴史的な産業革命が起り、これ迄の重商主義時代から産業資本主義時代へ移らんとする轉換期にあたる事が注意せられる。資本主義形態による大量の機械製品が、一定量の需要を越えて新たな販賣市場を要求するのは理の當然である。英國はこの時印度を持つてゐたのである。印度はスパイス群島の如く、ヨーロッパに賣るための特産品は持つてゐなかつた。然しヨーロッパ製品を買ふための三億五千と言ふ人口、古き文化の上に培ふ巨萬の富——即ち印度は購買力の點に於て、スパイス群島を持つ事に千倍する利益を英國に與へた。又ランカシャ商品を製造するに必要な棉も、無限に供給した。かくて英國資本主義は、自己がこれ等機械の發明者であつたと言ふのみならず、この大きな印度と言ふ原料及販賣市場を有してゐたが故に世界の覇者となり得たのであるから、これがスパイス群島を失つて印度を獲た利益の一である。

又第二の利益は、印度征服の過程が同時に英國のヨーロッパ諸國を征服する過程ともなつた事である。勿論こゝで言ふ征服とは、前記産業條件の優位に基く經濟征服の事ではなくて、政治的、軍事的征服を意味してゐる。英國が印度へ戻つて來た時、印度に最も勢力を揮ふのは葡萄牙であつたが、英國は一六一二年これをタプティ河口に破つて以來急

激にこれを壓迫し、遂に同三〇年當時の葡萄牙所有者たるスペインに屈辱的なマドリッド協定を結ばして東方よりの富の通路を絶つたため、この兩國の急速に衰へ始めた事がその一である。又この時東洋に全盛を誇る和蘭が、主として石炭と棉に表現される近代産業的基礎を有せぬため、東洋に於ても自滅の後直接英國と印度に相對したのはフランスである。當時フランスは印度の東南海岸ボンデシエリイを中心に南印度の回教諸國を隷屬せしめ、而も當時のフランス總督デュブレイは名總督の譽高かつたため、印度の英國勢力は一時全く危殆に瀕してゐた程である。然しこの情勢を英國側へ有利に轉換せしめたのは、これも印度の富で戦はれたオーストリア王位繼承戦争（一七四〇—四八年）と七年戦争（一七五六—六三年）に於ける英國の勝利である。この前者は文字通り世界的規模に戦れた史上最初の戦ひで、印度は事實上その戦ひの中心をなし、フランス軍はデュブレイの指揮の下にマドラス市を占領、一時英軍を全滅に瀕せしめたのである。然し結局平和の恢復した折、フランスは何等經濟的價値のないカナダの一城市とこのマドラスを交換する愚を演じたのである。これは又フランスが印度の富を得る上の自殺行爲であつて、このためデュブレイも雄圖空しく破れ、續く七年戦争にも徹底的に破れ去るに至つたのである。かく見る時英國はその經濟的富によつてこれ等ヨーロッパ諸國に優位したと言ふものの、この軍事的、政治的征服は何れも一七六九年の産業革命以前の事である。従つてこの勝利は、英國が印度の確保の必要に逼られて建造した海軍力の優位と、これを可能ならしめた印度の富と言ふ事が出来る。

英國が印度を所有する事によつて獲た利益は以上に盡きてゐる。即ち英國はその東方植民地を獲る事によつて、先づ自己の資本主義國家を完成したのである。然し我々はこの英國の印度へ侵略する過程に於て、一つの英國植民政

策の特徴を見るのである。それは勿論英國が歴史的制約を受けた結果であるが、英國が所謂後進國として東洋侵略戦に登場した最初は最も小規模なものであり、時間的にも遅れてゐた事は先にも述べた通りである。處が英國はこのハンディキャップを、一商會社の企業とせずして、國家的支援によつて補ふと言ふ特徴を有してゐたのである。例へば一六六一年英國王チャールズ二世がその妃カザリンの持參地たるボンベイを東印度會社へ與へて最初の根據地たらしめた事、又フランス東印度會社が一六〇二年から五十年迄に前後三回迄破産し、和蘭東印度會社が世襲制となつて十八世紀以降事實の機能を停止した如きは何れも東洋貿易の莫大な利潤を捲上げんとする當事國の國王及政府の行爲を直接原因としてゐるものであるが、この時英國のみは寧ろ自國の東印度會社を援助し、一六九八年の特許狀更新に際して年利八分で二百萬磅を借款する迄一切かかる行爲を慎しんだ事がそれである。事實、オーストリア王位繼承戦の折も英國が危殆に瀕して結局救はれたと言ふのは、要するに戦争當初から印度防衛のため、強力な本國艦隊を派遣してゐたからであり、これに對する優勢なフランスがあたらデュブレイの英才を擁しつゝも續く七年戦争に於て結局印度に持つ最後の根據地を失はなければならなかつたのが、本國の支援絶無と言ふ理由によるからである。

殊に英國は渺たる一島國として、若しその老大な植民地を確保し得ずば、その權威を保ち得ない國で、その點アメリカやその他の諸國と異つてゐる。事實英國にとつて、その植民地は生命である。我々は、この理由によつて、英國が最初その劣勢を補ふために採つた植民政策への國家的支援が、今もなほ脈々と波打つてゐるのを知るのである。かくて英國の植民政策は、同時にその外交政策の最も中心的な部分をなし、外交Ⅱ植民政策の觀を呈してゐる事は、最も大きな特徴と言へるであらう。

三、英國東方外交政策の變遷

由來英國の外交政策に二つの方向のある事は、E・カーその他も素直に認めてゐる。その一は言ふ迄もなく變轉極りない西ヨーロッパ諸國を相手とするものであり、他の一はこれ等老大な植民地の線に添ふてその關係諸國を對象とするものである。殊に前者は英本國自體の防衛を自由とするもので、西ヨーロッパは英國を凌駕する絶體的強國の出現しないやう、その勢力分散を企圖するもので、その空軍の發達が英本國の地理的優位を抹殺してゐる今日、一段と重要性を増してゐる事は疑ひを容れない。然しそれ自體としては國家防衛と言ふ消極面に動く外交であつて、到底後者の積極性に及ばない。その意味で英國外交政策の本領は、寧ろ平時後者にあると言ふのが至當である。

この第二の外交政策の基調をなすのは、言ふ迄もなく英國の植民政策である。然しこの英國の植民政策一言換へればこの第二の外交政策は、一八六七年以降東方植民地に對するそれに一元化された事が、注意されなければならぬ。何故ならそれ迄の英國の植民政策は、印度を中心とする東方植民地とアメリカ大陸のそれに二分されてゐたのであるが、一七九三年には先づアメリカが獨立し、一八六七年にはカナダも自治領となつてしまつたからである。又アフリカは前者を確保せんとする過程に生れた副産物に過ぎない。従つてそれ以降英國の植民政策、即ち第二の外交政策はこの東方植民地、特に印度の確保を中心に動いてゐる事を知るのである。

この印度を中心に動く英國の外國政策を歴史的に見ると、その最初は十六世紀に始まるトルコ政策として表現せられてゐる。事實當時近東に位置するオットマン・トルコはそれ自身強國としてヨーロッパとアジアの咽喉を扼するのみならず、その皇帝はシヤ派を除く全回教宗主として印度への途上に横はる近東及中東の回教諸國に絶大の權力を有してゐるのである。従つて英國が喜望峯を迂回する海路による場合はその有力な海軍力を有して無敵であつたが、若し陸路これを短縮せんとすれば、嫌でもトルコ政策の必要を生じ來るのである。かくてこの英國の回教徒に對する政治工作は、印度侵略の過程と併行して十六世紀中葉から始まり、印度を確保した十八世紀後半以後最も積極化してゐる。然しこの英國のトルコ政策は、主としてトルコを狙ふロシアの南下政策に對抗する力として現れ、このためにはバクダッド鐵道を建設せんとする獨逸の三B政策をも承認した程である。然しその最も強く現れたのは一八五四—五六年のクリミア戦争で、この時英國はフランスと結んで戦ひ遂に一八五六年のバリ條約によつて黒海の中立化を獲得、ロシアの南下を完全に封ずると共にトルコに對する發言權を百%に確保したのである。一八七八年英國がトルコからキプロス島を獲たのはその報酬であり、同時に英國が印度に打立てた最初の軍事基地である。然しこのロシアの脅威が除かれて十三年、一八六九年には佛人レセツプスの手によるスエズ運河が突然開通した。これは「埃及を支配する者はヨーロッパを支配する」と叫ぶナポレオンの信念から生れたものである。然しこの運河の開通によつて、喜望峯を経由する印度ルート一萬五百哩が一舉六千二百哩に短縮せられた事は、英國にとつて脅威であつた。このため英國の政策はコンスタンチノーブルからポートサイドに移り、このスエズ運河の獲得に向つた事は言ふ迄もない。又その獲得が時のデズレリー首相によつて行れた事は一般に知れる通りで、彼は時の埃及太守イスマイル・パシアが財政に窮しその全運河株の四四%に當る十七萬七千株（價格四百萬磅）を窃かに賣出した折、ロスチャイルド財閥を動して買収、その發言權を掌握したのである。かくて彼は名實共に印度の支配が可能となつたため、此處に始めてヴィクト

リア女皇に彼女の久しく望む印度女帝の稱號を送つた。これ以後の英國の政策は一應運河支配權の強化に集中せられ、この運河確保のためには埃及の眞の所有者たるトルコの攻撃すらを辭せなかつた。従つてこの事は、一九三五年以降再び自己の利益のため、親ト政策を採り始めた態度と對象して興味があるが、一八八二年アラブ・バシアの民族運動鎮壓に乗じた以後、第一次大戦を好機にこれをトルコより獨立せしめて自己の保護領となし、一九二二年には一應獨立を認めたものの、依然三六年の英埃條約によつてこれを隸屬化し、同條約第八條による一九四四年迄の駐兵權を確保して今日に至つてゐる。現在英國がスエズ運河防衛のために置く兵力は陸軍一萬人とカイロに中東司令部を置く空軍四百名及スーダンへ派遣する歩兵二大隊と砲兵若干である。

又運河を経て印度へ赴くルート強化のため、一八三七年のアデン買収、一八九八年のスーダン遠征、一八五三年のオマン半島沿岸の猶長國支配、一九〇七年のベルシヤ南岸獲得、第一次大戦による近東及アラビアの支配等を次々に實現して行つたのである。

然し二十世紀の初頭に至り、驚異的な交通機關——即ち飛行機が出現した。嘗てはロンドンからカルカッタ迄喜望峯を經由して六ヶ月を要した航路が、僅か三日に短縮せられるのである。従つてこの航空路開拓は英國にとつて全く印度確保の必須條件となつて、二十世紀中葉以降の外交政策が此處に三轉し、航空基地の獲得に向つた事は、疑ひを容れない。即ちアレクサンドリアにアフリカ及印度に分歧する一大空港を建設し、印度航路確保のため第一次大戦當時には近東作戦が最大課題となり、遂にバレスチナ、イラクの根據地獲得に成功したのである。かくて現在はバレスチナに空軍二大隊の外歩兵十五大隊及機甲部隊を駐屯せしめ、イラクにはルトバ、バクダッド、バストラの着陸場を獲

得した外バルサを空軍根據地として空軍五大隊、その他八中隊を駐屯せしめ不動の空陣を布いてゐる。又アフリカでは南ローデシアを獲得してケープタウン迄の航空路を開き、サザンプトン、ケープタウン間三萬一千七百四十二哩、サザンプトン、カラチ間八千七百七十六哩の二大航空路を完成せしめたのである。

かくてこの航空路を除き、地上も又東のジブラルタル、マルタ、キプロスを経てスエズ運河に至り、更に紅海、アデン、ベルシヤ灣の海軍根據地バーレーン島に護れて印度に至る航路、又喜望峯を経てダーバン、ナタール、葡領ベイラを経て印度に至る航路は何れも東の新嘉坡、ボート・ダーウインを併せて英國海軍基地を飛石傳ひに傳ふ鐵壁のルートを成するに至つたのであり、そのルート建設の過程にこそ英國外交政策の中心的な發展と變化があつたと言へるのである。

第二章 英國東方植民政策に占める石油の意義

一、英國霸權の衰退と石油問題

然し我々は二十世紀の初頭、劃期的な一つの異變に遭遇してゐる。それはこの世界的規模に組織される英國の霸權が、急速に崩壊過程へ移り始めた事である。

それは一九一四年以降先づ著しい貿易額衰退となつて現れた。原因は第一次大戦とそれに續く世界的不況と考へら

れた。然しこれを極端な數字の對象を以て示すと、その輸出總額は戦前の六億三千五百萬磅から一九三二年の四億一千七百萬磅へ減少すると言ふ著しいものであり、その世界貿易總額に占むる割合は一三・九三%から九・八七%に下落したのである。而もこの時の磅價の減少を考慮に入れ、ばその差額ももつと著しいものとなり、その入超額はそれと反對に一九一三年の一億三千二百萬磅から三一年の四億八百萬磅へ激増してゐるのである。

これは一口に言ふと、英國の傳統的政策であつた自由主義貿易の破綻である。然しその破綻も遂に救ひ得ないものとなり、一九三〇—三一年の會計年度には二千三百三十萬磅からの赤字を出し、この一年間の磅逃避は二億磅以上となつたため、英國政府も遂に三つの非常手段を採らざるを得なかつた。その手段とは第一に金本位制の拋棄であり第二に自由主義貿易の拋棄であり、第三に新農業政策の採用であつた。

金本位制の拋棄は、英國が長年ロンドンに築く世界金融市場の王座をニューヨークへ譲つた事を意味してゐる。又自由主義貿易の拋棄は、一九三二年のオタワ會議を契機として保護貿易に轉じ、その傳統的政策を拋棄する事によつて世界經濟界の指導權を拋棄した事を意味し、新農業政策の採用は取りも直さずこの防禦策としてのプロック經濟への移行を暗示してゐる。

従つて英國覇權の衰頹は、この時以後最早や蔽ひ得ないものとなつたのである。然しこの世界的悲劇は如何なる事情によつて起きたものであらうか。第一次大戦の打撃とその後に來る勞働力の低下も、確かにその一つの原因であつたであらう。又英國の覇權に排敵するアメリカと獨逸の躍進も、その一つの原因であつたであらう。事實、英國の輸出額も一八七〇年當時はこの兩國の輸出額を合したよりも大であつたが、一八九〇年當時には既に兩國の合計額より

六五%劣るに至り、一九一三年には遂に三國同額——即ち、世界貿易額のそれ〴〵一三・九三、一三・三四、一三・〇九%を占めるに至つたのである。既に戦時中のアメリカの躍進、戦後に於ける獨逸のダンピングは、確かに英國の衰退を導いた原因である。そして又事實として大戦中に於ける植民地産業——特に印度の進歩が、この場合考慮されなければならぬ事も勿論である。

然し我々は、この英國輸出貿易の品目を検討する時、その著しい低下が一般商品の相對的增加にも拘らず、これ迄英國産業界の生命線であつた綿糸布、石炭、鐵鋼、更に船舶の左記の表の如き致命的な減少によつて齟らされた事を知るのである。

商品別輸出額に占むる割合			
	一九一三年	一九二五年	一九二七年
綿糸布以下	一九一三年	一九二五年	一九二七年
四商 品	五八・〇	五五・五	五二・七
その他商品	四二・〇	四四・五	四七・三

我々は、十九世紀に於ける英國産業の世界制覇が、一七九六年の産業革命によつて生れた紡績機と蒸氣機關によつて齟られた事を知つてゐる。然し更にこれを可能ならしめたものは、何んであつたらうか。それは言ふ迄もなく一年八千萬匁と言ふ世界産額の六一%を占める優秀な石炭と一年一千二百萬匁上る鐵礦産額と一時は五百萬匁に達した鐵

鋼産額を英國が有したからであり、更に一年九百萬トン前後の造船能力を有して世界各地にユニオンジャックをなびかせる海運力を持つてゐたからに外ならない。

従つて、この英國覇權の衰頹は、二十世紀以降動力資源の王座に石油が登場し、本國の保障力として航空機が船舶に代つた事を最も大きな原因とすると言ふ事が出来る。事實二十世紀の籠兒はこの二つであつた。然し英國は不幸にして、その何れにも恵れてゐなかつたのである。殊に石炭に代る石油は、英國にとつての致命傷であつた。石油の軍事的産業的重要性に就ては、最早や贅言を要しない。事實、軍の機械化の始つた第一次大戦以來僅か二十五年にして、その世界消費量は一九一三年の三千七百四十萬トンから二億二千六百九十三萬二千トン、約六倍の増加となり、又ディーゼル機關を使用する汽船は一九一四年の二萬四千四百四十四隻から一九三八年の二萬九千七百六十三隻となり、これもガソリンを使用する自動車は三百萬臺から四千三百萬臺に、航空機は更に高い比率を以て増加してゐるのである。

かく二十世紀はディーゼル・エンジンの時代であり、石油の時代であつて、皮肉にもその先頭に立つたのは、一九三六年末に二十八萬臺の自動車、一千七百機の民間飛行機、九千八十四隻の汽船を有する産業先進國の英國であつた。然し英國には遺憾ながら、その太陽の没する事なき廣き領土にも、石油は一滴もなかつたのである。

勿論一滴もないと言ふのは、極言であるかも知れない。事實その本國にも古い歴史を持つスコットランドの頁岩工業があつた。然しその産額は一九三六年に於て僅か七萬八千九百トンに過ぎなかつたので、同年度の本國消費量たる一千九百九十五萬トンから見れば、全く九牛の一毛に過ぎない。又ビルマの石油も印度を賄つて不足し、サラワク、ボ

ルネオの石油も濠洲その他を賄つて不足するのであつて、これ等三國の生産額を合しても僅か二百三十九萬トン（一九三八年度）で、これを附近三ヶ國の消費に宛てるだけで既に四百六十萬八千トンの大量不足を招來してゐるのである。従つて結局、英國の石油保有量は皆無に近いと言ふ事が出来る。かくて英國は、第一次大戦當時も石油飢饉のため危く敗戦の一步手前にあつた事は、當時の駐米代表ノースクリップ卿の覺書によるバルフォア卿の書簡によつて明かにせられてゐる。英國はこの危機を再び繰返す事を避くるため、一九三六年度には所有總船舶の一四・五%に上る油槽船を用意した上、一億二千六百六十萬磅に上る全く無意味な石油投資を餘儀なくせられてゐるのである。而もなほ英國は一九三八年度に必要とした石油量の實に九九・五%迄を、極めて高價な輸入に仰がなければならなかつたのである。

かくて英國が優れた石炭と鐵の輸出國から、この老大な石油の輸入國に轉じた事が、取りも直さずその世界的覇權を失はしめたと言ふ事が出来るやう。

又航空機が有力な交通機關として登場した事は、これ迄その地理的條件に恵れ、世界最大の海軍力さへ保持すれば絶對優位を保障せられてゐた英國を、ヨーロッパ對岸よりする空爆の危険に曝させる事となつた。而も英國はその軍事的脅威を前にして、航空機の製造能力にはアメリカ、フランス、獨逸に次ぐ第四位に甘じなければならなかつたのである。この造船能力の世界第一位から航空機製造能力の第四位への轉落は、又その覇權衰頹の他の一面である事は否定出来ない。

一、東方石油資源の獲得過程

かくて二十世紀中葉以降の英國外交政策は、この新に登場した石油資源の獲得に向つて、必死の觸手をこの東洋へも伸して來たと言ふ事が出来る。第一次大戦は、この上に立つて英國にとり、絶好の機會であつた。即ち英國は大戦勃發と同時に、スエズ運河及埃及保護を名とする大軍を近東及中東に進め、航空基地の確保と併せて石油利権の獲得にも努め、戦後ヴェルサイユ會議によつてこれを政治的に保障してしまつたのである。かくて今日英國がこの東洋に占める石油資源は、イラン、イラク、蘭印のそれである。

この中時間的に見て英國が最も早く手を着けたのは、イランである。イランの石油は世界的に良質を以て知られ、その生命も蘭印石油の十倍と言はれてゐる。その産額も一九三七年以後急激に増加し、一九三八年には千二百三十五萬トンの産額を以て世界第五位を占めた。又英國の石油輸入額に於てはその二〇・四%を占め、ヴェネズエラに次ぎ第二位である。然しこの英國のイラン石油獲得は歴史も古く、一九〇一年英國人W・K・ダルシーが先づ北部五州を除く全國の試掘権を獲、ビルマ・オイル會社を背景として英波會社を設立したに始つてゐるが、この會社株の過半数を四千四百萬馬克で買収（一九一四年）して國家の支配下に置いたのは、全くフィッツシャー提督の炯眼と時の海相チャーチルの果斷によるものである。現在その主要油田は西南州のアラビスタン、マスジッド・イ・スレーマンとハフト・ケールの二つであつて、このスレーマンから下る油送管はクト・アブドウラに於てケールから下る油送管を併せてアバダンに至り、このアバダンには東洋一の新式精油所がある。そのため英國ではバーレン諸島に海軍根據地を置

き、ペルシヤ灣の警備に當つてゐるのであるが、第一次大戦直前の一九二二年英波協定を結んで政治的にもイランを支配せんとしたがこれには破れた。それ處か近代イランの建設者たるレザー・シャーの出現以後は却て逆襲を受け、ソ聯勢力による英國驅逐も企てられた。又一九三二年には同一年迄許可されてゐた全國の採油権迄取上げられ、一時悲境に陥つたが、その後前回より利権面積を制限せられて許された。然し今なほ會社がイラン政府に礦業税として納める一年七十五萬磅は依然同國の最大財源で、同國に對する英國の經濟的支配は否定する事が出来ない。一九三八年度には二百四十六萬トンが英本國へ送られた。

又イラクは年産額に於てこそ一九三八年度に僅か四百三十萬トンで世界第八位を占めるに過ぎなかつたが、埋藏量に於てはイランを凌駕してゐる。英國のイラク石油に對する執着は、第一次大戦勃發と同時に大軍を近東へ集中した一事を以ても、その一端を覗ふ事が出来る。事實英國は戦後直ちにこれを委任統治領とした上、一九二二年には一端その獨立を認めながらも一九三〇年の軍事協定は事實上イラクを屬領化し、必要以上の空軍を常駐せしめる事によつて今回の叛亂迄は文字通り政治的にも、經濟的にもイラクを支配して來た。然しイラクは由來その石油と交通の要衝を以て英、米、露、佛の由緒ある争覇戰場である。従つて英國もその石油獨占に非常な困難を感じ、現にキルクックとモスールの二大油田に操業するイラク石油會社は、一九二五年以降七十五年の特許期間を有して活動するものであるが、その會社資本も英、米、佛、和四國の同額出資となつてゐる。イラク石油の未開發状態はこの國際關係の紛糾によるものである。然し狡猾な英國は、この外にもカニキン附近にカニキン石油會社、チフリス河西岸にイギリス石油開發會社を經營し、更に前記のイラク會社に於ても英國は他の三國の二%に對して四〇%の利権を確保し、事實上

優勢を示してゐる。又モスール油田から一本はシリアのトリポリ、一本はトランスジヨルダンのハイファへ世界最長の油送管を配置してゐる事は知られる通りで、英國はこの油送管に一定間隔の監視哨を派して事實上軍事力による保障を行つてゐる。英本國へ送られる石油量は一九三八年度に於て、その總輸入量の四・六%、五十四萬トン程度であつた。

英國が最後に刃を向けたのは、一九三八年度に於て七百三十九萬トンの産額を持つ蘭領印度であつた。蘭印石油に對する英國の支配は、蘭印最大の石油企業社たるローヤル・ダッチ・シェル・グループを通じて行はれてゐる。このグループは産油及精製を行ふバターフェ石油會社と運輸部門を擔當するアングロ・サクソン石油會社、共販に従事するアジア石油會社の三つを以て構成せられてゐるが、このグループの株は和蘭のローヤル・ダッチ財閥が六〇%、英國のオイル・シェル會社が四〇%を所有する事によつて英國も發言權を確保してゐる。然しこのダッチ財閥の社長デター・デング及重役のヴァン・アアルトは、英國から大戦中サアの稱號を與へられる事によつて英國に恩惠を感じる人物である。又一九三一年から三六年迄總督であつたデ・ヨングも右財閥の一員であるのみならず、赴任前九ヶ年も英國に生活した人物である。従つて同財閥が完全に英國的色彩を持ち、英國が又從來共和蘭の政治機構に強固な發言權を持つ事によつてこれ等の支配は一段と強化せられてゐるのである。従つて英國は現在アメリカ資本であるスタンダード・ワキユアム會社の勢力範圍を除き、蘭印石油の八割迄を支配してゐると言つても決して過言ではないであらう。

かくして東洋に石油の三大支柱を獲た英本國は、更に現在左表の割合による石油量を世界各地から輸入する事により、一年千二百萬トンと言ふ巨大な需要量を充してゐるのである。アジアは上表の示す如く、依然英本國への石油供給量に於ても第二位を占め、アジアを含む東方英國勢力の本國に對する重要性は、今世紀に入つて一段と増加してゐるのである。

英國の産地別石油輸入量		
	輸入量(單位千トン)	割合(%)
南アメリカ	五、六七四	四七・五
北アメリカ	二、四二四	二〇・三
アジア	三、〇九四	二五・九
内イラク	五五〇	四・六
内イラン	二、四六〇	二〇・六
蘭印	八四	〇・七
その他	七五三	六・三
合計	一一、九四六	一〇〇

第三章 今次大戦下に於ける印度の地位

一、新嘉坡軍備の政治的意義

英國が今次大戦下に、この富み且つ尨大な東方植民地を、最大の軍需基地に化せんとしてゐる事は、論を俟たない。一九三八年度の天津の現銀引渡し、一九三九年度の天津及上海からの駐兵引揚げ、更にビルマ・ルートの一時的閉鎖——これ等の極東に於て英國が採つた行動は、取りも直さず「世界の王者」たる貫録を捨てても、一應この貴重な軍需基地を保全せんとする企圖に出たものと見る事が出来やう。

事實第一次大戦當時、印度以下の諸國がその軍需基地として英本國に奉仕した役割は大きい。又今次大戦下に於てもそれに數倍する本國援助の企圖が着々進められ、既に印度及濠洲から本國へ送つた尨大な軍需品、海外派遣部隊の數も記録せられてゐる。然し、昨年六月には、この軍需基地としての東方植民地に大きな變動の起きた事を、忘れる事が出来ない。その變動とは、即ちフランスの屈服、伊太利の参戦によつて英本國が未曾有の危機に立つと共に、英本國と彼等を結ぶスエズ・ルートが切斷せられてしまつた事である。そして又この事は本國と不可分の關係に置れてゐたこれ等植民地國家が、今後孤立して生存して行かなければならなくなつた事である。事實それ以後東方に向ふ商船は何れも喜望峯經由となり、英國から新嘉坡迄の距離は、八千裡から一舉一萬七百四十裡へ、濠洲メルボルン迄の距離は一萬一千百六十裡から一萬二千四十裡へ、印度のボムベイ迄は六千三十裡から一萬百五十裡へ延長せられ、何れも一八六九年以前の狀態に復歸してしまつたのである。殊に今回は戦時中である。例へ喜望峯經由が残つてゐても、本國の危機が増大すれば勢ひ船も動かなくなり、又動いても印度洋の獨逸軍艦の危險があるのである。

かくてこれ等の東方植民地は、昨年の六月以降に於て完全に本國から孤立した自分達を感じたのである。又その孤立の哀愁を感じたのみならず、これと同時に東亞共榮圈問題を中心とする日本と南下の氣配を見せるソ聯の脅威をも重大な恐怖として感ぜざる得なかつたのである。このためこれ等の植民地諸國には、昨年の下半期に於てこれ等恐怖を排除するための自主的防衛の確立、本國から離れても彼等だけで獨立の生活を營まんとする經濟自給圈の確立——この二方面を企圖する自主的活動の開始されたのを見るのである。

これは一口に、廣域國防經濟圈の樹立を内容とする戦時體制の確立を企圖すると言ひ得るであらう。然しそれは又本國の手を離れて印度洋を中心に、獨立した一單位を構成しやうと言ふ點に、劃期的な動きと言ふ事も出來た。

その堅き決意の表現が、昨年度下半期に於けるビルマ・ルートの再開及婦女子の極東引揚げである。そしてこの自主的防衛の線に添つて英米戰略線の成立、極東軍總司令部の新設、新嘉坡の防備問題等が浮び上つて來るのである。

この新嘉坡の防備問題に就ては、次の事が英國側から言はれてゐる。即ち日本の南へ向ふ戰略線は、これを東西に結ぶ英米戰略線と南支那海から蘭印にかけて、交叉衝突すると見るのである。従つて日本の佛印進駐、佛印及タイの紛争調停は、取りも直さずこの南支那海に開れた前哨戦に於ける日本の勝利であり、そのために日本の最後の目標である蘭印は一層危殆に瀕したと言ふのである。然し彼等の考へによれば、この蘭印は地理的にも丁度英米戰略線の結合點に位置してゐるが、これが唯一の第三國であるため同時にこの戰略線最大の弱點でもあると言ふのである。事實現在でこそ太平洋に於ける英・米・蘭の三國提携は極めて強固である。然しその本國は、なにしろ既にその實體を失つた國である。勢ひ第三國の異常な壓力が蘭印に加り、その國が萬一の時その壓力を直ちに現實化する實力を有する場

合、蘭印の歸趨は明日にも知れないと言ふのであるが、これは事實であるかも知れない。然し又この蘭印を軍事的に見る場合、次のやうに言ふ事も出来る。それは蘭印の石油産額は年七百五十萬トン前後で、實にその八八%に當る六百三十萬トン程度が輸出せられてゐるのであるが、この中英本國に送られる總量は全輸出量の一三%に當る八萬四千トン前後に過ぎず、その他は殆んど全部印度やマレーへ振向けられてゐると言ふ事である。勿論これは蘭印の石油に、高オクタン化の能力がないからではない。それは距離にからむ輸送問題とコスト高のためである。従つて若しこの蘭印が第三國の手に落ち、獨逸の英本土上陸が成功した場合を想像しやう。そして若しこの場合英本國防衛の任を終へた英國艦隊が、新嘉坡へ入ると假定すると、一體どうなるであらうか。東方植民地の全石油量は、一年二百三十萬トン前後で年々減少の傾向さへ示し、産業状態も低調で左程石油を必要としない平時に於てすら、四百萬トン前後の石油を蘭印からの輸入に仰いでゐるのである。従つてこの場合、例へ本國艦隊が新嘉坡へ入つても、その三分の一程度しか動く事が出来ず、飛行機、戦車、自動車の文字通り動かなくなる事が豫想せられるのである。即ち蘭印を第三國を占領する場合、その事によつて第三國が自己の必要とする石油資源を獲得出来るのみならず、同時に又英國側の抗戦力を半身不隨に陥らしむると言ふ點に、蘭印の持つ最大の軍事的意義があると言へるのである。

従つてこの線に添ふ新嘉坡の防備問題は、蘭印に對する第三國への備へであると同時に、蘭印に對しても忠順を要求する武力示威とも解する事が出来る。又それは英國の支配力の弱まる度に蠢動する印度以下の民族運動威嚇を目的とするこれ等東方植民地自體に對する武力示威とも言へて、新嘉坡の持つ政治的意義は以上に盡きる。

然し新嘉坡の軍備は、果してこの政治的要求に充分應じ得るものであらうか。軍備の誇大な宣傳は、常に現實の戰

争回避を目的としてゐる。新嘉坡の防備は、一九三三年日英同盟の破棄以後工事に着手せられ、これ等東方植民地の汗の結晶たる千六百一十一磅(邦貨約二億七千六百圓)の施設費を以て行はれ、今なほ一年の維持費として五十萬磅(邦貨約八千五百萬圓)を投じてゐるが、英本國は例によつて一錢も投ぜずしてこの東方の守りを完成したのである。これによつて實現した設備としては五萬トン級の收容可能な浮ドックを始め、百萬トン入りの白臘タンク、射程三十哩(？)の巨砲を持つ要塞、近代的なセレータ飛行場等至極盛澤山である。又戦後英國側の宣傳する内容を見ると、龍大な機雷原の設置、巨大なトーチカ陣の新設等で、マレーに集中する兵力六萬、空軍ビルマを合して千臺と言ふ。そしてこれ等の上に立ちボバム總司令官が最近「新嘉坡の防備全し」と聲明した事は周知の通りであるし、マレー人も又この大規模な軍港設備を見て「海のマジノ線」と呼んでゐる。

巨費を投じ、人力の限りを盡した點、それは確かに海のマジノ線であるかも知れない。然しそれが眞實海のマジノ線であれば、次の事が想起されなければならないであらう。それは海のマジノ線に對し、フランスがヨーロッパに誇つた陸のマジノ線は、それに百倍する巨費と近代科學の粹を誇つてゐたと言ふ事である。然し我々は今回の歐洲大戰が勃發した折、この陸のマジノ線が案外あつてなく陥落した事を知つてゐる。勿論それは獨逸の周到な準備と精確な策戰の賜物であつたと言ふ事が出来やう。然しこの場合策戰を現實に勝利へ導いたのは機械化部隊の威力ではない。それは祖國の興廢をこの一戦に賭して、火と燃えた獨逸民族精神の偉業である。それは科學に對する精神の輝しい勝利である。それは科學に對する科學の勝利ではない。従つてそれよりも遙かに性能の劣る海のマジノ線は、例へ自然條件に恵れるとは言へ、この民族精神の高揚した國の攻撃には極めて無力であると言はざるを得ない。

又これを物質的に見ても、防禦は攻撃に十倍する武器と設備を要求するのである。現在新嘉坡に集る兵力は、印度兵でなければ濠洲兵と言ふ何れも植民地軍に過ぎない。又その持つ空軍千機も、一流強國の空軍に對抗し得る優秀機はその××××程度で、その中でブレンハイム級は極めて少く濠洲機が大量を占めてゐる筈である。従つて獨逸軍の空爆の如く千機、二千機と優秀な機の群なす攻撃の前には些かも安心も出来ない筈である。従つて新嘉坡もその自然條件に恵れて、正面からの攻撃は難しいかも知れない。然しボバム總司令官の「新嘉坡の防備全し」と言ふ意味は、その背後に連なる重慶とアメリカへの共同戦線が形成せられた事を誇示するものであつて、その戦線自體の劃期的な強化を意味するものでないと解する事が出来る。

かく見る時、近代科學の粹を盡す新嘉坡と言ふ既にも、未だ馬が入つてゐないし、例へ入つてゐてもその贅を盡した建物とは恐そ似つかない瘦馬と言ふ事が出来るであらう。事實この既の主人公たる英國東洋艦隊ですら、一二の優秀艦を除いて總トン數二十萬トン前後の瘦馬であるし、昨年十月のニューヨーク・トリビュン紙の計算では、東洋に浮ぶ英國側の艦隊として巡洋艦七（内英二、和蘭五）、潜水艇二十六（内英八、和十八）が擧られ、その他には和蘭の驅逐艦八と兩國合しての遠距離爆撃機百臺と云ふ數字に過ぎない。而もこれ等の海洋勢力は、印度洋の獨艦追廻しに出動して、この既へ身體を休めに歸る隙もないのである。事實あの老大な近代産業の基礎を有するアメリカですら、充自分國の軍擴に間に合ひ兼ねてゐる現状であり、英本國の産業は壊滅状態である。勢ひこの既へ馬を入れる活動は、自分達の手による軍需品の製造と、印度がその國內の參政問題を解決して百萬の大軍を此處へ送る以外に、途はないのである。

二、東方國會議をめぐる印度の地位

東方植民地の運命が、昨年下半年に始まる廣域國防經濟圈の樹立を内容とする戦時體制の完成にかかつてゐる事は、先にも述べた通りである。この線に添つては、昨年十月以降印度がその先頭に立つて活動を開始してゐる。

昨年六月英本國は、東方植民地の軍需動員を目的としてミッドランド銀行總裁サー・アレキサンダー・ロジャースを主班とする二十二名の委員會を印度へ派遣した。然し彼等は印度に到着後、急遽歐洲情勢に對應して東方植民地を打つて一丸とする經濟單位を組織する事になり、そのイニシアティブを英國の寶庫たる印度に依頼した。これによつて昨年十月リンスゴウ印度總督は關係十四國に招請狀を發し、これに應じて集る國は左の十一ヶ國とオヴザーバーとしての蘭印を合し、計十二ヶ國であつた。

濠洲▽ニュージーランド▽印度▽英領マレー▽ビルマ▽パレスチナ▽香港▽セイロン▽東アフリカ聯邦▽南アフリカ聯邦▽南ローデシア

なほ集まる首席代表の顔觸れは印度代表ザフルラ・カーン（元商工大臣）、濠洲代表マツセイ・グリーン以下ボウ・チュン、H・ハックスハム、O・S・コリア、フイリツプ・ミツチエル、D・J・スロツス、ノース・フロント、ヂュイガン少將、G・ウォルシユ、F・R・ホーア少將等であつた。

この會議は東方國會議と名附けられ、昨年十月二十五日から十一月二十五日迄前後一ヶ月に亘つて印度の首都デリーに開かれた。又會議は前記ロジャースを議長に、印度元商工部長ザフルラ・カーンを中央委員長とし、その下に軍

需、日用物資の兩委員會を設け、前者を更に左の十一分會に分つて進められた。

武器（自動車を含む）▽被服、裝備及彈藥貯蔵▽機械▽精密機械▽藥品、醫療器具▽食糧品▽石油、油類、潤滑油▽造船設備
▽航空機▽以上及その他の工業化に必要な原料及半製品

又會議はチャーチル首相の激勵電の内容を承認し、今後の軍需活動遂行のため、左の如き各國別の擔當物資を決定して解散した。

- 一、金屬 鐵（南阿、南ローデシア、印度、ビルマ、マレー、濠洲）▽鐵合金—マンガン（印度）、クロム（南阿）、タン
グステン（ビルマ、濠洲）、ヴェナジウム（南ローデシア）、▽ニッケル（ビルマ、濠洲）、▽錫（マレー）、▽金（南阿、南
ローデシア）▽銅（濠洲、南ローデシア）▽クロム（同上）▽鉛及亜鉛（ビルマ、濠洲）
- 二、燃料 石炭（南阿、南ローデシア、マレー、印度、濠洲、ニュージランド）▽石油（ビルマ、印度、ボルネオ、サラワク）
- 三、食料品 小麥（印度、濠洲）▽肉（濠洲、ニュージランド）▽乳製品及羊毛（同上）
- 四、その他 ゴム（マレー）▽黃麻（印度）▽チーク（ビルマ）等

なほ、右の中石油は蘭印、パールン、イランの三國に供給を仰ぎ、ニッケルはこれを佛領印度支那に求める事とした。

この會議の經過を如何に英本國が重要視したかは、「それが印度に開く東半球の屬領會議でなく、全英帝國の運命をかけた會議である」と煽動するアメリー印度ビルマ相の激勵電や、「武装せる力を以て新しき世界の建設に向ふ諸君の中に、我々は新たな激勵を見出す」と述べるチャーチル首相の祝電に、充分覗ふ事が出来た。従つてこの會議終了に際し、その代表團が左の如きコムミuniqueを發表するや、英本國でも直ちに第二段の行動に移つたのである。

「常置機關の設置は、問題の終結でなく、實にその出發點であり……激しき戦局の推移を見る時、極めて重要な意義を持つ産業戦の努力は、超人的速度を不可缺の第一要件とする」

この第二段の行動として現れたのは、本年二月右會議に代る常置機關として、印度に中央軍需局と東方軍需品供給會議の設置せられた事で、この軍需局長にはW・C・ホルデン陸軍少將、會議々長には海軍省顧問アーチボルト・カーターが何れも本國から派遣せられ、會議常務委員會は印度のS・A・ヒダリイ、濠洲のバートラムステヴエン卿、南阿のホーア少將、ニュージランドのF・R・ピコットの四人を以て構成せられる事となつた。

この會議の特徴とする所は、その劈頭リンスゴウ印度總督が挨拶に述べる如く、「スエズ運河以東及以南の英領諸國が經濟的一體となり、軍需資材の自給自足を樹立し、然る後過剰生産物の本國への提供が可能なりや否やを検討する」のであつて、最早やこの段階に入ればこれ迄の如き本國への物資供給と言ふ植民地的役割は第二義的となり、屬領自體の自主的な經濟活動が始まり、名實共に廣域國防經濟の特徴を遺憾なく備へた點である。

又この關係十四ヶ國を合すれば、その面積に於て英帝國の二分の一、人口に於て三分の二、貿易額又一年三億磅に上る英帝國の心臓部である。それ等の有する資源もこれを合すれば、鑛物資源に於て世界生産額の三〇%を占めるマシガン、年産六百萬トンの鐵鑛、六千萬トンの石炭を有して、若し日本を犠牲にしての蘭印獲得に成功すれば石油にも不足なく、食糧及農業資源に於ても世界年産額の六〇%に上るゴム、五〇%の米、年産四千八百萬クイントールの小麥、四十萬トンのバター、九百九十萬クイントールの棉を有して宛然世界資源の集中地たる觀を呈してゐるので、これ等資源の完全な動員と工業化が行へば、如何に英國の屬領とは言へ世界の一威力となる事は、容易である。

従つてこの段階に立つ最大の難關は、割當て物資の輸送問題とその工業化問題であつた。殊に後者は何れも植民産業の低調な状態にあるため、著しく困難を感ぜられたが、結局東洋情勢の急迫がこれを許さず、會議劈頭に述べたり
ンリスゴウ印度總督の言の如く、(註)工業化の重點主義を採る事となつた。

(註) この内容とは、右開會の辭の中次の部分を指してゐる。「諸君は新たな産業の創設に考慮をめぐらす時、諸君も英領植民地の中の一、二の國家を選定して特殊命題の解決に集中し、その産業責任のみを共通に分擔する方法が便誼なる事を見出すであらう」

一九三五—六年度三國工場及労働者數		
工 場 數	勞 働 者 數	
印度	八、九三〇	一、六七五、八六九
濠洲	二四、八九四	四九二、七七一
南阿	九、六五五	三〇三、五五七

をとりやうになつた理由は、全く印度が他の二國を遙か凌駕する良質な鐵と石炭を持ち更に發達した鐵道網と最近顯著な發達を遂げた水力電氣に恵まれ、その工場數に於てこそ上表の如く他の二國に劣るもの——然し印度の工場數

は使用労働者二十名以上の工場に限定せられてゐるから、それ以下の小規模工場の生産量を加算すれば、この二國を凌駕するに充分な可能性がある——その人口の壓倒的多數(註)に基く労働力の豊富と低廉の故であつて、印度はかくの如くして東洋英國勢力の指導的地位へ登場して來たのである。

註 一九三六年度の人口數に於て、印度は三億四千萬人、濠洲六百六十二萬人、南阿聯邦九百五十八萬人であつた。

三、印度工業化の前途

かくの如く英國東方勢力の防禦問題が軍需物資の補給問題に轉化せられてゐる時、印度はこの東方圍會議のイニシアティブを採る事によつて自らの地位を確立した觀がある。事實これ以後に於て、英本國は自己の必要とする物資動員のため、經濟分省を新嘉坡に新設し、東方植民地の自給圍活動と判然區別し、他はこれを印度に一任したのである。印度は又中央軍需局や軍需品供給會議の人的要素を現實に構成する事により、今後もその指導的地位を保つて行くであらう。従つて問題は今後印度にその重任を果して行く能力があるかどうか、言ひ換へれば印度はその低調な從來の植民地産業を近代化し得るか否かにかかつてゐると言へる。

印度は今次大戦を迎へて、これ等の東方植民地では最も早く國防體制の整備に着手した國である。即ち政治的には民族陣營に膝を屈して行政會議の擴張や國防會議新設の企圖、經濟的には輸出顧問會議の設置や五億六千萬ルピーに上る軍需品の發注、生産擴張費二億五千萬ルピーの支出、軍事的には前後二億九千萬ルピーを投じての兵力四倍擴張とその軍需動員を目的とする軍需部、經濟調査局、管理部の設置等がそれで、特に石油問題にも注目し年額二百萬ルビ

の科學・工業研究所を設置してビルマ石油會社やバンジャブ大學と協同で石油の精製過程の研究を行はしめた程である。又印度防衛法なる治安維持法を發布して國內の取締りに當り、爲替管理、戰時資金の募集等も最も早かつた。かくて印度は昨年度に於て一日平均二百萬ルピーの國防費を投じ、特にその武器製造と生産擴張の面に著しい効果があつたやうである。即ちモレスウオース少將のラジオ放送は、大戦以來印度に千一種の新種工業が勃興し、近代軍需品二萬餘種の中一萬二千の製造が可能となつたと報じ、その中には中型戦車や六吋榴弾砲等の近代兵器の名も擧げられた。又生産擴張の面には石炭及鋼鐵の劃期的な増産と對英プロック輸出の八倍増額が發表せられた。然しこれ等には、何れも著しい誇張が含まれてゐる。出來ると言ふ中型戦車の中眞實出來るのは車體のみで、エンジン及鐵帶は未だ出來ないのである、たゞ百パーセントに眞實なのは著しい技術者の拂底と生産擴張資材の不足に悩んでゐる事だけである。そして印度の近代化に關連し、戦後に於ける英國資本主義との衝突を豫想してロジャース委員會が一時分裂に瀕し、又印度の參戰問題をめぐつて未だ民衆陣營との妥協もつかず、今日迄海外へ派遣し得た兵力も十七萬前後に過ぎないと言ふ事だけである。

然し印度は知られる通り、「英國の寶庫」である。それは無限の兵力と軍需資源に富み、カーゾン卿も一八九八年に「印度は我が帝國の中心である……若し我々にして印度を失ふ事なかりせば、例へ他の如何なる部分も失ふとも、我が帝國の太陽に沈む事はないであらう」と讚美する國である。その原棉産額は世界の四・七%、小麥産額は四四%、黄麻産額は實に九九・三%で、鐵、石炭、マンガン、硝石等に於ても無限である。又今日より遙かに生産能力の低い第一次大戦當時に於てすら、印度は近東戰線を中心に前後五ヶ年を通じて八千萬磅（邦貨約十二億六千萬圓）に上る

精製品とそれに三倍すると礦物及食糧品中心の原料半製品を本國へ供給し、その中小麥は五百萬トン（價格四千萬磅）を占め、墾殖用の黄麻製土糞のみでも一億三千七百萬磅の巨費に上つてゐたのである。又平時に於けるその工業能力も左の如きものである。

一九三六—七年印度礦山物産出高（單位トン）

石炭（二二、六一〇、八二一）▽鐵（二、五五三、二四七）▽銅（三一八、五四八）▽金（三三三、三八五オンス）▽銀（五九七七、三四五オンス）▽雲母（八六、六七二鹿）▽マンガン（八一三、四四二）▽ワクロヤイト（四九、四八六）

同年度主要工業生産高（單位トン）

黄麻製品（一、二五三、一一三）▽鉄鐵（一、五五二、三三九）▽鋼鐵及製品（一、四七四、一六三）▽ガソリン（九一、〇八八、八三〇ガロン）▽セメント（九九七、四一四）

又我々はこの上に立つて目下盛んにアメリカの手が伸び、印度又英本國の援蔭行爲を肩替りすることによつて英、米、支の共同戰線を強化し、負擔の軽減を圖つてゐる事に注意しなければならない。既にアメリカはボンベイ州にフォード及ゼネラルモーターの自動車工場を設置し、年二萬五千臺の軍用トラック製造に着手したと言はれてゐるのである。又重慶側のために活動としてゐたアメリカ・インター・コンチネンタル航空會社の社長ウィリアム・パウエルも印度に工場敷地を買収し、昨年バンガロールに新設せられた資本金五千萬ルピーの印度航空機會社もアメリカ資本と言はれてゐる。又印度の援蔭行爲としては去る一月十八日試験飛行に成功した重慶カルカッタ間の定期航空、ベンガル、アッサム鐵道の終點サジアと重慶を結ぶ軍用路の測量、ビルマ・ルートへの自動車及水力電氣の技術者の大量派遣等が噂されてゐるのである。

これ等を綜合すると、印度も未だ所期の成績は擧げ得ないと言へやう。然し一年に満たない成績を以て、將來を云々出來ない。然し時が今それを解決し、急速に上向線を辿らうとしてゐる事だけは明瞭に言ひ得るのである。

第四章 結 論

前記軍需委員會主席のロジャースは、最近歸國したが、今なほ「印度洋諸國の運命は、一に印度の工業化如何にかかり、この解決に成功した時始めて新嘉坡軍備の威力が發揮せられる」と絶叫し、全屬領に協力を要請してゐる。彼等はこの問題の解決に當り、一應印度を中心とした上、最近漸くウイラ・ウエーズ級の爆撃機製造が可能となつた濠洲の精密工業と南阿の半製造工業を副として、進まんとしてゐる事は明かである。この上に立つて印度の價値、役割、將來性に就ては既に述べた。その工業化の前途は、植民地國家として極めて困難な條件の下に置かれ、今後なほ幾多の紆餘曲折を経なければならぬであらう。

然しこれも大英帝國が全力を傾注する時、時間の問題に過ぎないとするも、その時は必ず次の二つの前提條件を充足した後でなければならぬのである。その前提條件の一は割當て物資の輸送に當る船舶問題の解決であり、他の一つは石油問題の解決である。

英帝國の所有汽船は一九三七年六月末に於て九千八十四隻、二千三十九萬八千五百五十七トンで、平時に於てその三分の一が印度洋及太平洋に浮んでゐると見られた。然し大戦後は本國所有船の被害によつて、目下東洋に浮ぶ隻数は平時の五分の一以下に減少し、輸送陣の主軸はノルウェー、希臘、和蘭等の中立船によつて満たされてゐる現状である。而も我々は何故獨逸艦艇が東洋にも現れ、印度は既に數隻の犠牲を出した危険區域に入つてゐるかを考慮しなければならぬ。航路の危険は常に備船の困難と備船率の暴騰を齎らしてゐる。一九四〇年一月のニューヨーク・タイムズ紙が「メキシコ灣と北大西洋諸港間の備船率はバレル當り十六仙から六十仙に、メキシコから英佛向け石油船備船率は現在二弗五十仙から十五弗に暴騰し」、それ等中立船ですら最近では危険の激増によつて就航を拒絶してゐる旨を報じてゐる。これは又同時に、明日の印度洋の姿である。東洋に重大な關心を持つアメリカ自身も、未曾有の船舶飢饉に襲れてゐる。従つて印度洋諸國は今莫大な資源を擁しつつも、この輸送難のため重大な危機に當面してゐるとも言へるのである。

又石油問題に於ける蘭印の不安な地位に就ては既に述べた。然し注目すべきは、印度洋諸國の石油生命線とも言ふべきヒマラヤ南側の石油地帯——ビルマ、バンヂャブ、バルチスタン油田を含む——が、最近著しく減産となつてゐる事である。この理由は油田の歴史が極めて古いためであらうが、例へば一九二〇年當時三千四百萬ガロンの産額を示したビルマ油田も、一九三八年度に於ては二千六百三十八萬ガロンに減産し、バンヂャブ油田の如きは全く枯渴状態に達し、僅かに附近のアトック油田及アッサム油田の開鑿に希望をつなぐ程度である。然しこの状態は又蘭印を除くアジア外側石油地帯にも言及せられ、嘗つては百二十萬トンの産額を示したサラワク油田も最近五十萬トン程度で、新に湧出したミル油田を合するも九十七萬トン程度である。而も留意すべきは、例へばビルマ石油の八割五分迄が悉く印度へ輸出せられて燈火用に宛られるが如く、印度洋諸國の石油はこれ迄高度の精鍊過程を経る事なくして使

用せられてゐたため、今軍需産業に不可欠な動力資源としての高オクタン價ベンゼンに轉換し得るや否や極めて疑問であることである。高オクタン價ベンゼンの精鍊には極めて巨額を要するし、これが不可能ならば今後新嘉坡も飛行機を飛ばし、軍用トラックを動かす事は不可能となるであらう。

従つてこの相關連する二つの問題も、基本的には印度の工業化問題に左右されながら、東洋に於ける大英帝國の威信を決定する事になるであらう。少く共現在には、印度と新嘉坡が相並んで英帝國の運命を双肩に擔ふと言ふ事が出来る。

大戦以後の印度

英國的立場に於て大戦勃發以來の「印度問題」は、昨年六月を一轉期とする前後兩期に分けて觀る事が必要であらう。

何故なら獨逸の電撃作戰が開始される迄の印度は、第一次大戦當時と同様、英本國へ軍需資材を送る植民地的役割を擔當すれば事足りたのであつたが、それ以後に展開された伊太利の大戦参加とフランスの崩壞が地中海ルートを切断する事によつて、印度を全く異なる事情の下に置いたからであつた。即ち、印度を含む極東の全英ブロックが孤立の危険に瀕し、本國の手を離れての自主的防禦が必要となつて來たからである。

それは古き頭布カウチと腰卷ウエストの印度を支配する英國政府にとつては、正に驚天動地の出來事であつた。それ迄は有餘る鐵礦をカルカッタのフーグリ河に横はる英國船に積込めば事足りた印度が、突如これ迄のバーミンガム依存を拋棄して自らの黒き手もて鋼鐵に鍛へなければならなくなり、而もそれ等の鋼鐵を爾餘の植民地たる濠洲、英領マレー、南阿聯邦等々へ供給せざるを得なくなつたからである。その事は、昨年十月印度の首都デリーに開かれた英國植民地十一

ケ國の東方閣會議に表現される如く、最も進んだ産業的基礎を持つ印度が、必要とせられるこれら英プロックの自給権確立の上に指導的地位を擔當する事を意味し、同時に又それは印度が従來の植民地的役割を拋棄する事を意味してゐた。

大戦以來本國より派遣せられたチャタールフィールド軍事、ロジャース軍需兩委員會指導の下に印度政府の採つた政策は、如實にこれ等の事情を反映してゐる。即ち、昨年六月以前に採られた政策は、次の如く要約する事が出来るのである。

- 一、印度下院の年期一ヶ年延長(註一)
- 二、昨年四月から實施と決定してゐた聯邦制度の無期延期
- 三、印度防衛法の發布
- 四、總額二億ルピーの軍備擴張と戰時經濟の編成(爲替管理の實施、軍需品の統制等)(註二)

(註一) 印度の立法議會が國家統治の中心問題たる國防、外交、宗教及總督の責任事項(本國任命の官吏の俸給、年金等)に關する豫算の審議權を持たず、全く總督の傀儡機關に過ぎない。現在の立法議會は一九三六年の總選舉によつて構成されるもので、その中下院(年期三年)は一昨年十月を以て年期を満了する筈であつたので、同八月十九日附官報を以て一ヶ年延長したのであつた。

(註二) 經濟統制の領域に於ては、對英貨以外の外貨賣を二千ルピー以下に制限する爲替管理を發動した外、一昨年九月二十五日附官報を以て、武器、彈藥等二十七品目の輸出を禁止し、カルシウム、タンクステン等基本的軍需資材六十品目の輸出を軍需局の統制下に置くと共に、昨年五月輸入の領域にも統制範圍を擴大し、ゴム製品以下百三十餘品目の許可制を實施した。

然し昨年六月以降に印度政府の採る政策には、次の如き大きな變化が窺はれたのである。

- 一、國防組織の計畫
 - イ、行政會議(註)の擴充と藩王國代表を含む國防顧問會議の新設
 - ロ、國防委員會及市民義勇團の組織
- 二、軍備擴張(機械部隊の整備等)
- 三、自給經濟の確立
 - イ、平和産業の救済
 - ロ、技術員の動員
 - ハ、重工業の自給計畫

(註) これは我國の内閣に當る機關で定員七名(内三名印度)國防、財政、司法交通、教育保健、商業勞働、農民の七部十五局を以て構成されてゐる。

二

英國の植民地支配に歴史的變化の起きた昨日六月を轉機とする印度政府の動向は、その諸政策に示される如くこれ迄の遠心的方向から求心的方向へ向つた事は争はれない事實であつた。具體的に言へば「對英輸血路の強化」と言ふ植民地的役割から「國內自給權の確立」と言ふ近代國家的役割へ轉じたのである。

事實、昨年六月以前には極めて消極的な政策がとられたのであつた。例へば下院の年期延長も、要するに戦局見透しの困難な當時改めて總選挙を行ふ事が、總督の傀儡機關に過ぎない立法議會に當時擡頭しつゝあつた反英要素をより多く導入する事を恐れたまでに過ぎず、聯邦制度の實施延期もそれが戦前から輿論の沸騰した問題であり、總督が「英國太守」の権限に於て強制實施する際には一九二〇年當時の悲劇と混亂をひす起す形勢にあつたので、一應これを延期し、究極の目的であつた全印度を擧げての大戦参加を要望する國內各派との政治交渉(註一)を有利ならしめんとする準備工作に過ぎなかつたからである。

又軍事、經濟的進域に於ける追加豫算二億ルピーの計上も、これを以て現有兵力の四倍擴張案(註二)を立案したものの、それは國內の内亂に備へると共に歐洲戦線へ送るべき人的プールの二重目的を持つものである事は印度國防軍司令官カツセル大將の屢々言明する所であつたし、その二億ルピーの追加豫算中七千萬ルピーは事實軍需工場の擴張費に當てられ、英本國へ送るべき輕戰車、高射砲、爆彈、砲彈の製造に全力を擧げたのであつた。

(註一) 印度總督と各派代表との第一回會見は、一昨年九月に行はれ、獨りガスデイのみは、昨年六月の第二回會見迄に前後五回總督と別個に會見し、現在迄に總督は通計五十二回各派代表との會見を行つてゐる。然しこの第一回會見の結果は、同十月十七日に發表された英國白書が各派の要望する自治問題に就て事前に何等協議する用意のない事を明かにし、單に戰時評議會への参加を要望したのみであつたので、決定的に決裂した。

(註二) 昨年六月以前の軍擴四倍計畫の内容は次の如くであつた。
陸軍 現有兵力二十六萬(常備二十一萬、豫備四萬)の中、歐洲戦線へ送つた數萬を除き、その第一期計畫として五萬三千名を増員、合計三十二萬名とする。

空軍 現有八ヶ中隊(三千八百八十名)を四倍にする。

海軍 現有船數十九の二倍半擴張。

機械化部隊 カナダ式裝甲車を中心とする擴充。

これらに比して遙かに積極的性質を持つ昨年六月以降の印度政府の企圖は、先づダイナミックな國防形態の組織から始められた。國防政府の主體たるべき行政會議の擴充、國防統制の事務を擔當する各軍管區毎の國防委員會設置、大衆動員を目的とする市民自衛團の各州別組織がそれであつた。殊に行政會議の擴充は從來の七部門に情報、交通、軍需等の當面必要とする四部門を追加し、文字通りの舉國一致形態を採るため同六月末から各派代表に統治機構への参加を求める第三次會見を行つたのである。そしてその席上、更に交渉を有利ならしめる好餌として印度自治問題の核心にも觸れ、戦後問題を協議すべき中心的組織體として國防顧問會議の新設を提唱したのであつた。

この第三回會見は六月二十九日國民會議派代表ガンデイとの會見(註)に始まり、七月九日ヒンズー・マハサバの代表サルカル博士との會見を以て終つたがこれは全く前回と異なる意味を持つものであつた。前二回を政府の要請とすれば、これは要求であつた。英本國の手を離れた今日、これなくば英國支配の崩壊する瀬戸際であつたればこそ政府も膝も屈し、その植民地支配に於ては全く異例な統治機構への参加をも各派代表に求めたのであつて、それは聴かざれば強制斷行の宣言でもあつた。

(註) ガンデイ個人としては、第六回目の會見であつた。

従つて六月二十九日ガンデイが前後三時間の激論後六度政府と決裂し、汚れた腰巻に夜風を膨ましつゝマハデウ。

デサイとヒヤレカルの兩名に扶けられてシムラの山を下つた瞬間に、國民會議派以下の反英勢力に對する大彈壓が、印度政府によつて決意されたのであつた。果せるかな、三日を経た七月二日の國民議會派前進派指導者スバシ・チャンドラ・ボースの逮捕を皮切りに、六月以前に於ては單に民衆に無言の威壓を加へるに過ぎなかつた印度防衛法（註一）が現實に發動せられ、荒狂ふ強權の怒濤に全印度に渦巻いて同十一日のカクザール黨の一齊檢舉、十月のネール檢舉となり、一九三四年當時に近い恐怖時代を現出したのであつた。それは茨を越えて所信の貫徹に進む印度政府の悲壯な姿でもあつた。（註二）。

（註一）これは四章二十一條より成る戦時下の緊急治安維持法とも言ふべき法令で、好ましからざる人物に對し正規の手續きを経る事なくして逮捕、投獄、斷罪の特權を政府に附與する外、交通労働者には罷業参加を絶対に禁止し、事の眞偽を問はず、社會的影響ある流言及行爲をなす者を懲役五年に處するなど詳細に規定し、英國支配の暗黒面を露骨に表示してゐる。

（註二）政府はこの大彈壓によつて反英勢力を無力化し、その基礎に立つて改めて國防組織を整備せんとしてゐるのであつて、飽く迄も國民會議派が聴かざればその中のナシヨナリスト派から代表者を選ぶ無理迄重ねて舉國一致の體制を採らんとし、行政會議に参加せしむべき各派代表としては既に次の四氏に交渉中であると傳へられる。

パローダ藩王國首相、クリシュナマチャリイ▽自由聯盟代表、サー・ジェハンギール▽回教聯盟代表、リアクアタリイ・カー▽國民會議派ナシヨナリスト代表、M・S・アネイ。

經濟的領域に於て、印度政府の積極的な意志は、自給經濟の確立となつて現はれた。

六月以前の政府の經濟方針は、平和産業の犠牲に於てその植民地的役割を充足する事にあつたが、そこに生れた印度産業の跛行状態は早くも自給經濟の確立に障害となる状態に達してゐた。事實、歐洲市場の閉塞に伴ふ印度産業の

打撃は大戦勃發以來僅か八ヶ月間で三億ルピーと推定せられ、五月初旬早くも深刻な金融恐慌（註一）に見舞はれ始めてゐたからである。従つて政府の方針は先づこの金融恐慌の征服に始まり、本國より經濟使節ロジャースを迎へる事によつて戦前より打撃の最も激しかつた紡績業者に五千萬ルピー、皮革工業に月千萬ルピー、十二萬五千足の軍靴と年三萬トンの編皮（註二）等大量の軍需注文を發して自給經濟の一翼を擔當すべき平和産業の全面的建直しを企圖し、歐洲市場の閉塞に伴ふ國內滞貨の處分にも輸出顧問會議を新設して對處した。即ち、歐洲市場に代るべき濠洲及アメリカに駐在員を派遣し、黄麻、綿糸、茶、皮革、亞麻仁油の販路開拓に必死の努力を拂はしめると共に、自給方針に基く必要物資をそれ等兩國から購入する事によつて國內産業への刺戟をも企圖したのであつた。

（註一）これは勿論英國に關する悲觀材料の山積と漠然たる戰爭不安に原因するものであつたに相違ないが、更に又政府との交渉遲延に業を煮やしたガンデイがその政治的デモとして全國商店に命令した昨年二月の密令が一役買つてゐる事も事實で、その金融恐慌はルピー紙幣に對する不信、同銀貨の退職及取付騒ぎとなつて現はれた。これを數字で示すと大戦直前の紙幣發行高二十一億六千萬ルピーは昨年三月末の二十五億二千萬ルピーと三億六千萬ルピーの大幅インフレを招來したのに對し、ルピー銀貨は大戦直前の七億四千三百十萬ルピーから、昨年三月末の五億五千九百四十萬ルピーに減少し六月末には僅か三億三千萬ルピーに激減したのであつた。

（註二）これ等は全部近東北阿戦線へ送る軍需品であつた。

然し本國産業の増減に伴ふ印度重工業の自給計畫は、その軍事目的に併行して製鐵工業と化學工業に重點を置かれたが（註）、その計畫遂行に當つて最も基本的な政府の當面する困難は精密機械の入手難と技術員の不足であつた。そのため政府はバーミンガムに代る役割をアメリカに懇請するため、數度に亘る技術者團の派遣となつたが、更に又技

術員の不足に對する對策としては英本國の例にならひ、六月二十六日附を以て在印英國人中の十八才以上五十才未満の者に對する産業動員の權利を確保し、併せて印度人技師四千名を強制的に動員した。又、基本的軍需工場たる機械、鐵道工場百四十を調査の結果今後一年に一萬人の技術者を必要とする事が判り、技術訓練調査委員會の下に一期三千名宛の黒き技術者養成を企圖し、その不足に充當せしめる事としたのである。

(註) この結果政府は、千一種の新興工業が勃興し、その兵器製造工業も二萬餘種の製造が可能となり、製鐵能力も一五%方増進した旨を發表してゐる。

又軍事的にも昨年六月以降に現れた變化は、軍擴の重點が量より質へ移された事であつた。即ち、それはベンガル砲兵隊を中心とする機械化部隊の擴充となつて現れ、飛行機製造の可否も始めて論ぜられ、新に計上された五千八百萬ルピーの軍需工場擴張費も、その中九百萬ルピーはこれ迄の如き武器工場の擴張に當てられず、より基本的な製鐵工業に投資された。又内亂に備へて純印度人部隊の改編に着手し、邊境及ソ聯に備へるクエツタ、内亂に備へるアマバラ、ブーナの三軍事基地を決定、政府はその政治的破綻を除いて一應自主的國防形態を整備したのである。

三

然し古き印度の苦悶は、實に此處に出發してゐた。

これ等の國防計畫が軌道に乗り全印に渦巻く黒煙がタジマ・ハルの青き空を穢す時、果して印度大衆は何んと言ふか——それは政治的に解決せらるべき問題ではあつたが、その政治解決の未だついてゐない事も、惱みの種であるに

相違なかつた。

今この自給計畫に基いて印度が新に生産を開始したと發表せる千一の種目中主なものを列記すると、

一、既に生産を開始せるもの

金屬—銅、眞鍮、ニッケル

化學製品—クロロホルム、枸橼酸、カルシウム、乳酸鹽、重炭酸加里、カオリン、タンニン酸、酸化亜鉛、硫酸等

油類—航空用滑油、エンジン・オイル、その他、塗料、醫療機械の部分品

一、準備中のもの

曹達灰以下の重化學製品、電球、航空用スピリット等

又鐵工業も戦前は一年二百八十九萬トンの鐵鑛を輸出しながら三千十一萬ルピーの鐵製品を輸入してゐたのであるが、戦後は英本國へ總額四百萬ルピーに上る鐵筋を、エヂプトへ總額五百萬ルピーに上る釘、鋼鐵タンク、鋼鐵針金等の製鐵品を輸出するに至り、不足せる唯一の食糧資源であつた砂糖も、戦後は生産過剩に陥つてゐる程である。

従つてその範圍は相當廣く、その化學製品に見る如く植民地産業としては、相當高度を目指してゐる事は判るのであるが、問題は精密工業の基礎を欠く印度が、施設資材の入手の困難な戦時下に於て如何にしてその計畫を軌道に乗せ、如何にして極東英ブロックの要求する生産量を獲得するかにあつた。

それ等は印度産業の近代化——延いては印度自體の近代化の苦悶と言ふ事が出来る。事實印度が獨立した一單位として行動する事を要求せられた時、印度は既に國際政局の一線へ押出されたのであり、その運命の充足には印度が近

代國家たるべき事を必要としたのである。然し印度政府がこの産業の近代化に乗出した時、英國的立場に於て當面しなければならなかつた最も基本的な問題が二つあつた。その一は印度近代化の基礎となるべき印度産業の停滞性で、その停滞の原因は印度産業の本質が農業であり、土地所有の形態が封建的な農村協同體である事によつて説明せられた。そしてその停滞性は、更にM・N・ロイの指摘する如く、農村人口の十分の一にしか當らぬ僅か三百萬の工場労働者の性質が、半農的労働者であり、その産業組織もカブリー(Kabuli)、シルダール(Sirdar)、カムガニ(Kamgani)等の制度によつて著しく封建的性質を帯びる事情により拍車をかけられてゐる。他の一は、植民地の市場性確保を目的として英國の傳統的政策となつてゐる民族産業の壓迫と、印度工業化の過程に必然起る民族産業の勃興と、利害の全く逆行する二つの立場を如何に調和するかの問題で、民族産業の勃興は民族運動の擡頭を招來する危険があつたのである。

又これ等の基本的問題の上に立つて見る時、印度は更にその資源問題に於て、石油と石炭の解決に逼られてゐる事を知るのであつた。

元來印度工業化の提唱せられる基礎的條件は、印度の礦物資源が極めて豊富で、世界に誇る鐵(英帝國內第二位)世界産額の五分の三を占める雲母、マンガン、ウオルフラム、硝石等の軍需資材を獨占するためであつた。然し近代動力に最も必要な石油のみは極めて貧弱で、従來國內需要量の六〇%、一九三三年度に於ては五億七百十八萬ガロンを輸入に仰ぎ、その中三億五千萬ガロン見當はビルマ石油であつたが、このビルマ石油が最近涸渇状態に近づき、その産額に於て従來の輸入量に達せぬ三億ガロン以下となつた事がバンヂャブ石油の減産と併行して恐慌を捲き起して

ゐるのである。

又印度の石炭は、炭田の分散性と冶金用コークスに使用し得るベンガル炭を除いての品質劣等が、石炭工業化の重要な障害となつてゐるのである。殊にO・H・フォックス氏の推定による埋藏量六百億トンの中地下三百米以上のそれは二百億トンに過ぎず、重工業に使用し得る優良炭は五十億トン前後で今後百年の生命と言はれてゐるだけに、到底極東の英プロックに對する全供給量を確保してゐるとは言へないのである。(註)。

(註) 従來印度ではアフリカ炭を輸入して品質の劣等を補つてゐたが、これを石炭の輸出入統計に見ると、戦前は輸入七千トン、輸出三十一千トン、戦後は輸入、六三〇千トン、輸出、四三四千トンとなり、軍需工業の勃興に伴ふ興味ある變化を示してゐる。

而も一般産業の近代化問題にも關聯して、石炭工業化に重要な障害となる今二つの問題があつた。その一は奥地よりカルカッタ或はボンベイに積出した小麦の價格が遙々カナダから輸入した小麦の建値より高くなると言はれるほど馬鹿氣た運賃を食ふ鐵道及電力の問題であり、今一つは各國の採炭能力に比しその二分の一以下である印度鑛夫の能力問題(註)であつた。

(註) 英國鑛夫の二五〇トン、アメリカ鑛夫の七八〇トンに對し、印度鑛夫一年間の平均採炭量は一九三四年一三〇・二トン、一九三七年一二八・五九トンであつた。

かくて印度政府の苦悶は、施設資材、動力、産業組織の三つの問題を前にして貿易風期モンスーンの憂鬱をたたへなければならぬのであつた。

四

然しその苦悶は、獨り印度政府のみの苦悶ではなかつた。異なる意味に於てではあつたが、同様の苦悶をなめなければならなかつた今一つの印度の姿があつた。印度獨立のために戦ふ國民會議派、全印度回教聯盟等が、それであつた。

一九三七年の第一回總選舉に自治領十一州中八州の制覇を遂げた國民會議派の戦後に於ける政府との闘争は、一昨年十月十七日の英國白書を繞つて、最初の火蓋を切つた。その英國白書は、總督とガンディの第一回會見の内容に基き、印度の大戦参加を承諾する條件として同派から提出された要求を一蹴したものであつた。その要求は、十月三日國民會議派議長ブラサドとネールによつて總督の下に齎され、内容とする所は印度自治の即時保障と中央統治機構の改組問題であつた。その闘争の形式は、既に知られる如く、これ迄の輝かしい勝利の鋒を納めての自治州八に組織する國民會議派内閣の總辭職であり、その闘争目的の具體的内容は、昨年三月十五日中央州ラムガルに開かれた第五十三回同派大會の決議文となつたのであつた。

その決議文は英國の大戦参加を、「印度、アジア及アフリカ諸民族の犠牲の上に建設せられたる英帝國の存続強化の目的を以て遂行する」ものでありと規定し、「國民會議派は、印度民衆の同意なくして爲さるる英國政府による印度の参戦並に右戦争遂行のための印度資源の搾取に對し、寛恕し得ざる侮蔑なる事」を宣言し、「印度民衆が獨力を以て自己の憲法の構成を定め、對外關係を樹立する事」を要求したのであつた。そしてその要求は七月七日の總督に

對する

一、印度の完全獨立の保障

二、獨立に移行する過渡的形態としての國民政府の組織

の二要求(註)に具體化し、政府と正式に決裂したのであつた。

(註) この要求は昨年六月二十九日に行はれた總督・ガンディの第二回正式會見の内容を検討するため七月三日より七日迄デリーに開かれた全印擴大中央委員會に於て決定した言はば同派の總督に對する回答であつた。

我々は、この過程を國民會議派左翼化の過程と理解するのである。何故なら内閣の總辭職による議會主義の拋棄は、それ自體で左翼的な意味を持つものであつたし、その後ワルダに開かれた六月十五日の運用委員會は、遂に彼等の行動を飽迄も合法主義の埒内に引止めんとする指導者ガンディの下を離れ、革命的目的遂行のため前進する事を宣言したからであつた。

それはネールの率ゆる左派が、國民會議派の指導權を掌握した歴史的瞬間であつた。然しガンディは、彼等の神であつた。その神をすら見捨てて進まざるを得なかつた事は、取りも直さず左翼の勝利であると共に、國民會議派自體の苦悶の表象でもあつた。そしてその勝利は、大戦勃發以來歐洲市場の閉塞によつて苦境に立つた印度産業資本家(註一)と戦後の物價騰貴(註二)に苦しむ大衆の共通する利害關係が、更に急進インテリ層を代表するネール一派のそれと結びいたからに外ならなかつた。事實、ワルダの運用委員會に於ては今後の闘争方針として、

一、國防委員會、市民義勇團の關係者と交通する事をも禁ずるポイコット

一、戦債應募の拒絶
一、義勇軍の組織

の三を決定した後、激論八時間最初にガンデイのボイコットを提議したのは印度産業資本家と緊密に結付く會議派右翼の代表ラヂャゴバラチャリ(註三)であり、これに賛成したのは同じ右翼のサルダー・バテル(註四)であつた。

(註一) 事實印度産業資本家の苦境は、三億ルピーと言ふ金額に表現される如く極めて深刻で、昨年三月末に於て最絶頂に達し、最も被害の大きかつた紡績資本家には次の如く反英的にならざるを得なかつた事情があつた。即ち、印度の紡績業は戦前エチプト棉に對する外棉輸入税の倍額引上げによつて高級綿布の紡績が不可能になつた上、一昨年四月の英印新協定により二億六千萬ヤードの綿布ストックを持餘した一九三九年に於て更に英國から三億五千萬ヤードの綿布を買はなければならなかつたのである。

(註二) 一昨年九月に於て食料品、織物一五—二〇%、煙草五〇%、文具類五〇—一〇〇%、藥品三五%の數字が發表され、同月から政府は物價統制に着手したが、それは、藥品、食料品、鹽、燈油、下級綿布の五品目に限る各州への委任事項に過ぎなかつたので、大衆の窮乏には何等の役にも立たなかつた。

(註三) 一八七八年生、元マドラス州首相及マドラス大學經濟教授、國民會議派切つての理論家である。
(註四) 一八七五年生、元辯護士、同派切つての實際政治家である。

然しこの左翼のヘゲモニーが再び崩壊する歴史的瞬間が、續く七月の二十七日の全印大會ブーナー會議に於て起きたのである。その會議は、一世の雄辯をふるふ左派の指導者ネールの左の如き挨拶を以て始められた。

「私は國民會議派が能ふ限りの強力な組織たらん事を欲する。私はそれがこれ迄と同様退ましき統一體たらん事を望む。私はマウラム・アプール・カラム・アザッドの賢明な指導を欲する。私はサルダー・バテルの偉大な政治的手腕を欲する。私はラヂャゴバラチャリの輝しき才能を欲する。同志よ、私は各州の、各縣の指導者である所の諸君の一人一人を欲する……然し不斷に變化する狀況の下に於ては、時が不可欠の要因である。

獨立と言ふ輝ける星は、混亂の中から生れて來るかも知れない。又混亂の中から生れて來るものは、黒い雨雲のみかも知れない。然し將來が何んであるにせよ、我々の完全な獨立は鬭争と陣痛と悲哀なしに獲る事は出來ないと、私は確信する。國民會議派が手を拱ねて餘りにも長く待ち過ぎた事は明かである。我々は、餘りにも辛抱強く、既に三週間は過ぎた。避け得られない鬭争を前にして、我々は既に基礎的條件である所の精神的・心理的準備をも終へた。我々は、我々の道を選ばなければならない。我々は、我々の力を前進せしめなければならない。残された唯一の道は、迅速な決定と行動のみである」——一九四〇年七月二十九日附ヒンドスタン・スタンダード紙より——

そしてこれを湧上る拍手で迎へた一同は、ラムガル大會の決議を變更するワルダ聲明(註)を九一對六三、政府に對する要求綱領を決定したデリー決議を九五對四七の投票數を以て確認したにも拘らず、その決議の内容を同九月に於て大衆行動に具體化さんとしたネールの提議は、至極冷淡に卻けてしまつたのであつた。即ち、戦前から次第に高まりつつあつた左翼の勢力は早くもこのブーナー全印大會を絶頂として轉落への一步を踏出し、いよいよ行動の火蓋を切らうとした瞬間に於て鳥は飛上る代りに地へ落ちてしまつたのである。印度政府が昨年六月に一轉換期を迎へ

た時、國民會議派も又その大きな轉換期を迎へたのであつて、一度轉落を開始した石のスピードは早かつた。十月末日にはネール、十一月にはバテル迄が政府彈壓の手に檢擧せられ、九月十五日から開かれた第二次ブーナー運用委員會議は折角行動の基準として確認したワルダ聲明をも拋棄して再びガンディの指導下に戻つてしまつたのであつた。

(註) 前記のワルダ運用委員會が、ガンディと袂別する事によつてラムガル大會の決議文中、その闘争手段の部分の變更を餘儀なくされた事情を指してゐるのであつて、その部分の決議文とは次の如きものであつた。「會議派黨員はガンディ氏の宣言に注意せられん事を望む。ガンディ氏は大衆がその紀律を嚴格に遵奉し、獨立宣言書に規定せる建設的綱領を實行しつつありと信する時、始めて人民不服從宣言の責任を引受くるものなりと宣言せられたり」

一時は晴れるかと思はれた印度獨立運動の空も、かくて再び憂鬱な雨雲に蔽はれてしまつた。この現象を我々は何んと解釋すべきであらうか。國民會議派の態度が、左翼の指導下にありながらも憲法制定會議の召集や國民政府の組織を單に大戰参加の前提條件として要求するのみで、その大戰参加を絶対に拒絶するものでなかつた事が、大戰の影響下に尖鋭化しつゝあつた印度大衆の信望を繋ぎ得なかつた事も、原因の一であらう。又客觀的には國際情勢の變化も、その一であつたらう。然しそれ等にも増して致命的な原因となつたのは、政府の大彈壓と産業資本家の裏切りであつた。

事實、七月二日のボース檢擧(註一)に始まる政府彈壓の手は國民會議派左翼を中心にくりひろげられ、その惨虐さの點に於て一九三四年の暗黒時代(註二)を思はせるものがあつた。然しそれが歐洲情勢の變化に伴ふ最後の手段

であつて見れば、政府側としても止むを得ない行動であつたかも知れないが、このため左翼から出た犠牲はネールの檢擧された九月末ボースの率ゐるフォワード・ブロックのみで一萬名以上、労働組合、農民組合を合すれば實に二萬二千五百名に上つて左翼指導者は完全な壊滅状態に陥つたのである。その時、指導者を失つた會議派大衆は何處へ行けば好かつたのか——ガンディが再び姿を現はして大衆の王座に腰を下ろしたのは、さうした事情によつた。

然しこの一九三四年を想はせる暗黒時代の到來に戦いたのは印度大衆と民族産業資本家であつた。殊に産業資本家には、この政治的條件に加へて、更に彼等をこれ以上反英的なる事を阻止する今一つの有力な經濟的條件が生れた。それは昨年三月に底をついたと見られた大戰以來の彼等の打撃も六月以降は政府の樹立する國防計畫の恩恵を受けて次第に上向き始めたからであつた。昨年初頭歐洲市場の閉塞に伴つて六十五トン級の新型熔鑪數本を捨てたタター・スチール、インディアン・スチール・コウボレエシヨンの兩製鐵會社も、五月以降は大量の政府注文に息を吹返し、獨り鉄鐵のみでも平時に數倍する二十萬乃至二十五萬トンを英本國へ輸出するやうになつたし、紡績業者又輸入統制の影響による國內需要の膨脹に息づき、中亞及エジプト戰線の活況による前記五千萬ルビーの大量注文が更にそれを活氣づけた。かくて第一次大戰以來の宿命的であつた英國資本主義との相剋も一應終結し、英國の戦争目的に奉仕する事が取りも直さず彼等の利益である事を知つた時、どうして彼等が反動化せないうで居れやうか。そしてそれが彼等と緊密な關係にある國民會議派右翼の行動にどうしてひびかない事があらうか。事實、彼等はワルダ聲明以後の會議派の行過ぎに對して極力警戒し、或る者は既に反動的な市民義勇團に参加しその財的支援を開始してゐたのであつた。

又ネールは大衆行動の時期を九月と定めることによつて、これ等の階級的背景の混亂に氣附かなかつた策戦上の誤謬を犯したとも言ひ得るであらう。然し又大戦以來ネールの左翼が一時覇權を握つたかに見えたその現象も、今にして想へば一種の幻覺であつたかも知れなかつた。何となれば同派の實權は一九三七年の第一回總選舉以來右翼の手にあつて微動だもしないのであり、左翼的なワルダ聲明の承認も、要するに大战以來尖鋭化しつゝあつた大衆の空氣が同派の中樞部へ反映せられ、その大衆的足場を失ふ事が取りも直さず指導權を喪失する情勢にあつたため、殊更左翼の進出に備へて能ふ限りの範圍に於て自らが左翼化し、ガンデイの犠牲に於て迄も自派の代表ラヂャゴジイとバルテルをして動議提出のイニシアテイヴを取らしめたとも見る事が出来るからであつた。従つてその尖鋭化の程度には一定の限度があり、彼等の階級的基礎たる産業資本家の利益を緊密に反映する範圍に於ての事であつた。彼等の企圖する所は、結果に於て政府彈壓の形となつて現はれたが、それは兎も角適當な一定の時期に於て國民會議派の實體を再びガンデイ、ラヂャゴジイ、バルテルの完全な三位一體の下に置かんとする事であつた。そしてその企圖に彼等は成功したのであつた。

然しその間ガンデイは、何をしてゐたか。

ガンデイが會議派と決裂したのは、これが最初ではなかつた。一九二二年のスワラジスト黨問題、一九三四年の會議派解消問題に次いで實に三回目の決裂である。そしてマウラム・アザット（現議長）が七月のプーナー全印大會會議で明かにした所によると、ガンデイが非暴力運動を自己一個の責任に於て發展せしむるため同派との別離を屢々要求したとの事であつたから、その意味では實に十數回目の決裂であつた。

然し彼も今度は、紡績車を廻はしたり不可觸階級の解放運動を始めたりはしなかつた。決裂の原因が獨立運動の法論の問題に就てであり、情勢の逼迫とこれに對する會議派の主體的條件の成熟を理由に非暴力運動を大衆化せんとするネール以下の要求に對し、ガンデイはこれを全面的に拒否して未だ時間的にも非暴力の理想を世界に訴へて局面を轉換する餘裕があるし、現在の主體的條件の下に於ては未だ非暴力運動の遂行を彼一人に限定すべしと主張したからである。従つて彼が彼の政治的生命を完全に拋棄しない限りには、彼にその政治的信念を遂行する義務があつたからで、彼は彼の指導を拒絶する七月二十一日のワルダ聲明に接するや、直ちに機關紙「ハリジヤン」に「私は決裂に耐へ得るが故に幸福であり、その義務を遂行する力を失つた故に不幸である」（七月二十九日附）と發表して次の行動に移つたのであつた。

その次の行動は彼の信念に於て會議派を分裂せしめる積極的な意圖となつて現はれ、八月四日附の「ハリジヤン」は會議派内のガンデイ・プロックに次の如く呼びかけたのであつた。

「サルデー一派は到底彼等の能力の及ばざる道を進んでゐる……自らの道を疑はぬ人々、アヒムサと一身同體の人々、アヒムサのみが凡ゆる困難から逃れる唯一の途である所の人々は、靜かに會議派を去るべきである。そして彼等は數多き非暴力運動の活動に専心すべきである」

彼の希望を體して運用委員會を去つたのは、一九三〇年當時英國々境軍の心膽を寒からしめたクダイ・キトマガルなる赤シャツ隊の指導者「國境ガンデイ」のアブドル・ガファル・ガーンであつた。會議派内のガンデイ・プロックを代表するブラサド（前年度議長）、ゴツシユ、アチャルヤ・クリバリニイ等も、局面の轉換に必死の努力を拂つた。

その效あつてか、會議派は分裂の直前に於て、局面を轉換した。政府の彈壓を左翼の指導者を一掃し、最早左翼化を必要としない右翼と、自己の信念に忠實な限りに於て力を欲するガンデイが、彈壓に戦く大衆の前で再び結合した。然し再び彼に會議派の指揮權を委ねられた時、彼は叫んだ、「今後何を爲すべきであるかは、私も知らない、然し諸君の爲すべからざる事のみは明かである。即ち諸君は非暴力運動を私人に限定して、諸君が行つてはならないのである」と。

即ち、彼は一步前進した國民會議派を、再び三月のラムガル決議に迄引戻してしまつたのである。彼とラジャゴジイとバテルの三位一體の下に於て、會議派には政黨化する危険が残されたのである。

(註一)一九三八年度の議長選舉問題をめぐつて反ガンデイ的態度を明かにしたボースは同七月フォワード・ブロックを結成したが、一昨年初始めて回教聯盟と提携の上カルカッタ市參事會選舉に英國側を破つて輝かしい勝利を納め、更に今次大戦獨り暴力革命を主張した事が忌諱にふれて逮捕された。

(註二)この時婦人子供數千を含む十二萬人が檢擧された。

五

然しそれにも増して哀れな姿は回教聯盟であつた。

全印度回教聯盟の悲劇は、その親英的態度にも拘らず、或は聯邦制度問題に於て或は大戦參加問題に於て常に月に吠える犬の如く、少數黨の政治的保障のみを求めて喧ぐ彼等の指導者、M・A・ジンナーその人に出發してゐる。彼は大戦勃發以來、二つの誤謬を犯した。その一は一昨年十二月の回教徒大會決議で、今一つはバキスタン・スキーム

問題であつた。回教徒大會決議とは、一昨年十二月國民會議派と回教聯盟の間に共同戦線提携の話が進行中會議派内閣の總辭職問題が起るや、ジンナーはその十二月二十二日こそ印度が會議派の支配より解放される記念日であると同日の大會に於てこれを決議文に成文化した上、會議派と聯盟間の意見の不一致はこれを英本國の王室委員會に公訴してその裁判の結果に待たんと主張し、會議派側の代表ネールにその愚劣さを嘲笑された事件である。又バキスタン・スキームとは少數黨問題にからんでジンナーが、印度を印度教徒の國と回教徒の國に分割し、獨立運動自體迄も地域的に二分しようと言ふ主張で、その主張が昨年三月のラホール大會決議となつて現れるや猛然反對が起り、その分裂主義的主張の底にひそむ英國主義が現在に續く解體の危機とさへなつてゐるのである。

事實、回教聯盟は最早或る意味での解體過程に入つてゐると言つても好いであらう。何故なら聯盟の指導者がジンナーである限りに於てその階級的背景をなす回教徒商業資本家の利益を反映する事によつて英國的たらざるを得ないし、回教徒七千七百萬の九〇%を占める西北印度の農民及労働者の支持を絶対に期待出来ないからである。既にその一派たるジャミヤット・ウレマや農民層の代表アフルルや勤勞回教徒四千五百萬を代表するモミノフ回教徒會議は、聯盟の大戦下に於ける反動性を指摘して國民會議派の支持を表明してゐる。そして彼等は高らかにコーランを唱しつゝ國民會議派の一翼に立つて現議長アザッドに率ゐられるアザッド・コンファレンスへどしどし吸収されてゐるのである。更に又六月十一日のカクザール黨檢擧を繞つて表面化した聯盟指導者層の内部抗争も、或は聯盟解體の重要な素をなすものであつたかも知れなかつた。その抗争はジンナーの代表する商業資本家とシカンダラ・カーン(現バンチャップ首相)とフアズルル・ヒユック(現ベンガル首相)の代表する地主階級の階級的抗争でもあつた。

そして印度大衆の苦悶が或はナグプールの麵麩騒動となり、或はボンベイ七十の織維工場の總罷業となるのを見る時、そして又一方に瘦細る回教聯盟、反動的な自由聯盟、いち早く親英態度を明かにしたヒンズー・マハサバの哀れな姿を見る時、印度民族運動の希望は依然として國民會議派であつた。然し國民會議派に明日への出發は果して可能であらうか。現在の姿は、正に政府の思ふ壺である。そして不服従の鬭争形式は現在の力の弱まつた瞬間に於て最も會議派に妥當するものであつたかも知れないが、既に老齡に達したガンディーがそれを大衆運動に點火する事は肉體的に不可能であるかも知れない。不可能は、會議派が政黨化する危険と共に、やがては立直るであらう大衆の解決すべき問題であつた。若し印度政府が現在の會議派の姿を指差して「六週間にして粉碎せん」と一九三七年の第一回選舉時に於て豪語するならば「劍を以てヒットラーの成就せる所を、我は魂もて遂げん」と一九三七年の第一回選舉時に於けるガンディーの言葉を以て答へ得るであらう。然しその政府も、今苦悶してゐるのである。英國と云ふ重荷を乗せて四百年の長い歴史の道程を歩いて來た印度は、今長々と寝そべつてしまつたのである。そして印度と言ふ牝牛を鞭打つ英國と鞭打れながら微かに角をふる姿に、我々は現實の印度の姿を見るのである。

補遺

以上は一九四〇年九月末迄の經過で、それ以後の情勢に就ては別稿「地中海に於ける樞軸の勝利と印度」の後半を参照されたい。それ以後を簡単に述べると、ガンディーはこの會議派の合法性復歸によつて、昨年十月第七回目に當る印度總督との會見を行つて最後の妥協工作を試みた。この時兩者の中心話題となつたのが、印度の參戰反對に對する言論抑壓問題であつたが、これも遂に拒絶せられるやガンディーは直ちにこれを口實として同十月十六日から第一回の

個人的不服従運動に入つた。個人的不服従とはガンディーの信條たる非暴力主義を嚴重に保持し得る特定の個人のみを選んで行はせる運動で、彼はその出發に當り次の如き悲壯な聲明を發してゐる。

「余は印度獨立のため英國の統治に反對すると共に、全國的不服従運動の開始を宣言す。今回の不服従運動こそは、印度獨立運動に一生を捧げて來た余の最後の鬭争とならう。然し余は未だ平和解決の希望を全く拋棄するものではない。何等かの可能な方法さへあれば、本國と印度國民間の有効適切な調停に立つ努力を惜しまぬのみならず、更に進んで交戦中の諸國に對しても、戰爭の中止と平和招來のために寄與する事を惜しまぬものである」

かくて言論自由の獲得を目指す第一回不服従は十月から十二月迄、更に一月から三月へかけて第二回運動、四月以降第三回運動を續けて今日に至つてゐるのである。この第一回から第三回迄政府彈壓の矢面てに立つ人數は増へてゐる。然し又同時に一回は二回と著名な指導者を失ひ、本年一月には議長アザド迄を失ふに至つた。又ガンディー自身も昨年十一月言論の壓迫を理由に機關紙「ハリジヤン」を廢刊し、更に十二月には不當な同志檢舉に抗議し「死を覺悟しての斷食」を行ふ決意を固めた程であつた。

この過程は見やうによつて、ガンディーの企圖する會議派内の清黨工作と言へない事もない。即ちガンディーは自己の指導に服さぬ多くの急進派やその他の異分子をこの際一掃し、その搖ぎなき基礎の上に立つ自己の指導權を確立せんとしてゐるとも言へるのである。従つて彼がこの指導權を確立した時にこそ、印度の利益と言ふ公平な立場に立つて英國側との眞の妥協工作を開始するか、それ共一九三〇年當時に見る如き一糸亂れぬ猛烈な大衆抗爭の火蓋を切るかその何れかであると見られるのである。事實一九三七年以降はガンディーの指導權も多少名目だけとなつた形であつ

て、會議派内には彼の指導に服さぬ異分子が次第に勢力を獲てゐたので、この清黨説は一應考慮せられなければならないと思ふ。又これに關連しては、事態を憂慮する政府の命を受けて元教育部長ジャグデイシユ・プラサドが第三者として調停に乗出し、會議派と回教聯盟を除く第三黨全部を糾合して協議したが、その結果その妥協案を受入れる所とならなかつた事、樞軸側の優勢に基く回教聯盟やヒンズー・マハサバの態度強化等も一應注意せられる。然し要するに英國の支配力は未だ強く、それ自體の劃期的な主體條件の發展も見られない今日、彼等の恃むのは偏へに印度を取巻く客觀條件の變化のみである。従つて獨ソ戰の開始せられた今日、それは彼等に對する英國の支配力を一段と強化して、民族陣營には極めて不利である事を一言する。又最近の報道によると、印度政府は極東情勢の急變に逼られ、ガンデイ等との妥協を待切れず、前記アネー以下を動員して行政會議の擴張、國防顧問會議の新設を斷行したと言はれる。従つて民族運動との關係も最後の竿頭に立つた感が深い。

地中海に於ける樞軸國の優勢と印度

一

地中海に於ける樞軸側の輝かしい勝利は、更に近東と言ふ大きな防火壁の一隅を破壊する事によつて、これ迄その蔭にひそむ印度以下の東洋英國勢力の姿を、大きく世界の舞臺へ浮上らせて來た。

勿論これ等諸國の中では、距離の點から言つても、これ迄「英國の寶庫」なる言葉で表現せられた英國勢力の牙城——印度が問題となつて來る。事實、印度はその人口三億八千萬、面積又ソ聯を除く全歐洲に等しい四百七萬平方キロを有して、宛然獨立した一大陸を形成し、その中に持つ無限の軍需・食糧資源、更に若し國內の政治條件さへ考慮せねば、今次大戰下に最少限三百五十萬人の兵力動員は可能であると言はれて、英國支配の集中的に表現せられてゐる國である。

従つて此處を衝かれる事は、取りも直さず東洋に於ける英國支配の崩壊を意味するのである。然し少くとも大戰の現段階に於ては、特に次の諸點が注目せられると言ひ得よう。

その一は、印度が複雑な社會機構を有するため、概念としての印度は存在しても、國家としての印度は現實に存在しないと云ふ事である。この事は、印度なる概念が英國の支配と言ふ客觀的紐帶を待つて、始めて統一體として表現

せられる事を意味してゐる。従つてこの紐帯に一定限定の弱体化が起れば、それを統一する複雑な國內要素の壓力によつて、急速に自壊作用を起し得る可能性を持つ事である。

その二は、その有力な國內要素としての反英獨立運動が相當熾烈であり、その國內に有する回教徒數はイラン以西の全回教國を合したよりも多い七千七百萬人に上り、血よりも強い宗教的紐帯によつて、遠く近東に起き始めたアラブ民族運動に、何時でも呼應して立つ可能性を持つ事である。

二

印度はかくの如く、現實の問題に於て、到底統一ある動きを期待出来ない國である。従つて此處を支配する英國勢力が、今次大戰の勃發以來、自己の支配を弱める方向に對して極めて神經過敏であつた事は、容易に領けるであらう。

事實、印度部隊の一部は一九三九年十二月には、早くも歐洲戦線に到着して、その後ダンケルクの悲劇に遭遇してゐるのも、その一表現である。又「民族自治」の保障なき今回は、第一次大戰當時百七萬（内戦闘員七十萬）の大軍と三億磅の戦費を本國へ送つた程の熱意は示し得ない迄も、本國の宣戰布告と同時に印度防衛法なる戦時緊急法案を發布して國內の足固めをし、東洋の英國屬領に赴けて軍事公債、戦争基金の募集等を行ひ、ハイデラバッド藩王國の如きはいち早く空軍一ヶ中隊の献納を行つた事などが、それであつた。

然し今歐洲大戰を時間的にノルウェー戰、フランスの敗北、バルカン戰の三段階に區別すれば、印度が直接樞軸側

の優勢に恐怖を感じて、直接自己の國防に着手したのは、その第二段階——即ち、フランスの屈服、伊太利の参戰が行はれた昨年六月以降である。

この時の恐怖は、具體的にはスエズ運河の事實上の閉塞に伴ふ本國からの孤立化として表現せられ、寓意的には「日本を中心とする東亞共榮圈の荒浪が印度の東海岸ベンガル灣に押寄せ、歐洲情勢の急變に伴ふ激浪はアラビヤ海を洗ひ、ソ聯と言ふヒマラヤ風が北方から吹荒ぶ」と述べられた。

然しこれは同時に、印度を先頭とする全英國屬領の問題でもあるので、直ちにその線に添つて、これ等屬領を打つて一丸とする組織的活動の開始せられた事が注目せられる。

昨年十月印度に東方國會議が開かれ、本年二月にこの編成の指導に當る中央軍需局と東方軍需品供給會議の設立せられ、更に印度を指導國家としてその工業化の對象に選ばれた事は先に述べた通りである。

然しこれは更に高度に如何なる言葉を以て表現せらるべき動きであり、その特徴とする所は何んであらうか。

我々はこれを、所謂ブロック經濟から廣域國防經濟、或はこれを内容とする戦時體制の編成過程と見たい。勿論それは、現實に起きた戦争の強制によるものであるから、極めて變則的な廣域經濟への轉換でもあり、その内容も亦植民地國家を獨立した一單位とするものであるから、本質的に變則的なものであるには相違ない。然し一九三二年のオタワ協定によつて成立した英帝國のブロック經濟は、指導的地位にある英本國の危機によつて先づ破綻を生じ、續く戦火の地中海波及によつてブロック間の連繫を絶たれて一先づ崩壊し、東洋英國屬領と英本國の關係は、一應前者を一單位とする廣域經濟圈と、英本國及カナダ、アメリカ、大西洋を打つて一丸とする廣域經濟圈との間の關係に還元

せられ、それを内容とする國防體制の編成過程に移つたと見られるからである。

然し廣域經濟圏の組織的計畫性は指導國家の介入を必要とし、その經濟活動の内容は自給經濟と國防經濟の併存を必要とするが故に、これ等の低調な植民地産業に對しても戦時工業の高度性を要求するのである。従つて先づ印度に必要とする英國勢力——具體的にはチャタールフィールド軍事、ロヂャース軍需兩委員會によつて印度にこの指導權を與へんがための東方國會議が招集せられ、その矛盾を解決せんがための「印度の工業化」が叫ばれたのである。會議劈頭リリスゴウ印度總督が「スエズ以東及以南を打つて一丸とする自給經濟を樹立し、然る後過剩物資の本國供給が可能であるか否かを討議する」と挨拶せる言葉によつても明かな如く、最早やこの段階に入れば、本國への物資供給と言ふ植民地的役割は第二義的となり、廣域經濟固有の特徴を示す點に、その劃期的な動きを見るのである。

然し此處で我々は、近東及北阿戦線が地理的に、歴史的に見て決して歐洲戦線の一部を成すものでなく、それとは獨立した東洋英國プロックの防備線である事を理解しなければならぬ。事實英國の印度保持を目的とする植民、外交政策が、これ迄悉く近東及北阿を舞臺として動いてゐた如く、その英本國に對する政治的意義を除けば、近東及北阿戦線は結局英國の東洋にある屬領群の西端に位置する防備線であり、従つて又新に生れんとする廣域經濟圏の樞軸側に備へる防備第一線とも言へるのである。

従つてバルカンに於ける樞軸の勝利に續くイラク叛亂、シリヤに擴大した兵火、更に北阿戦況の不利——これ等は正にその防備第一線の不安であり、同時に近東と言ふ大きな防火壁に穴の開いた事を意味してゐる。その穴を洩れる戦火の火熱を直接頼に受けては、彼等も泰然として居れないであつて、事實このバルカン戦争以後は印度以下のこれ

等植民地にもはこの種の狼狽と混亂が見受けられるのである。

三

かくてバルカンに於ける樞軸の勝利は、次の諸點に影響を與へてゐると見る事が出来る。

第一に印度の企圖する廣域經濟の問題を取上げて見ると、印度は昨年六月以降この廣域經濟の基礎的條件を充足するために、自國民族産業の擴充に乘出し、昨年度に於て八千二百萬ルピーの生産擴張費と十億ルピーの計畫的軍需注文を民間へ發注したのである。このため印度の生産能力が劃期的な發展を遂げ、本年三月迄の鉄鐵生産高は前年度の百五十五萬トンに對して百八十萬トンを示し、鋼鐵六十一萬トンに對して百七萬トン、石炭又二百二十六萬トンに對して二百六十一萬トンを示し、その輸出貿易額も對英プロック一億九千七百八十萬ルピーで前年度の六倍半、對米輸出又九千四百八十萬ルピーで前年度の二倍に上つた事は事實である。

又モーレスウオース少將の報告によれば、大戦勃發以降昨年迄に千一種の新種工業が勃興し、英本國に對しても小銃一億發、小銃四十萬挺、軍靴百三十三萬足の大量軍需品を送つたと言ふが、その實情は必ずしも報告通りではない。

事實、前記の民間發注額も本年三月のボンベイ州知事の演説によつて、僅か五億六千萬ルピーに過ぎない事が明かにせられ、その誇る兵器工業に於ても砲身、車體の製造は可能であるが、精密部分品は依然不可能である如く、成程政府の國防計畫によつて生産量の著しい増加は見だが、その間の質的な飛躍は依然認められず、低調な植民地産業の

範疇に止つてゐる事が判るのである。

従つて印度は、今指導的産業の確立に當つて、技術者の不足、生産資材の入手難、船舶の飢饉と言ふ問題の解決に逼られてゐるのであるが、この方面に對して樞軸優勢の影響が強く現れてゐると言へるのである。

何故なら印度は、印度人の民族性に基因する技術者の不足を英本國或はアメリカに仰がんとしてゐるのであるが、この事は生産資材の問題とも関連して、戦況の進捗に伴ふこれ等兩國の多忙によつて殆んど不可能に陥つてゐるからである。又印度は前記貿易額の増加によつて、昨年九月にはロンドンに一億四千五百萬磅と言ふ記録破りの在外資金を有してゐるのであるが、これが本年三月末殆んど枯渴状態に陥つたと言ふ興味ある現象が起きてゐるのである。勿論それには、三月末満期となる磅公債の支拂ひに一部を振向けたと言ふ理由もあつた。然しその中九十萬磅は印度が支拂へなくて本國が肩替りした程であるから、その主要要因は地中海に於ける樞軸側の優勢に對して、北阿戦線へ増派した印度兵の裝備及派遣費をこの中から支出しなければならなかつた事や、前記の英國ブロック向け輸出の八五%迄が近東、北阿戦線宛の軍需品で、この代金の回收がつかない中に、その輸出を可能ならしめるための生産資材の購入費として相當多額の現金を英本國へ支拂はなければならなかつた事情によるものである。

この事は、現在印度の生産擴張上に非常な障害となつてゐると言はれ、最近の戦況に基く英國船の大西洋への引上げは、印度をして未曾有の船飢饉に當面せしめたのである。又獨艦の印度洋に於ける活動や紅海及アラビヤ海の交戦區域との指定は、中立國備船の運賃暴騰や隻數の減少を來し、關係國の物資動員能力を著しく低下せしめて來たのである。

これを以て印度の企圖する廣域經濟の編成過程が極めて遅遅たる歩みを續けてゐる事は明かであり、更にこの問題に就ては、印度の民族産業の極端に發展する事が、結局戦後に本國産業と摩擦する一定限度を突破するとして前記ロジャース委員会にも反對が起り、分裂の危機さへ生じた事が附加せられなければならないであらう。

四

又その軍事的影響に就ては、先づ印度が従來より大量の軍事豫備軍を擁するものの、現有兵力としては、英國派遣軍四萬六千、印度軍十八萬、同豫備軍四萬、計二十七萬人程度しか有しない事が指摘せられる。

所が同時に又、印度は大戦直後本國より前記チャッターフィールド軍事委員會を迎へて、その軍備擴張に着手したのであつたが、その際この委員會によつて重大の錯誤の犯された事が注意されなければならないであらう。その錯誤とは、第一次大戦當時の夢を逐ふ餘り、當時の國內情勢を無視して、如何に印度兵を動員して海外へ派遣するも内亂の起る可能性なしと斷定し、大增税を斷行、總額二億九千萬ルピーを投じて現有兵力の四倍擴張に着手した事であつた。

従つて結果は、慘めであつた。兵力擴張の第一期目標は海外派遣部隊を除いて五十萬人で、昨年中に完成する筈であつたが、昨年九月迄には僅か九萬一千人を獲たのみで、止むなく期間を本年六月へ延期せざるを得なくなつた。又國內政情の不安は海外派遣部隊にも影響し、一昨年八月行先きを秘して新嘉坡へ派遣せられた最初の部隊は、英國側の偽備行為に憤慨して叛亂を起し、イラク派遣部隊中の回教兵は同宗の敵に向ける銃なしと、これ又叛亂部隊に轉向

した。

かくて現在印度は、その海外派遣部隊をも制限せざるを得なくなり、大戦一年有半にして未だ十七萬四千人の兵力しか送つてゐないのである。これ等の部隊は、現在英本國、北阿、東阿、アデン、ビルマ、新嘉坡に分散してゐるのであるが、第一次大戦當時僅か三年にして百七萬の大軍を送つたことから考へると、何んと言ふ甚しい差異であらうか。

又これ等の海外派遣部隊と交代に、現在精悍を以て聞へるネパールの狙撃兵師團五萬が國境線に配置せられてソ聯及び獨伊の侵入に備へ、その背後のインザール・ナライ峠以下の道路網整備を急いでゐると言はれるのであるが、例へば空軍の擴張も新鋭機の購入難で意に委せず、近代兵器の發展に伴ふ兵力の相對的低下は蔽ふべくもない。

かくて近東に燃え上るアラブ民族運動の火の手は、何よりも先づ印度兵がこれと同一系統に屬するスニー派モミンの回教徒を主力としてゐる事情により、益々海外派遣を制限せられ、第一次大戦當時は印度の擔當した屬領防衛を濠洲兵に委ねる現状である。かくて印度の軍事力は、その懸命の努力に拘らず相對的には低下してゐるとも言へう。

五

然し印度の政治は、通常英國勢力を代表する印度政府と反英獨立陣營との接觸面に於て、理解せられるのであつて、印度の民族運動はこの客觀情勢の上に展開を豫想せられ、「印度の參戰問題」を繞つて大きく動かうとしてゐる。

のである。

この參戰問題とは、一昨年九月三日の英本國の宣戰布告に呼應する翌四日の印度總督による參戰宣言に基き、印度政府は國民に參戰を求める基礎的條件として、一昨年十月十七日と昨年八月八日の兩回英國白書を發表し、戦後に於ける自治の考慮と我が國の内閣に當る行政會議への参加を求めたのであるが、ガンディーの率ゐる國民會議派等の反英陣營は、第一次大戦當時の政府の違約を攻め、即時自治の承認と國民議會の招集を要求して衝突し、未だ解決に至らずして今日に至つてゐる問題である。然しこれは、誠に英國側にとり由々しき問題である。従つて大戦勃發以來の印度政府の努力は、この民衆から何んとかして參戰の承諾を得んとするその一點に注がれ、或は脅喝、或は慰撫、或は妥協の術策が弄せられて來たのである。

今それを時間的に辿ると、國民會議派ではこの要求の容れらざるを見るや、昨年十月二十二日から十一月十日にかけ自治七州（アッサム州の聯合内閣からの退陣を合すれば八州）に組織する同派内閣の一齊辭職と立法議會のボイコットを行つてこれに抗議、英國政治への参加と協力を拒絶したのであるが、これに對する政府の態度は、一昨年九月から二月迄飽く迄も妥協を目的として、總督は前後百六十五名の國內政治團體代表と會見し、特にガンディーに對しては前後五回も會見を求めて局面の打開に腐心したのである。然し昨年二月斷然妥協の餘地なきを知るや一應正式に決裂し、五月中旬迄は一靜觀的態度を持して上、六月以降は歐洲情勢の急變に對應して果然攻勢に轉じ、昨年九月迄に總數十萬近い反英分子の大檢舉を行つたのである。

この方針はその後本年の三月迄堅持され、特に會議派が昨年十月以來展開した個人的不服從運動に對して嚴然たる

態度を以て臨み、第一次不服従運動の宣言者千五百名の殆んど全部を檢舉、昨年十月五日より十二月二十日に至るその期間中に逮捕せられた指導者層最高指導者十一名は前州大臣三十一名、中央立法議會議員二十二名、州立法議會議員三百九十八名、全印委員會委員百七十四名、を算へ、課せられた罰金だけでも實に四萬二千六百四十五ルピーに上つたのである。又三月十四日ラホールに開かれた會議派左翼系の秘密集會に際しては五千四百九十九人が檢舉せられ、保釋保證金だけでも二十三萬七千ルピーを請求せられたのである。

この政策は一應成功したかに見えた。國內の政治勢力は、藩王諸國以下各團體とも妥協條件に對する考慮の餘地を残して參戰を表明し、國民會議派は表面上一應は孤立の形に陥つたからである。かくて事態を憂へた前行政會議教育部長チャングデイッシュ・ブラサド一派が第三者として試みた最後の調停に對しても、アメリカ印度ビルマ相は本年四月「英國は昨年八月八日の白書(後述)より一步も引くものに非ず」と拒絶してゐるのである。

然しそれにも拘らず印度政府の態度は明かに本年二月以降、バルカン情勢の險惡化と併行して、再び妥協方針に轉じてゐるやうである。何故なら本年一月以降展開された第二次不服従運動に對する政府の取締方針も極めて緩和され一月以降三月末迄に檢舉せられて有罪の判決を受けた者は、僅か七百六十四名に過ぎぬ事が當局から發表せられ、更に本年三月には前教育部長のジャグデイッシュ・ブラサドをして現實に妥協工作を行はしめた上、政府としては最早や八月八日の白書以上の妥協條件を考へられぬとして、會議派自身に可能な條件の提出を求めると至つたからである。かくて歐洲情勢の展開即ち樞軸側の絶對優勢と戦火の近東波及は、同じ民主主義を口にする兩者の妥協を噂させしめるに至つたのである。然し果して印度の獨立運動の現段階に、例へば一九二三年度に於ける、或は又一九三三年度

に於けるが如き妥協が可能であらうか。

六

事實現在國民會議派が展開してゐる運動は、反戰懲慚の合法性を獲得せんとする個人的不服従運動で、この世界情勢の逼迫する折、言論の自由のみを獲んとする運動は、一見消極的な感じを與へる。又今次大戰下に會議派の要求する所は、所謂自治と完全自治の間の差はあつても、結局年來の主張たる獨立とは異なる自治である點に妥協の餘地がない譯ではない。事實、印度政府もこれに對して英國側の大義名分さへ立つ範圍なら如何なる妥協にも應ずる媚態を示してゐる。従つて兩者の紛争は、參政のための相對的條件として印度の自治問題が採上げられてゐるかの印象を與へ、ガンデイも又大衆鬭争を拒絶する口實として第三國勢力の印度侵入を論じ、殊更英國を苦境に追込む行爲、又はそれにつけ込んでの騒亂を嚴重に禁止してゐるのである。左に掲げるのは、昨年十月三十日の會議派巨頭ネールの逮捕事件に就て發せられた會議派本部の指令で、これを見ても同派運動が如何に消極的であるかを充分覗へる。

「マハトマ・ガンデイは、ネール逮捕事件に處すべき態度に就て、十月三十一日指令を發した。マハトマ・ガンデイの指令は、十一月三日の夕刻に至り、漸く全印委員會事務局へ到着した。これ等の指令は、商人に強制して店舖を閉ざしめるが如き如何なる企圖も行はるべきでなく、騒々しき示威運動を阻止すべき特別の處置を採るやう告げてゐる。更に我々は、ネールが逮捕されたとして、如何なる性質のものにせよ不服従開始の口火となると考へては不可なる事を告げなければならない。ガンデイの見解を尊重して我々の與へ得る最良の解答は、これ迄より熱意を示して、建設

活動に没頭せよと言ふ事である。我々は、例へば民衆に國産布以外を使用せぬ事を依頼する事によつて組合組織による紡績や、不可觸階級を消滅せしめるための農村工業の如き建設的示威運動の激化、或は回印提携の促進、その他建設綱領の實行等に全力を擧げなければならない。

これ等の指令は、現在遲過ぎたかも知れない。然しそれ等は將來もなほ重要なる會議派指導者の逮捕せられた場合の指針とならなければならない。

本部書記長 アチャルヤ・J・B・クリバラニール

又以上の妥協を可能ならしめる條件として、國內の客觀的情勢も、一應考慮せられる。事實、最も有力な會議派の反對勢力たる回教聯盟も依然會議派との提携を拒絶し、蔣介石の第一次北伐當時ボローヂンと共に武漢政府で活躍したM・N・ロイの新に結成した急進人民民主黨やヒンズー・マハサバも單なるフアシズム打倒を理由に參戰を表明してゐる。又最も反動的な藩王諸國など五百八十餘國の中既に一流の三百六十餘國が英國への忠誠と獻身を誓ひ、英國の傀儡たるアガ・カーンの如きは、回教徒に對する宗教的勢力を利用して大戦勃發當日から極めて効果的な活動を續けてゐる。

然しそれにも拘らず、この妥協説は次の諸點に於て否定せられなければならないであらう。

第一に會議派は、現在印度に於て決して孤立無援でないと言ふ事である。勿論この場合印度の反動勢力を代表する藩王諸國は問題とならない。然し昨年三月印度の獨立運動すらも回印兩教勢力に分裂せしめんとするバキスタン計畫を提出して、反動的或は親英的と非難せられる回教聯盟も、決して腹からの親英ではなく、従つて參戰を無條件に承

諾するものではないのである。事實その誤解は、聯盟が會議派との接觸面に於てのみ條件の好轉を目的とする英國勢力の利用が行れるからで、眞からの親英でない事は昨年十一月以降行政會議への參加を拒絶して今日に至り、今回のイラク問題に對しても同宗教の關係で遺憾の意を表してゐることによつても明かである。

又急進民主黨やヒンズー・マハサバの參戰も、戦後に於て自治を印度に許容する期間の明示と言ふ事實上英國側に不可能である條件を附してゐるので、この態度は本年三月行れた前記ジャグデイシュ・プラサドの妥協工作に最も好く現れてゐた。この折ブラサドがガンデイの意向を打診した上でボンベイに開いた會合は、宛然會議派と回教聯盟を除く全印度の政治團體代表を網羅し、例へばヒンズー・マハサバを代表する總裁サバルカル博士以下ムンディ博士、S・P・ムカージー、不可觸階級解放運動のアムベトカー博士、民族聯盟のV・N・チャンドガアルカー、更には會議派ナシヨナリスト黨のM・S・アネイ迄出席して、現在の印度に最も妥當な參戰の條件として、この戦後に於ける自治附與の時日明示と行政會議の印度人への明け渡しと言ふ、内容的に全く印度の自治を意味する要求を提出してゐるからである。

第二は會議派運動の本質に對するこれ迄の誤解である。何故ならこれ迄第三者の會議派運動に對する見解は、これを極めて通俗的な獨立運動と同一視する誤謬に出發してゐるからである。事實これをマレイその他の獨立運動と同一視すれば、必ずや印度の獨立を實現せしめない所の客觀的條件を忘却して、この苛酷な條件の下に一應主體的條件の成熟を待つて躊躇するガンデイの態度を、徒に消極的、退嬰的と結論するのである。然し會議派の現在の態度は、印度の完全な獨立に必須な民族精神の作興を待つて、始めて積極的な一大理想に向つて進まんとする一種の理想主義運

動でさへあるのである。即ちそれは獨立を最終の目的として進む運動ではなくて、ガンデイが彼の理想を目指して推進する民族運動の展開過程に於て、一定限度の主體的條件が充足すれば必然獨立がその過程に實現する事を知つての運動なのである。従つてガンデイは、その主體條件の充足しない中は、例へそれが英國側であらうとその理想へ推進する方向である限り、妥協を意としないであらう。事實過去の會議派の歴史はそれを裏書してゐるし、その意味での妥協は今後も幾度も繰返されるであらう。然しそれは飽く迄も、今述べた條件の上に嚴重に制限されての事である。

然しそれにも拘らず、運動の現段階に於てはガンデイ自身妥協の基礎を破壊してゐると言ふのが、第三の理由である。事實、現在の不服従運動が、言論自由の獲得のための闘争である事は、先にも述べた。これは一見誠に消極的な闘争題目である。然しこの目標は、單に民衆へ參戰拒絶を説くための自由を意味するものではなくて、實は大戦勃發以來幾度か會議派が極めて果敢に、極めて戰闘的に大英帝國に喰つてかかり、その實體を暴露せしめんとして拒絶された戦争目的の明示——それを要求する自由である。従つてそれは極めて積極的な内容を持つものであるが、英國側にとつてこの目的の明示は、會議派の企圖する大衆闘争に最終の口實と大義名分を與へる事に外ならない。従つて英國側もその後は會議派に口實を與へないやう極めて慎重な態度を持し、事この問題に就いては二度と口を開かないのである。

然しこれに對してガンデイは、既に昨年三月のラムガル大會の決議文に於て「印度、アジア、アフリカ諸民族の犠牲に於て、帝國主義的目的のためにのみ遂行する戦争である」と明かに規定する事により、英國側に如何なる理由の説明をも拒絶してゐるので、結局この闘争に關する限り爆發以外の道はないからである。勿論英國側も、それを自由

のための戦ひであると主張した。然しこれは「若し大英帝國がデモクラシーの支持と強化のために戦ふなら、必然その屬領に於ける帝國主義に終りを告げしめ、先づ我々に自由を與へなければならぬ。然る後我々は問題を討議する準備を有するものである」(昨年九月十四日のワルダ聲明)と物の見事に叩きつけられて、沈黙せざるを得なかつたのである。

理由の第四は、會議派大衆の問題である。戦前會議派の正式會員は百萬人内外と算へられ、その同情者、準會員と目される者を合して會議派書記局からは四百四十七萬餘と言ふ數字が發表せられてゐた。この四百四十七萬餘の大衆は、會議派指導者層の全滅に等しい現在の壊滅状態にも拘らず、依然健在である。而も物資の缺乏と物價の騰貴、更に情勢の急迫に併行して加はる勞働條件の悪化によつて、次第に尖鋭化する方向に健在である事は、會議派運動の今後を決定する有力な要素と言はざるを得ないであらう。

従つて現在の會議派運動は、妥協よりも寧ろ英國支配の崩壊に向つて、孤立無援の中に客觀狀勢の變化を持つてゐると言ふのが妥當な解釋であり、従つて又無氣味な動きを見せてゐるとも言へるのである。かくて手緩しと見える現在の不服従運動も、ガンデイをして言はしむれば「現在の英國に對しては、これで充分」なのであり、前記議長マウラム・アザットをして言はしむれば「明日にでも印度へ第三國が侵入すれば、我々は即時武器を採る」のであり、その武器を採つて倒す當の相手こそ英國である事を理解してゐる。事實、彼等は今日烽起を必要とするなら、僅か三日で一齊に立上り得る準備を有すると豪語してゐる。

七

今回のイラク烽起に對しては、印度も動かなくつた。印度に對しては當時イラクの法典學者團から再三援助の懇請が行はれ、印度には又これ等のアラビヤ諸國を合したよりも多い七千七百萬人の回教徒を有してゐるので、一見奇異の感にも打たれた。然しこれは印度回教徒の歴史と特殊性を見れば容易に領ける事で、今回の烽起したイラクシニア派の回教徒は印度に於て却て親英的な上層階級であり、その他の絶體多數も又今回の事件に親英的なトルコ及トランスジョルダンに多いスンニー派に屬する事が先づ擧られなければならない。又第二には彼等の數もアラビヤ諸國の回教徒に比すれば歴史的に多數であつても、結局印度に於ては少數派であると言ふ事である。彼等はこのため文化的にも、經濟的にも遅れ、結局「神の世界にはアラアを信じて、地上では印度人である」(ムハマッド・アリー)と言ふ觀念に支配される印度的回教徒の特殊性を持つ事を考へれば又止むを得ない話である。

然しとも角我々は、結論として次の如く言へるであらう。即ち現在の印度は、以上によつて、それと一聯の運命を托する英米等の民主主義國家と同様、この樞軸側の優勢を前にその政治的性格故の無準備と非計畫に災ひせられ、經濟、軍事、政治の各方面に破綻を生じ、言ふ程の抗戰體制の編成が不可能である事を物語つてゐると。

それは植民地國家としての悲哀であるかも知れない。然し第一次大戰當時、印度はその隣國イランを獨逸の軍事使節ワツスマツスに掌握せられ、アガニスタンの首都カブールにも獨土使節が滞在して一日として安らかな日を送つた事がなかつたのに對し、今次は兩國共英雄的支配者の下に民族意識も強く、樞軸側の攻勢に對する有力な防塞と安堵

する矢先き、突然近東の防火壁に穴が開いたのであるから、その混亂の一潮である事にも、無理がない。

然し我々の注意を惹くのは、この印度にもアメリカが援英の一翼を伸し始めてゐる事と、印度が抗日支那と結び付く事によつて當面する負擔の軽減を圖らんとしてゐる事である。前者に於ける飛行機及自動車會社の進出、對印借款の成立後者に於ける重慶カルカッタ間の定期航空路の開設、ビルマ路に代る援將ルート計畫、ビルマへの技術者及トラック運轉手の大量派遣等がそれである。

然しこれ等も、要するに植民地印度の焦躁と狼狽の表現であるかも知れない。事實印度の現状を極言すれば、痛烈な一撃がこれを朽木の如く倒す事が出来るのである。然し印度がその國內問題を解決した時には、又變貌するのである。従つて事印度に關しては、一切が時間の問題であるとも言へる。

ソ聯は印度へ南下するか

タチ・マハール・ホテルの蝦の коктейルと下^{アンダーレック}肢のビーフ・ステーキは、東洋一の美味しい料理だと言はれてゐる。然しその日は丁度歐洲戦線の負傷兵を満載した病院船が、このボンベイ港へ着いたせるか、甘い音楽の流れる食堂は水兵や看護婦や傷病兵で一杯である。

その中を知つた顔が幾つか泳いで、國民會議派の女指導者サロジニ・ナイズ女史も白いサリを緩かにまとつた姿を現はして、一つ向ふの食卓に就いた。彼女はこの豪華なホテルの×階に三部屋ぶつづけの應接兼事務室を持ち、この應接室には東洋の獨立運動者、共産黨員、労働者が出入するかと思へば、又英國人官吏、富豪の娘、一億の富に喰る藩王國のプリンス迄——ありとあらゆる社會層を網羅して、印度で最も賑かな社交俱樂部と言はれてゐる。今年六十一歳の社交界の女王で、詩人で印度獨立運動の巨頭である彼女！ その彼女も數ヶ月後にはネールの檢擧に憤慨してガンデイの首唱する個人的不服從運動を宣言し、眞先きに逮捕せられてその應接室から姿を消してしまつた。

然しその時、私とビーフ・ステーキをつついてゐる相手は、頭を丸く剃つた黒い大入道——最近印度で賣出した新

進經濟學者と同じ名前のベナルジイ夫妻だ。ベナルジイは今でこそ×××など言ふ妙な國の宣傳雜誌の編輯者をしてゐるがその實元を洗へばソルボンヌ大學の歴史科を経てモスクワの極東大學を卒業した印度共産黨のれつきとした一人で、そのモスクワ在學中現在のベナルジイ夫人を獲たのである。然しこのベナルジイ夫人は印度人の妻には珍しい希臘人でヒンドスタン、フランス、ロシア、英、ラテンの五ヶ國語に通じながら、希臘語が一番下手と言ふ變り種でこの黒と白の國際的な奇妙な組合せは、今に残る印度知識階級の一典型でもあつた。

彼等と私の間には、ソ聯の中亞工作の進行狀態を紹介した「挿^{イラストレイテッド}繪週刊」と中亞治安の混亂を報じたソロニイヴィッチの著書「バミール」が置いてあつた。印度の隣國中亞の治安狀態は、確かに印度人にとつて重大關心事であつたには相違ないのであるが、この二つの全く相反した報道——事實「挿繪週刊」にはキルギーズ、トルクメン、タヂク、ウズベツク各共和國の工業化が進歩し、専門學校以上四十九、六十九ヶ國語に分れ千四十五萬五千人の讀者層を持つ新聞二千九百六十五種と報じてゐるのに對し、ソ聯脱走者を著者とする後者は、中亞の治安狀態が全く悪化し地方巡察官吏も都市より五キロ以上離れる事が出来ないと報じてゐる——にはベナルジイ夫妻も再三嘆息をついて言つた。

「何時も異なる二つの報道が集る——これが印度ですよ」

然しこの場合夫妻が、事を特に「印度」に限定した事は、誤りであつた。何故ならこれは獨り印度のみでなく、陰に陽にソ聯の壓力下にある西南アジアの土耳其、イラン、イラク、アフガン等の弱小國が、弱小國なるが故に感じなければならぬ、彼等に共通した悲哀であつたからである。事實、これ等の諸國は、今次大戰下に於ても最初は全く

相反する政治的意圖に基いて、ソ聯のダーネル海峡に有する深い關心を自己に有利せんとする英・米及獨・伊の宣傳によるソ聯のバルカン南下説に踊らされ、獨軍のルーマニア進駐後は、再び石油資源の獲得を目指すソ聯のイラン、イラク進出説が盛んに放送せられて、去就に迷ふ混亂の一時を齎したのであつた。

現在、ソ聯がこの南下に備へてこれ等西南諸國の國境に配置してゐる赤軍は、イラン國境のアシハバード、テルメス、フェルガイの三ヶ所に置くロシア人の山岳歩兵三ヶ師團、ウズベック共和國の首都サマルカンドに置く土人山岳歩兵一ヶ師團で、山岳騎兵師團はトルクメス共和國のメルフにロシア人一ヶ師、アシハバード(トルクメン共和國)、タシケント、スタリナバードの三ヶ所に土人三ヶ師であり、その他には空軍二ヶ師、タシケントに獨立機械部隊が一ヶがゐるだけで大戦以後も別段兵力を集中した形勢もないため、若しソ聯が一齊に行動を起すとすれば些か手薄と言はざるを得ないだらう。

「然しソ聯と言ふ赤い鷲の狙つてゐるのは、何と言つても、最後には最も肥えた印度といふ獲物ですよ。それだけにソ聯に關するニュースは、一番印度に錯綜して集積するんですよ」
夫妻は、食事の終る最後迄、印度説を固執してゐた。

二

然しソ聯は、果して今次大戦を利用して南下政策を採るであらうか——その南下政策は外洋への出口を求める、石油資源の確保を目指すビョートル大帝以來ソ聯の瞬時も忘れぬ傳統的政策であると言はれてゐるにも拘らず、これを否

定する側からは、常に歴史的回顧の必要が強調せられてゐる。

例へばソ聯と直接境を接するイランの人口は千五百萬、アフガンは千二百萬で何れも近代的裝備を持つ軍隊こそ持たないが、今日では一應獨立して強い民族意識に燃え、而もその全土は海拔二萬呎の山岳或は沙漠である。その道路は草鞋を履いて慄悍な體軀と身軽な獵銃を持った土民兵にして初めて迅速な機動が可能であり、糧道を絶たれた近代軍隊のこの地に機動する事は、恐らくトルコ軍を撃破してダーネル海峡へ出る事よりも難事であらう。

それ故に帝政ロシア時代はいざ知らず、ソヴェート政權の樹立以後のソ聯が、殊更帝政時代の特權を拋棄して、イラン、土耳其、アフガンの獨立援助と言ふこれ迄とは全く逆の方向に出たのにも勿論幾つかの理由があつたが、その一は全く國力の疲弊せる革命直後、これ等の地理的惡條件を征服して迄、國外に兵を進める餘裕がなかつたため、一應民族自由の旗幟の下にかくれたのである。然し我々も、この力の不足がソ聯によつて極めて有效な政治目的の實現に轉化せられた事は、注目しなければならぬであらう。その政治的目的とは、即ち、これ等の弱小國は文化程度も低く、産業力も低いため假令獨立を確保しても結局ソ聯に挑戦する程國力を充實し得ないと言ふ事を楯に、これ等を一つの緩衝地帯としてソ聯を繞る微妙な國際關係に一役買はせようと言ふ意圖がそれであつた。事實第一次大戦直後現在のイランを保護國とした英國が更に兵をカフカズに進め、ソ聯工業の生命線たるバクー油田を占領した如き脅威は、このイランの獨立によつて拂拭されたのである。

然し、これ等を緩衝地帯とするソ聯の政策は、今次大戦にも關聯して一つの危険性を胚胎した事は否定出来なかつた。それは一つの異なる立場からではあるが、兎も角もソ聯が國力を充實した今日、これ等の緩衝地帯は最早必要と

しないと云ふ所の各國の放送がそれで、その異なる立場とは、即ち之等の緩衝國をソ聯攻撃の戰略的基地たらしめんとする諸國の立場と、それとは全く反對にソ聯の好意を求めんとする諸國の立場がそれであつた。何故ソ聯に好意を求めんとする諸國迄がかかる宣傳を必要としたかと言ふと、今次大戦下に於ける獨・伊の放送がその好い例である。彼等は大战前及以後の國際情勢に於て少く共ソ聯の好意を求めたる事は、英國の世界的覇權に挑戦する場合の極めて有利な條件を醸成する事であつたし、事實これ等の緩衝地帯をなすトルコは東地中海の要衝を占めてスエズ運河の死命を制する地位にあつたし、イランとアフガンはインドに隣して直ちに英國の寶庫を襲ひ得る地位にあつたからである。

又この場合には、ソ聯の西アジア諸國に對する經濟的依存性と地理的惡條件を、考慮しなければならないであらう。

ソ聯の一九三七年度の輸入貿易額は十三億四千餘萬留で、この中西亞諸國と關係のあるゴムは七千七百六十萬留、黄麻類は二千五百八十萬留、茶は三千四十萬留、錫は一萬二千五百萬留、鉛は四萬二千四百萬留で、これを前後二回に互る五ヶ年計畫實施以前の一九三一年に比較しても殆んどそれ等の輸入を減する事は出来なかつたのである。殊に貿易順位に於て第三位を占める英國の對ソ輸出は同年度に於て一億九千四百四十萬留に上り、その一月至九月の輸出品目に於ては、コムが五千五百萬留、羊毛が千三百萬留、黄麻類一千四百四十萬留、有色金屬九百萬留、ココア八百七十萬留、茶七百四十萬留を占め、この中濠洲を主體とする羊毛を除いては、悉く西南アジアに位置する英屬領からの輸入であつた事が注意せられるのである。

特に茶の如きは、新鮮な野菜の常時入手の困難なソ聯に於ては、都會人口の増加と相待つて缺き得ざる基本食料の一つとなつてゐるのである。従つて一九三一年度に六千三百萬留の茶を輸入したソ聯は、國民の生活水準を最低限度迄切下げた今日なほ、一九三七年に三千四十萬留、一九三八年に三千四百七十萬留を輸入しなければならなかつたのであり、その大宗をなす印度は實にこの中百六十六萬七千三百ポンド、百三十三萬三千ルピーを占めてゐたのである。

而もこれ等の諸國の中土耳古に對しては、一九三二年八百萬米弗といふ土耳古建國以來最初のクレジット貸付けに成功し、ソ聯技術によるカイセリ、ナヂリ二紡績工場を設立して經濟進出に成功し、イランに對してもイラン棉花の購入代償として、一九二四年ソ聯資本四百萬トマンによるベルス・ホルボキ棉花會社をテヘランに設立し、十一の農事試驗場、三の操綿工場を有する外一九二五、六年の猛烈なダンピングによるソ聯燐寸の進出にも成功したのである。

以上を以つて見れば、ソ聯が既に經濟的進出に成功した諸國へは殊更事を構へる必要がないし、それと經濟的に不可分の關係にある爾餘の英屬領へも英帝國の力の強い間にわざわざ手を染めなければならぬ理由は、些かもないのである。事實ソ聯も獨逸との接觸面に於ては成程獨逸と好いが、その背後に於ては又英國——特に中亞方面で——と好いと言ふ二面政策を採つてゐるのであつて、これは全くソ聯の戰爭介入を避ける傳統的政策であると共に、これを現實に決定してゐるのはこの經濟事情で、英國の壓力によつて最近成立したアフガンのソ聯通商協定も全くその證左である。従つてソ聯の南下問題は、英帝國の世界的覇權の崩壊と關聯してのみ現實に起るのであり、假令この場

合と言へ、兩者間に横はる地理的悪條件は、有力な考慮の対象となるのである。何故ならイラン、アフガンの場合は先にも述べたが、これを土耳其の例に採るも、ソ聯としては自國防衛の立場からダーゲネル海峡を掌握せねば意味がないのであるから、恐らくコーカサスから土耳其を横断して海峡へ出るであらうし、この場合ソ聯が假令國境の峻険な山岳地帯を突破し得やうと、僅か一本の單線鐵道によつて土耳其の抵抗を排除するに十分な兵力、資材の輸送は絶望である。又この場合は英・獨何れかの摩擦を覺悟して中亞國境に大軍を集中する事が必要であつて、當然この大軍の輸送にはコーカサスに三本、中亞に四本ある鐵道が擔當しなければならないのであるが、これ等七本の鐵道が本線に連絡する迄の距離は一千八百キロ乃至二千五百キロと言ふ長距離であつて、短時日の大量輸送は到底不可能であるからである。

まして現在の戦局に於て、獨逸は希臘を席捲し、ソ聯を外界と結ぶバルト海、白海、黒海共に波高く、一步誤れば本國の危急を招く時、どうして多大の費用と精力を費して土耳其を除くアフガン、イラン、イラクの征服に荏苒日を送らうか。況んやイラン、アフガンが英國の弱體化に乗じて、自國の獨立を強化せんため、ソ聯との國交調整にも成功して益々對ソ依存の傾向を強めてゐる時、ソ聯にその南下政策を強制すべき何等の理由もないと言ふのである。

三

然しこれに反對する側は、何時も現實の具體的動向に執着して、歴史的立場を拒絶するのである。

例へばその政治關係に於ても、常にソ聯の世界問題が取上げられ、第一次大戰以後の國際情勢に於ては資本主義國

家間の鬭争に、資本主義國家とソヴェエト國家間の鬭争が新に追加せられ、バルカン、地中海、アジアをめぐる日獨英の爭覇戦の背景には常に強國の弱體化を企圖するソ聯の世界政策が登場してゐる。従つてその戦争不介入と言ふ目的貫徹のための手段には、自ら一定の限界もあつて極めて積極的な意味を持つてゐる。今次大戰下のソ聯をめぐつて展開せられた一聯の政策——フィンランド攻撃、ポーランドの共同占領、白ロシア、ウクライナの回收、ベッサラビヤ、ブコヴィナの併合等がその好い例ではないか。勿論これ等も自國の安全保障を求めると言ふ政治的には極めて消極的な意味を持つものであるが、手段は飽く迄も積極的である。それは戦争不介入を最も廣義に解釋した場合にのみ成立し得る積極防禦の體制であり、積極防禦の積極性は消極的攻撃に勝つてゐる。従つて西南アジアの背景をなす英國勢力の頹勢が明かとなる時、或ひは又曾てのポーランドが現在の土耳其の如くそれが明かに第三國の手に陥ちんとする形勢の逼迫した時、これ等ソ聯の外郭をなす西南アジア諸國が依然正當なる理由の下に第二のポーランド第二のベッサラビヤとならないとは誰が保障し得やうか。歐羅巴戦局の現實はソ聯をしてかかる行動を採らしむべき危機を刻々醸成してゐる事は事實だし、昨年三月イラン側からバクー及バツムに赴いた二臺の外國飛行機、四月上旬土耳其側からバツムに飛んだ一臺の外國飛行機の正體が獨逸白書によつて暴露され、ソ聯の兩國に對する嚴重抗議となつた朝など、テヘランのホテルでコーヒーを飲む英國人官吏の手が微かに顫へた事を記憶するし、この時だけでも兩國々境に相當數の兵力集中が傳へられた。

然しこのソ聯の攻勢は、更に經濟關係に於て強調せられてゐる。何故なら西南アジアに對する前記の如きソ聯の經濟的依存性は、それ自身資源の確保を目指す南下政策實施の最大口實を與へるものであり、この上に立つてソ聯が現

在解決に逼られてゐる問題に石油、原棉、輸送の三問題があるからであつた。

この中石油は、ソ聯が機械工業の躍進を目指して實行した前後三回の五ヶ年計畫と軍機械化の徹底により、その石油消費量は一九三四年から三六年迄の僅か二年間に輸出を犠牲にしての一億千七百萬バレルから一億三千四百バレルに増加したのに對し、その八〇%を産出するバクー油田の相對的減産が顯著となり、目下裏海東北地區の第二バクーを試掘中ではあるが、未だ劃期的な成績を納めるに至つてゐない。従つて若し戦争が資源の再分割を意味するとすれば、今日程イランやイラクの油田がソ聯に對して重大な意味を持ち、絶好の機會である事を語つてゐる時はないのである。

然しこれと反對の立場にあるのは原棉問題で、從來ソ聯は印度及イランからの尨大な原棉輸入國であつた。處が最近はずベック以下中亞諸國の遊牧民にも集團農業を強制し、ソフホーズその他も活躍した結果、現在では白ロシア以外の全土に原棉栽培が行はれるやうになり、戦前收穫高の七百萬ツェントネルは一九三八年の二千六百萬ツェントネルに激増し、その自給率は四七%から九八・九%に飛躍してゐるのである。この事は、ソ聯が原棉問題に關する限り、少く共印度及イランへの依存から解放せられて、この方面へ兵を進める事の經濟的障害は除去せられた事を物語つてゐる。

又物資の輸送問題は、バルト海を封鎖せられ、黒海に到る東地中海及紅海の既に戦火の渦中にある現在、ソ聯に残された通路は僅か三つである。その一は白海のアルハンゲリ斯克迄大西洋を迂回する通路であり、その二はイランの縱貫鐵道を利用して裏海に至り、此處から輸送力の貧弱な船便に頼る通路であり、その三はウラヂオを經由する日本

海通路である。然し若し戦火が世界的規模に擴大する時、ソ聯の結局依存し得るのは第二の通路のみであつて、この通路の確保は如何にその輸送力が貧弱とは言へ、結局それがソ聯に専用輸送路を提供すると言ふ意味に於て、戦後もなほその重要性には變りはないのである。又現在こそ裏海以南はイラン鐵道に頼る以外の方法はないのであるが、既に先述の如くコーカサスに三本、中央アジアに四本の鐵道が國境迄伸びて待機してゐるのであり、若しこれ等が一齊に南下して外洋の出口と現實に結び付く場合の輸送力を考へると、決して輕視出來ないからである。

又ソ聯の南下を否定する側から主張せられるコーカサス及中亞國境の兵力不足問題は、軍の高度の機械化を理由に反駁せられてゐる。事實、兵力自體もこゝ數年加速度的に集中せられて前記の兵力を遙かに凌駕してゐる筈だし、軍の機械化に備へては軍需基地としての中亞都市の工業化が盛んに宣傳せられてゐる。その宣傳に依ると各地方の發電施設を完了した外、ウズベックに紡績工場、カザックに非鐵工場、アルメニア、ウズベック、タルクメン、ダヂックの四ヶ所に罐詰、煙草、砂糖その他の食糧品工場、ヂョオルヂアには油田の外精油、製紙、化學工場の設立が唱へられてゐる。又この宣傳は假令十分の一に割引して考へなければならぬにせよ、最近頓に充實を傳へられるソ聯空軍の機動能力は昔日と比較にならない範圍迄擴大せられてゐて、所謂中亞の地理的惡條件を征服する事は比較的容易であるから、結局ソ聯が現在待受けてゐるのは客觀情勢の好轉であり、英國壓力の相對的減少であると言ふのである。

四

デリー、カブール、テヘラン、バグダッド、そしてアンカラを一貫して流れるのは、この二つの主張の奇妙に交錯
ソ聯は印度へ南下するか

して醸す空氣である。何故ならどのホテル、どの官廳、どの學校へ行つても、このソ聯に關する二つの主張が特に最近高まつた關心を以て囁かれる事は事實である。然しその場合に必ずこの二つの主張がそれぞれ獨立した主張として語られるのでなく、常に例へばソ聯の傳統的な不介入政策に執拗に望みを託しながら、しかもなほ現實の動きが刻々に醸すソ聯南下の可能性に危惧すると言つた種類の、言はば兩者を折衷した形の主張として現れるからである。

然し危惧と、不安は常に無力の表徴である。その無力は、勿論彼等が一朝ソ聯の南下を現實に迎へる時、到底これに抗し得ない事を知る彼等自身の無力が第一義的である。事實、レザ・カーン皇帝の近代國家統一成つて民族意識の高揚してゐるイランにその例を採つても、この國の兵力は平時に於て八個師七旅、十三萬人の陸軍と新銳機二百臺の空軍と總數八艘の小型艦を有する海軍のみである。又大戰勃發以降は巨費を投じてアメリカ及伊太利から大量の武器を購入し、豫備兵の動員も一部行つてゐるのではあるが、これだけの兵力と裝備を以てしては、到底現在の中亞國境に待機するソ聯軍——二十萬の陸軍、三百五十臺の空軍、同數の戰車部隊——の前には抗すべくもないのである。従つて彼等の果敢ない希望が主張に托せられた時には、前記の如き極めて折衷的な、従つて結論の生れて來ない主張となる事は止むを得ないのであるが、この無力の自覺には又彼等の國家的性格に對する諦觀的感情も潜んでゐる事を忘れる事は出來ないのである。

事實、これ等の諸國は印度を除いて、一應獨立國と言はれてゐる。アフガン、イランの如きは、民族國家意識も極めて熾烈である。然し一步その國の政治、經濟機構に立入つて、その國がなほ完全な獨立國であると言ひ得る國が、果して一國でもあるであらうか。最も完全な獨立國と言はれる土耳其ですら、一九三二年の對ソ借款に始まる外國

借款によつて次第に身動きの出來ない状態へ押籠められ、遂に今次大戰下には到底支拂ひ得ない所の四千三百五十萬磅と言ふ巨額のクレヂット（一九三九年五月）によつて事實上の英國の經濟的植民地になり終せたのである。イランも又全領土の三分の一の經濟利益は英國に、残る三分の一はアメリカの支配する所となつて、北境又ソ聯の脅威に脅えつつ——事實、最近はウルミヤ湖の南岸地方迄ソ聯の赤旗がなびいてゐると言はれてゐる——その半植民地性を呈示し、イラクの如きは全く獨立の假面を被る英國植民地として、行政上の實權、駐兵權、石油權の悉くをその掌中に納められてゐるのである。

それを以て見れば、西は土耳其から東は印度迄、その悉くが植民地か乃至は半植民地で、完全に獨立した國家的性格を有するものは一國もないのである。そしてそれが植民地或は半植民地國家であるとすれば、その運命は常に主體國の意志によつて決定されなければならない。即ち、これ等の諸國はその國家的運命を擔ふ比重に於て、自己の力と同等或はそれ以上に主體國の力を評價しなければならぬのであつて、彼等の背後にある英國勢力の衰退が直ちにソ聯をして南下政策を實行せしめる危険性を誘致し、しかもその關係には全く自己の力を介入せしめる餘地はないのであるから、その悲哀が現在彼等の無力を諦觀的な方向に向つて二重に自覺せしめてゐる事は、否定出來ないのである。

回教四ヶ國を結ぶサーダバード同盟（一九三七年）が、土耳其の宗教國家からの脱落によつて、無意味なものとなり、横の紐帶の無力化した事もこの場合考慮せられる問題である。

五

然しかく見れば、ソ聯と西南アジア諸國の問題は、一應ソ聯と英國の關係に還元して論ずるのが本筋であり、ソ聯の南下政策に對する對策とは、少く共現在に於ては英國の政策でなければならぬのである。

今次大戦下の英國は、未曾有の國難に直面し、近東及北阿戦線に於ける獨・伊の壓力を強く感じ、極東に於ても又東亞共榮圈問題を中心とする日本の壓力を、ソ聯の南下政策以上に現實性を持つ問題と痛感してゐるのである。若しソ聯の南下政策に眞に備へる意圖があれば、イラン方面も考慮に入れて當然國內に保有すべき印度兵の大量を新嘉坡その他へ派遣する筈はないのである。

然しソ聯の南下政策を經濟的に處理せんとする英國も、これ等西南アジアの植民地國家に對するソ聯の思想的侵略には、極度に警戒の眼を瞪つてゐる。力には力を以て對し得るが、この思想的侵略は植民地國家に容易に受入れられて、その民族運動を激化する可能性が多分にあるからである。英國がイランやイラクの油田労働者の身許調査に嚴重を極める事や、社會主義に關する著書の發賣を一切印度に於ても禁じてゐる事などは、その一端である。殊に後者の取締りは豫想以上に嚴重で、最近は社會主義及共產主義の排撃を目的として書かれた著書すら單に社會主義を取扱つたと言ふ理由だけで禁止せられ、私が必要あつてカルカッタ大學の數萬の圖書を調査した時も社會主義關係の圖書は僅かマルクスの自叙傳とカウツキーの著書である「テロリストと共產主義」と言ふ僅か二冊を發見したのみである。

然しソ聯の思想的侵略に於ては、その裏面に潜む政治的野心が現實化する場合、直ちにその母體となり得るこれ等

植民地國家の共產問題も、一應取扱はれなければならぬであらう。

その一例を英國支配の集中的に表現せられてゐる印度に採ると、印度の共產黨は一九二八年頃には最盛期を迎へ、組合員五萬の赤旗組合によるボンベイ紡績争議の勝利によつて全印度の労働組合を掌握し、一時正式黨員も一萬人を算へた事もあつたが、一九三四年には英國政府の彈壓によつて黨の合法性を喪ひ、更に昨年三月には機關紙「民族戦線」も發行停止となつて、黨員も三千名以下に減少したのである。殊に一九三六年にはコミンテルンの方向轉換によつて黨は合法性を獲るため既存政治團體の中へ解消してその實體を失ひ、最後迄ボンベイの本據を衛つたミラチカル（新聞記者）、ニームブカル（辯護士）、ヒユダ（同上）、アドヒカリイ（醫師）の五名を以て構成する本部も、戦後英國政府の發布した印度防禦法によつて一網打盡となり、残るはその勢力下にあつたスワミイサハジャナンドの率ひる農民組合と赤旗組合の一部のみである。

これは他の西南アジア諸國にも共通する現象で、この類勢は如何にして醸成せられたと言ふべきであらうか。考へ得る理由の一は、第二次肅正以後ソ聯共產黨の一部と化したコミンテルンの權威喪失である。事實、コミンテルンは従來ソ聯共產黨に對してすら命令權を有してゐたのであるから、國際的見地からすら各國共產黨の指導にも自ら權威があつたが、それが黨の一部と化する事は取りも直さず國際的權威の喪失であると同時に、各國の特殊性を無視してソ聯共產黨の偏狭な立場を強制する事になつたからである。支那事變の勃發以降、支那共產黨十八萬と言ふ數に眼が眩んで、寧ろソ聯の心臓部に接する西南アジア工作を等閑に附した事など、その好適な一例であつた。

第二の理由はこれ等西南アジア諸國が何れも文化程度の低い前資本主義的形態に止つてゐて、その前資本主義的遺

制である宗教、家族的紐帯が極めて強く、これ等が本質的に赤化思想を拒絶するため、これ等諸國に共通する現象として最も容易にこの思想を受け容れる地盤の如く考へられる貧困は、その實、觀念的社會條件を意味するに過ぎないと言ふ事である。

従つてコミンテルンは、吸取紙に浸込むインキの如く凡ゆる社會層に浸潤する獨特の方法を固執して、各種の策動をこの西南アジアにも開始してゐる。然し策動は所詮策動である。それが政治的、軍事的保障を伴はぬ限り問題ではないので、英國側でもこれを輕視しながらもなほ、國際情勢の急變がそれを可能ならしめる事を恐れて萬端の準備を整へてゐる。印度兵をバスラへ上陸せしめた間接の目的もそれであるし、再び印度に例を採れば、ソ聯が印度へ南下の可能性ある道は四路である。嘗つてアレキサンダー大王の侵入したカイバル・パスやボラン・パスを始め、ゴマール・パス、アラクン海岸路がそれであるが、後者を除く前者は何れも標高千米の隘路であるため、結局イランを経由するアラクン海岸路が一番可能性の多い事となり、此處には特に慄悍なネーバル兵五萬を宛てて萬遺漏なきを期してゐる。又別途コミンテルンの手の伸びてゐると推察せられる西北國境のワジリ、アフメツジャエフ族等に對しては、堅固なトーチカ陣を布くと共に最近頃に空爆に對する設備を強化してゐる。

六

然し事態は、ソ聯の南下政策の本質論に終始する事を許さない程急迫してゐる。ルーマニアを奪はれ、ユーゴを蹂躪せられたソ聯は、獨逸が一步土耳其に足を踏み入れる時には、直ちにポーランドの例に見るが如く疾風の如くダ

ーダネルの確保を目指して兵を進めるであらう——此の場合土耳其分割は、ソ聯にとつて積極防衛の義務の完遂に外ならないと言ふのが、デリーとバグダッドの間を貫く定説である。

然しソ聯が更に進んで中亞への南下政策を強行するか否かの問題に就ては、或る意味ではこれ等中亞諸國の支柱をなす英國の宣傳が巧妙を極め、戰爭を來年へ持越す事によつて結局英國が勝利を獲るの觀念を今なほこれ等の諸國へ強く植付ける事に成功すれば否定せられる。然し貧困と搾取の希望なき生活に喘ぐ印度人がソ聯よりも獨逸を恐怖する感情は、私が印度で接した異常な經驗であつた。

(註) 獨ソ開戦によつて、この事情に著しい變化の起きた事は、言ふ迄もない。此處に詳述の餘裕はないが、新任ウエーヴェル印度軍總司令官が非常なロシア語通で、對ソ工作に大きな役割を演じてゐる事、對ソ警戒のため國境に集中してゐた印度軍がそのまゝ英ソ聯繫の主軸としてイラン及コーカサスを覗ひ、遂にイランを物したことが擧げられる。

印度工業化の基礎的問題

一

今次大戦を迎へて印度が死活を賭する問題の一は、印度の工業化と言ふ問題であると言ひ得るであらう。勿論この問題には英國側でも平時より顧慮を拂ひ、例年の通常豫算にもその總額の二厘七毛に當る百三十萬ルピーの工業奨励費を計上してゐるのである。而して二厘七毛と言ふ極めて僅少な金額が示すやうに、飽く迄も印度の市場性を確保せんとする英國資本主義としては如何に印度の民族産業が發展する事を希望するとは言へ、その希望には自ら一定の限度があるべき筈であつた。

従つて言ふ所の印度工業化とは、印度の支配者たる英國資本主義の要求する一定の限度を越えて、印度独自の、即ち本國産業から獨立した一單位としての民族産業の發展を希望せざるを得なくなつた事情の起きた事を物語るものであつて、その事情とは準備銀行總裁ジェームス・ティラー氏の昨年末の第六回株主總會に對する次の如き報告中に、明瞭に述べられてゐる。

「地中海を経由する歐羅巴との交通線は、昨年六月の伊太利參戰と佛蘭西の崩壞によつて切斷せられるに至つた。その結果印度は、軍需品の製造のみならず、これ迄歐羅巴市場に供給を仰いでゐた各種商品の製造を含めての極めて廣

範圍に互る自給經濟の極めて迅速な確立を必要とするに至つた。」

勿論印度としても大戦勃發以來全力を擧げての軍需資材の供給に努力し、英帝國を構成する一植民地の役割を充足して來た事は、説明する迄もない。事實印度が昨年十一月迄に英本國へ供給した軍需品の數量は、立法議會に對する財務委員ライズマン氏の報告にも明かな如く極めて莫大な量(註)に上り、この供給量確保の目的を以て軍備擴張費一億七千萬ルピー、工場擴張費七千萬ルピー、合計二億四千萬ルピーが大戦直後に印度政府から支出せられた。

(註) 右供給量として左の數字が發表せられてゐる。小銃 四十萬挺▽小銃彈一億發▽拋射火藥百噸▽爆彈二十五萬噸▽軍靴百三十三萬足▽毛布百五十萬枚▽軍服地一千萬ヤード▽シャツ類百五十萬枚▽靴下二百五十萬足

然しこの供給量が如何に莫大であるとは言へ、過去一箇年の供給品目と數量がこの程度であるとすれば、單に現在の印度産業が持つ全能力を發揮せしめる事によつて一應は解決する事は我々も好く知つてゐる。又前記七千萬ルピーの工場擴張費も、要するにこれ等軍需品目の生産を確保する目的を以て武器及被服工場の生産擴張に投じられたに過ぎないのであつて、決して言ふ所の印度工業化に表現せられるべき一般産業の近代化と言ふ質的變化を意味するものではなかつた。

従つてこの印度工業化は、依然ジェームス氏の報告に指摘される如く、地中海ルートの切斷によつて本國から孤立する危険を生じ、印度を含む全極東の英國植民地が日本及ソ聯の攻勢に對して自主的防備と經濟自給圈の確立を必要とするに至つた昨年六月以後に於て眞剣に取上げられた問題と見るべきであらう。

然し印度を含む全極東の英プロックは、未だ完全に本國から孤立してゐるとは言へないであらう。現に印度からア

メリカ經由でイムペリアル空路は復活してゐるし、少く共樞軸國側の近東作戦が勝利に終つてスエズ運河が閉塞する迄は、印度洋の危険が多少深刻化する事はあつても、兎も角喜望峯經由のアフリカ・ルートは健在であるからである。従つてこの印度工業化問題も、歐洲情勢の急變に對應して印度政府の立案した廣汎な國防計畫の實に一部を成すと共に、現段階に於て埃及から馬來に及ぶ廣地域の經濟自給圏の確立と依然續けなければならぬ所の本國への軍需品供給と言ふ二重の役割を負擔すべき運命に置かれてゐるのである。

二

印度政府は、この工業化問題を國防計畫の一部として遂行する機關として、大戰勃發と同時に設置した軍需部、經濟調査局、管理部の三組織を指定した。この軍需部は當時の司法部長サー・ザアフルラル・カーン氏を長とする軍需品動員の總司令部とも言ふべき機關であつたが、同時に又その一部に於てこれと不可缺の關係にある工業化問題を取扱ふ事とし、經濟資源局は國防經濟の立案、外國々防經濟の調査研究を行ひ、管理部は生産統制の立場からこの問題に干與し、そのカルカッタに持つ検査所をして直接工業生産の運行に干渉せしめる事とした。

かくて印度政府は昨年六月に於てこの計畫遂行のため六千萬ルピーを支出し、その中九百萬ルピーを製鐵工場、千五百萬ルピーを武器工場、九百五十萬ルピーを特殊工場、千五百萬ルピーを小工場の生産擴張費に當てる事とした。

然し印度政府がこの計畫を遂行せんとする途上には、三箇の障害が横つてゐた。それはベルギー敗戦と佛蘭西の危機の逼つた昨年五月を中心として惹起された金融恐慌と、歐洲市場の閉塞に伴ふ印度民族産業の疲弊と、生産擴張資

材の入手難といふ問題であつた。

この中金融恐慌は、英國が未曾有の困難に當面した歐洲戦局の悪材料に依つて起きたもので、それは磅の一般的軟調に伴つてそれと不可分の關係にあるルピーに對する不信、ルピー銀貨の退蔵に伴ふ補助貨幣の枯渇となつて現れたものであつた。その中後者の數字を表示すると、紙幣の増發三億七千萬ルピーに對し銀貨の減少二億ルピー、更に三箇月後は大戰前の半額以下實に四億一千萬ルピーと言ふ劃期的の減少となつて現れたのである。

	通貨發行高 (單位千萬ルピー)	紙幣	銀貨
大戰直前	二一五・六二	七四・三一	
昨年三月	二五二・二一	五五・九四	
同 六月	—	三三	

又歐洲市場の閉塞に伴ふ印度民族産業の損害は、一昨年九月から昨年四月迄の八箇月間で約三億ルピーと見積られた。殊に印度は、戦前に於て一即ち一九三九年四月の英印新協定によつて同年度の綿布ストック五億ヤード(推定)に加へて更に毎年ランカシヤ製品三億五千萬ヤードの購入を強制せられた上、印度の紡績業者は、一般の勞賃引上げと同四月一日から實施せられた外棉輸入税の引上げによつて高番手の紡績に必要な外棉輸入が不可能となつてゐたため、一九三七年當時の日本紡績品に對する抵抗力を一〇%以上喪失し、輸出綿布も一舉二億五千萬ヤードの減少となつて、これのみの損害だけでもボンベイ、アーメダバットの兩市で千七百萬ルピーと見積られてゐたのであつた。従つて大戰勃發以後の打撃は印度の代表的産業たる紡績業に最も甚しかつたと言ふ事が出來た。そしてこの事は、兩

餘の一般産業に與へる不利な影響を殊に顯著ならしめたのである。

印度政府では先づ補助紙幣の發行、爲替管理、磅貨の安定、ガンデイの動員によつて金融恐慌を征服すると共に、全力を擧げて紡績業を中心とする一般産業の救済に乗出した。その方法の一は、輸出顧問會議を設置し、アメリカと濠洲に貿易駐在官を派遣して生産擴張資材の購入に當らせる一方、歐洲市場の閉塞に伴つて國內滞貨となつた紡績品、黄麻、珈琲、茶、皮革、亞麻仁油等の販路擴張に當らせた事であつた。今一つは計畫的な國防計畫に基いて、一般産業にも大量の軍需注文を發する事であつた。その軍需注文は昨年未迄で總額十億ルビーに上ると言はれ、紡績業のみでも昨年六月一ヶ月のみでも總額五千二百二十八萬二千ルビー（綿絲六千萬ポンド、綿製品八千九百萬ヤード）の發註であつたと言はれた。又軍需部はその三箇月間に從來英本國から供給せられた年額四億五千萬ルビーの半額に當る商品の新規製造を民間に命じ、一時は熔鑄爐の火を落して生産能力を半分以下に減じた製鐵業にも、英本國へ送るべき鐵筋四百萬ルビー、埃及へ送るべき釘、鋼鐵タンク等五百萬ルビーの發註を行つた。

従つて過去八箇月の印度工業化は、それ自身の具體的な發展を劃すると言ふよりは寧ろその發展のために必要な基礎的工作―即ち大戰の打撃を受けた一般産業の立直しに費されたと見るのが至當であらう。然しそれにも拘らずモールスウォース少將は昨年七月九日のラジオ放送に於て、印度は既に第一次大戰當時持つた最大生産量（註）を突破したと發表し、政府亦一千種の新興工業が印度に於て開始され、近代軍需品二萬餘種の中一萬餘の製造が可能となつたと發表した。この問題に關連して、事實、問題の中心は如何なる種目の製造を開始したかにあるのではなくて、如何なる種目が自給量に達し或は達する可能性があるかなので、戦前に於ける印度の自給量に達した品目を擧げると次の如

くなるのである。

イ、鐵道工業

汽關車、蒸氣タービン、車軸その他二三を除く全部

ロ、軍需工業

車軸、有刺鐵線、電池、グリセリン、刃物、銅板、ハリケンランプ

ハ、化學工業

曹達灰、硝酸銀、鹽素、クロロホルム、カルシウム

ニ、日用品

紙、セメント、砂糖、マッチ、農具、電扇、ガラス製品、電線、ビスケット、煙草、石鹼、ゴムタイヤ、アスベスト製品、電球、アルミニウム

Senior British Trade Commissioner in India, "Report on the conditions and prospects of United Kingdom

Trade in India" より――

かくてこの上に立つて見る時、戦後に追加される品目は、製鐵工業の鋼鐵針金及製鎖、化學工業の枸橼酸、乳酸鹽、重クロム鹽酸、重炭酸加里等、製油工業のエンジン・オイル、金屬工業の銅、眞鍮等極めて寥々たるものであり、その他は單に生産施設を完了したか、乃至は生産を開始した程度に過ぎない。又戦前自給量に達したと報告せられるアルミニウムもその熔解工場は本年末漸く完成の見込みで決して全行程の自給を確保したものではない。又自

給量に達したと言ふ印度製品の品質の劣悪な事、その自給量が戦前の低調な國內購買力と睨み合しての自給量に過ぎない事、同じ自給量に達したとは言へ例へば鐵道工業で最も重要な汽關車の製造、軍需工業に於ける高級兵器、化學工業に於ける硫酸等重要品の自給が不可能であるばかりか、その製造着手すら不可能な事と睨み合せて、モレス少將及政府の發表は未だ宣傳の域を出ない事は明かである。問題は依然基礎工作の範圍を出ないで、今後に持越されてゐる。

(註) 最高生産量の數字は缺くが、一九一九年刊行の“Official Account of India's Contribution to the Great War”によると、一九一八年九月迄の精製品輸出額は八千萬磅、原料及び半製品の輸出額はその約六倍、黃麻及びその製品のみで一億三千七百萬磅であつた。

三

印度工業化の將來を卜する上に不可欠の礦物資源(註)に就て、印度は鐵、マンガ、硝石、高級雲母、クロマイト等の軍需及重工業資材を極めて豊富に擁してゐる。

(註) 一九三八年年度の主要礦産額は、次の如くである(※印は一九三六年度)
 鐵(二百七十四萬三千六百七十五噸)▽石炭(二千八百三十四萬二千九百六噸)▽マンガ(六十四萬八千七百四十噸)▽ク
 ロマイト(*四萬七千噸)▽雲母(*八萬六千噸)▽金(三十三萬三千オンス)▽銀(五百九十七萬オンス)
 なほ主要製品の産額は一九三六年度に於て次の如くであつた。
 鋼鐵(八十七萬九千七百八噸)▽同製品(六十七萬六千六百九十一噸)▽銑鐵(百五十四萬七百十六噸)▽その他の鐵製品

(七萬六千九百九十六噸)▽ガソリン(九千八百八萬ガロン)▽セメント(九十九萬七千噸)

殊に鐵はその埋藏量に於て英帝國の第二位を占め、若しその磁鐵礦に比して赤鐵礦の比較的多い缺點を除けば、優にバーミンガムに代位する鋼鐵業を招來する事が出来るであらう。就中オリッサ州南部に群生する鐵礦網は未だ露天掘程度の有なもので、ケオンチャール藩王國の鐵礦派など蜿蜒四十哩に亘り、沖積層の中斷する地點に於て純分度六〇%以上の鑛層断面七百呎を超える程であると言はれてゐる。従つて印度はその要求する生産量確保の問題を離れて鐵に關する限り、充分工業化の基礎を有するものと言ひ得るであらう。同時にこの事は、年百萬噸以上輸出して從來共ソ聯と競争する地位にあつたマンガ、十八萬噸前後を輸出する航空用高級雲母、硝酸鹽に關する限り世界市場を獨占する硝石、年四萬一千噸の輸出量を持つクロマイト等は、ビルマの錫及ウォルフラムと含して、極東英プロックへの供給量の少く共一部を滿し得るとも言ひ得るであらう。

然し印度は、石炭と石油と言ふ動力資源に缺陷を有して、これ等地下資源の工業化途上に大きな暗影を投げかけてゐる。この中石炭の年産高二千八百三十四萬噸は支那の生産高二千七十八萬噸を遙に凌駕し、その埋藏量もC・H・フオック氏の調査で六百億噸、地下三百米以上で二百億噸と推定せられてゐるので、一見極めて豊富に見えるものの、その實支那の埋藏量二千四百三十六億噸から見ると實に四分の一以下でしかないのである。又炭田もオリッサ州のゴンドワナ炭田を中心に中央州、ラジプタナ、ビカネル、中央印度等の極めて廣汎な地域に分散して、その分散性がマドラス州その他の鑛山開發を遅延せしめてゐると言はれる程の障害をなし、そのベンガル炭を除いて冶金用コークス以上に使用し得る良質炭を缺いてゐる事は、致命的な缺陷と言ひ得るであらう。事實この良質炭はその埋藏量に於て

も、前記六百億噸の實に八%にしか當らぬ五十億噸前後しかないのであつて、今後工業生産が發達すれば、百年の生命であらうと言はれてゐる。而も鐵道運賃の高價が往々にして印度炭の使用を採算割れとしてゐるので、從來冶金用には電力或は南阿炭を使用してゐたのであつて、一九三四―五年度下半年に於ける七萬一千噸の南阿炭の輸入量が戦後半年間に一舉九倍の六十三萬噸に飛躍した事は注目せられてゐる。

又石油もヒマラヤ山系の孤線内外に産油地帯を持つと言ふものの、印度は一九三七年のビルマ分離以前に於てすら七千萬ガロン程度の石油輸入國であつたし、現在では燈火用四億七千五百萬ガロン、ターター用四億三千九百萬ガロン、合計九億千四百萬ガロン（一九三八―九年度）と言ふ老大な輸入國に飛躍してゐるのである。而もこの石油問題に就てはビルマ油田の減産と國內バンチャブ油田の枯渴が指摘されなければならないであらう。

殊にビルマ石油はこれ迄印度燃料界の生命線とも言ふべきもので、その産額三億ガロン中二億五千萬ガロン程度が印度へ振向けられ、その中七割迄が燈火用に使用せられてゐたのであるが、最近はその總産額に於てすら既に印度への供給量に達し得なくなつた事は最早や蔽ふべくもなき事實で、印度への輸出量も左の如く減少一路を辿つてゐるのである。

一九三七年	燈火用	ターター用	一四六
一九三八―九年	燈火用	ターター用	一四三
			六二

(單位百萬ガロン)

又このビルマ石油が蘭印石油に比して高オクタン價のベンゼン製造の能力に於て劣り、發火熱量も低いと言ふ點を考へると、今後ビルマ石油は頼むに足らずと言つた感が深い。又バンチャブ石油の涸渴に對しては、目下同州アトリック油田とアツサム油田の開發に努力してゐるもの、結果は全く未知數であるので、昨年十二月設立せられた科學工業研究局では特にアトリック油田の研究所をしてこれ等動力資源問題の解決に當らしめる事となり、同研究所は目下バンチャブ大學と提携の下に石油及其の精製過程に生れる副産物の研究に全力を擧げてゐると言はれる。

かく見る時、印度の工業化は、その基礎的條件たる資源問題に於ても重大な缺陷があるのであり、その動力資源の不足は英國側でも率直に認めて(註)ゐる。昨年十月デリーに開かれた東洋英國植民地の軍需會議に、蘭印代表がオプザバーとして出席しなければならなかつた事は、この間の消息を物語つてゐると言へよう。

(註) サイ・フランク・ノイスは昨年一月號の『エシアティック・レビュー』誌所載に“India's Economic Contribution.” 於て、この動力資源問題に就き次の如く述べてゐる。

「石炭と石油は、余をして印度が第一次大戦以來成し遂げし極めて顯著なる進歩と、殆ど無限大とも言ひ得る可能性―即ち、農業及工業用の水力電氣の使用の發展とを以て補ひ得ることを想起せしめる」
然しこれに對しても、印度の水力電氣は民族資本によつて獨占され、漸く發展の緒に就いたばかりで、未だ工業需給量の三分の一を満たす程度であり、その價格の高價な事を擧げられなければならないであらう。

四

然し印度の工業化は、同時に印度社會の近代化を不可缺の要件とするであらう。印度社會の停滞性は、民族の歴史

的集積とその前資本主義的性質の維持に却つて利益を感じる英國支配によつて、極めて複雑な様相を提出してゐる。例へばヒンズー社會のカスト制度も、現在では宗教的性質から職業ギルト的性質に轉化してゐる。波羅門以下の四種姓も、現在では二十餘階級二千餘に分化した、その最高に位置する波羅門も經濟的理由によつて小作人、料理人になる事は許されてもその他の職業に就く事は禁止されてゐる。又或る種姓では、各種の労働者の中傭夫になる事は許すが、その他の業に就く事を禁じ、クシャトリア種姓のアローラ階級などは高利貸になる事を許されても、農民及商人となる事を禁じてゐる。又同じカヤスト階級は、その名稱自身商業に關係する『會計係』を意味してゐた。そしてこのカスト制度が直接近代産業に影響した一例として、カルカッタ市に紡績及黄麻工業の發生した當時、比較的高いカストの所屬者を多數持つベンガル州には労働者になり手がなく、止むなくビハール、中央その他各州から百二十萬人の労働者を集めて漸く操業したと言ふ事實を、我々は銘記してゐる。

この印度社會の停滞性は、工業化の途上に次の如き影響を與へてゐると見る事が出来るであらう。

- 一、技術者の不足
- 二、労働組織の封建性
- 三、労働者能率の低劣
- 四、企業金融問題

この中技術者の不足に就ては、未だ前資本主義形態と深い關連を持つ印度産業の現状から押して、殆んど論を俟たないであらう。その最も進んだ製鐵業に於てすら、一年八十萬噸臺の鋼鐵と六十萬噸臺の同製品を生産しながら年額

四千萬ルピー以上の鋼鐵製品と一九三八年度に於ては實に一億四千三百十萬ルピーに上る機械類を輸入しなければならなかつた事情は、決して資本、技術、燃料問題だけでは解決し得ない所の問題であらう。この技術者の不足は印度の民族性と今一つ教育を通して社會的連關を持つとも言ひ得るであらう。事實、印度の教育問題は自由主義を名とする英國の放任主義によつて極めて未發達の状態に置かれ、その大學は現在十六校、一萬一千名の通學生しかない。

而もこれ等の大學は英國の放任主義と印度の民族性に基いて、宗教、歴史、經濟理論等を主とする文化的偏位が著しく、直接科學部門を擔當する専門學校は五十三校一萬名の通學生を有するに過ぎない。これ等専門學校の中には、タター財閥寄附で經營されるバンガロールの印度科學學院やボンベイのヴィクトリア技術學院、或はベナレス大學の鑛山科等もあるが、これ等を除けば結局我が國の職業學校程度であり、その科學思想の貧弱な民族性が今日の技術者拂底を招來する一因であつた事は否定出来ない。又技術と労働との關連に於て、科學的活動を極端に輕蔑する印度社會の封建的偏見も、此處に指摘しなければならぬであらう。

かくて印度政府では、一昨年六月、その國防計畫の實施上基本的調査として、製鐵及鐵道工場百四十の調査を行つた結果、當面の計畫實施上からでも既に印度は一萬人以上の技術者に不足してゐる事を發見し、同月二十六日附を以て印度人技術者(半熟練者を含む)四千名の徵用令を發布した。又教育委員サーデエン氏を長とする技術訓練調査委員會を設置し、一期三千名、年一萬名の目標で大量訓練に着手した。然し未だ問題が残つてゐる。獲得した技術者の質の問題がそれで、これ迄の技術者は前記の社會事情によつて比較的階級の出身者であると言ふ理由で、本質的

に劣る素質を有してゐた。又組織的な訓練機關を缺くため、英本國及アメリカが登場し、高級技術員の交換、指導技術員のアメリカよりの渡印が盛んに行はれてゐるが、依然彼等に精密機械の取扱ひは困難で、今後の大きな問題となつてゐる。

又労働組織の封建性は労働者能率の低下問題とも關係があつて、後から述べる印度労働者の半農性と印度社會の停滞性と言ふ二大社會要因の中に、その原因を求めざる事が出来らざらう。然し此處に言ふ印度社會の停滞性とは、印度が歴史的な農業國として過去三十年間の都會人口が僅か一%しか増加しないと云ふ事實、この停滞性を強化する要素となつてゐる英國資本主義の壓迫によつて印度民族産業に組織的な生産と企業形態の近代化が不可能であると言ふ事實の中に求むべきものである。即ち、常に過剩状態にある生産の非計畫性、規格及價格の不統一、取引行程の封建性、金融問題上の困難等がその中に含まれるのである。

然し労働組織自體の封建性は、その集中的表現の一を、企業經營者と労働者の中間に不可欠の要素として介在するムッカダム、シルダール、カムガニ等の制度の中に見出す事が出来るであらう。その一つ一つに就て此處に詳述する餘裕はないが、その中労働周旋人を意味するシルダールの如きは、前記の如く印度の工場が労働力の獲得に困難するのに乗じ、農村を舞臺として労働力獲得に従事し、比較的好況に恵れた一九二四年のボンベイ州政府の『一般賃銀調査』に於てすら、二百四の調査工場中百四十七工場迄がこのシルダールを唯一の機關として労働力を獲得する旨が報告せられてゐる。然しその弊害は單に彼等が募集した労働者を立替金その他の偽購的行為によつて隷屬化し、一定數の労働者を擁する労働請負人としての身勝手な労働力の轉移を行ふ事だけには止らない。それは實に彼等が最近生産

行程へ直接入込み、職場の配分、必要知識の配給、工場經營者との交渉等労働組合の幹部的役割を演ずると共に、賃銀の決定迄行つてゐる事である。而もかかるシルダールは、ボンベイ州政府の報告によると、普通労働者の平均月收三十五ルピー、婦人労働者二十二ルピー、職工長九十ルピーの一工場に於て、實に百二十ルピーの高給を喰んでゐるのであつた。これ等シルダールの上に君臨するムッカダム主として非熟練労働者を勢力範圍とする一の弊害に就ては、説明の必要がないであらう。

又労働時間或は工場設備等は一九三四年の工場法によつて一應制限せられてゐるとは言ふものの、その代表的な紡績業に於てすら一定しないのが普通であり、その適用範圍が全労働者數百九十六萬人で使用労働者二十人以上の工場であるが、これ以外に百五十萬乃至二百萬人の労働者を使用する小工場及手工業に適用されぬ事は留意すべきである。これに就ては雲母、絨氈工場の悲惨な話が傳へられてゐる。又賃銀率の一定しない事も、労働組織の封建性の一表現と言ひ得るであらう。

労働者能率の低劣は、印度労働者の半農性と労働になり手が比較的階級の者である事情によつて説明せられる。印度労働者の半農性は、農村の前資本主義的自給經濟の残存とモスリンの市ダッカを壊滅せしめた十八世紀中葉以後の都會解體過程に於て常にこれを收容した(註)農村社會の封建的な家族制度の中に、その原因を求め得ると共に、これ迄近代産業の基礎の極めて薄弱であつた事を擧げ得るであらう。これ迄は労働者募集の困難に原因して一定の耕地と荒蕪地開墾の自由を許すアッサム農園や一部鑛山の例は、此處に觸れる必要がないであらう。然しこの労働者の半農性の生産能率を低下せしめ、これ迄の一人宛最高年採炭量が英國の二百五十噸及アメリカの七百八十噸に對

して印度は僅か一九三四年の百三十噸である事や紡績工の能率亦日本との比較に於て一對二・六である事等は技術者の質的問題と關連して重大な要素をなすものである。

(註) 印度の農村人口は、全人口の比率に於て事實一八八一年の五八%から同九一年の六一%、一九二一年の七三%、現在の八九%へと壓倒的多數へ饒上りに上つてゐる。

又金融上の困難は、印度金融資本家のこれ迄の印度産業に對する不信とも解せられるが、それよりも印度に土着金融資本家を缺く事、即ち印度金融界の實權を握るのが外國銀行であると言ふ植民地事情によるものと見るべきであらう。事實印度の銀行數は僅か十八行で、その資本金總額千八百萬磅、豫金總額五千六百萬磅であるから、到底龐大な金融需要に應じ得ない事は明かである。又これ等十八行の中純粹の民族資本經營であるアラハバッド、印度中央の二銀行を除けば、最大の資本を持つ帝國銀行も嚴密に言へば英印合資經營であり、これに續いては全印主要地に十九の支店を有するロイツ、チャータード銀行である。かくの如く金融界の實權を握るのが外國銀行である事は、平時より事情の暗い植民地に於ての放資を餘り好まぬ事と、彼等が勸業乃至は農工銀行の性質より寧ろ爲替銀行の性質を帯びてゐるその金融ルートの本源が何れも本國にあるため、今次大戰下に於てはそのルートが切斷せられて資金の凍結を來たし、益々放資を喜ばぬ傾向にあるのである。その間隙を縫つてシュロフ、バニヤ、マハジャン等の高利貸の活動も考へられるが、彼等の對象は精々中小工業者程度で大規模な近代産業の需要に對しては全く無力である。勿論印度の産業界は平時より金融難の問題もあつて、企業の合理化を目的とするマネージング・エージェント制度を採つてゐる。然しこの制度は企業の横斷的組織を中心としてゐるため、統制經濟の立場からする各企業單位の編成には却つて

障害となる。従つて印度工業化途上の金融梗塞は、今後政府の放資を中心として解決しなければならぬであらうし、それだけ困難を倍加することとも言へるであらう。

五

右の如く、此處にはたゞ印度工業化の途上に横はる極めて基礎的な問題の幾つかを取上げて述べたに過ぎない。然しその何れもが印度を工業化するためには、結局印度社會の近代化を必要な前提條件とする事を物語つてゐる。而も印度社會の近代化は、印度社會の中心が前資本主義的要素の極めて強固な農村であると言ふ事情によつて、著しく困難とされてゐる。

事實、印度の農村社會に於て個々の契約を基礎とするリヨットワリ制の極めて限られた一部にその資本主義化を見るときは言へ、そのリヨットワリ制の下にある土地の大部分及ゼミンダール制の下にある土地の全部は未だ前資本主義的形態の上に置れて、農村協同體的自給經濟も未だ完全に破壊されないのである。従つてその家族制度にも極めて封建的要素の強い事は否定出來ないし、十八世紀に起きた英國資本主義の侵入による農村家内工業の破壊は、却つてこの關係を強化した感すらあるのである。従つてこれ等の事は、農産品の商品化に伴ふ偏作(註一)や過酷な土地の使用に伴ふエーカー當り産額の減少(註二)と共に記憶せらるべきであらう。

(註一) この偏作の結果印度は現在米の龐大な輸入國に轉じ、抵抗力の減少に伴うて今次大戰下には茶、植物油、黃麻、棉を除き第一次大戰當時本國へ供給した小麥量(五百萬噸、四千萬磅)すら不可能ではないかと考へられてゐる。

印度工業化の基礎的問題

(註二) 産額の減少は、英國側の宣傳にも拘らずその面積に於て全耕地の十分の一に達せぬ灌漑の未發達、農民の貧困に原因して有機分を必要とする印度の耕地に充分肥料を與へ得ぬ事、一家當り四・四六エーカーと言ふ耕作地の極端な零細化等が原因として擧げられるのであらうが、主要農産品の現状の如きも日本との一エーカー當りの産額との比較に於て特に顯著である。

	印度 (ボンド)	日本 (ボンド)
小麦	六七七	一三二八
米	一三三六	三二三二
棉	八九	三四七
茶	五一八	六四〇

かくて印度社會の近代化が徹底する時、始めて印度の工業化も實現するのであるが、印度社會の近代化とは農村社會の近代化であり、民族運動の一端にも必然觸れて來なければならぬ問題でもある。然し英國政府は問題を政治的に解決する事を喜ばないであらう。而も彼等は印度社會の前資本主義的要素を維持する事に利益を感じてゐるのであるから、これ等を如何なる條件の下に近代化するか、そして又大戦下に發達する印度民族資本と本國資本主義的關係を戦後如何に調和するか等の二つの大きな問題を持つてゐるのである。若しこれ等を完全に解決し得ないとすれば、結局中途半端な一從つて現在の英國には無意味な一印度の工業化が實現するだけであらう。

日・印關係の將來

—

日印關係が問題とせられる場合、その兩國を結ぶ紐帯に就て先づ我々の頭に泛ぶのは、極めて古い歴史を持つ兩國間の文化、經濟的關係である。

日印間の文化的連繫としては、何よりも佛教によつて表現せられる佛教美術、建築、それ等を包含する佛教哲學乃至は佛教自身として觀念せられる。然しこの觀念乃至は感情は、單に日本と印度を結ぶのみならず、その間に支那を置いて天竺・唐・大和の三國思想によつて認識せられるものでなければならぬ。然し印度に於て佛教は既に死滅した宗教であり、その信徒數もヒンズー教徒の三億四千萬人に對して僅か千三百萬人程度で、全人口の三分六厘に過ぎない。これは全く佛教が過去の霸氣を失つて現實生活に何等積極性を持たなくなつたからで、この事は支那に於ても、日本に於ても同様である。従つてこの積極性を失つたと同時に又各國の特殊性に至められた佛教は、この三國を結ぶ紐帯とはなり得ない。

知られる如く西紀前五世紀に誕生しアシヨーカー王(紀元前二七二—二三二年)時代に最盛期を迎へた印度佛教は、ネパール國麓に極めて民主主義的な氏族社會を形成する釋迦族の、當時印度を支配して專制化の過程に移つたヒンズ

一社會に對する叛逆の理念として生れたものである。従つてそれは宗教闘争の形を探ると言ふものの、實はヒンズー教徒の西洋的性格に對する東洋文化の精神的挑戦であつたのである。事實當時のヒンズー教とは、自らをアーリヨ(高貴)と特む西洋的性格を持つ印度アーリアン——これは現在西洋文化の中核をなす希臘アーリアンとは異つてゐる——の被征服民族統治の政治的要求に基き始めてカストなる身分制度による階級社會を組織し、この社會維持の理念をその中心へ集大成して行つた宗教形態である。又佛教は釋迦族によつて代表せられる農民層を中心として、このカスト社會に包含せられぬ卑賤階級に共通する政治的利害がその解放運動となつて行つたもので、佛、法、僧の三寶具足とは即ちこの闘争形態の名實共に完成した事を意味してゐる。

佛教理念に諦觀的要素が強くなつたのは、西曆六世紀以後印度各地に佛教國が出現し、カニシカ王以下がその國家統治の理想としてこれを用ひ、統治者の宗教と化して以後の事である。従つて天竺・唐・大和を貫く文化的紐帶とはかかる素朴な戰鬪的な佛教でなければならぬ。何故ならこの三國は今自らが支配するのではなくて、これを壓迫する西洋支配から自らを解放せんと努力してゐる時であるからである。この共通した目的に結ばれる佛教は、かくして西洋支配に挑戦する東洋精神として表現されるのであり、それは古き教典の解釋でなくて佛教精神の本質を汲み取り、それを新な教典に創造する過程に生れるものである。

現在印度の國民會議派を中心とする民族運動の精神的基礎は、ヒンズー教であると言はれてゐる。事實印度の民族運動も、その出發點に於てはヒンズー教復興の形を採つてゐた。ガンデイも又その戒律を嚴重に守るヒンズー教徒である。然しこの場合は我々も、ヒンズー教が、或は印度の回教支配、或は基督教支配によつて、西曆十二世紀以後本

質的な變化を顯著に示してゐる事に注意しなければならない。十七世紀から十八世紀にかけ、西洋文化との接觸によつて起きたモハン・ロイヤヴィヴカナンドの宗教運動も、その形こそ似たむきなヒンズー教の復古運動であつたが、その意味する所は過去へ復歸する事によつてカスト的義務を民衆に覺醒し、以て西洋文化打倒の闘争へ動員せんとしたもので、言はず勢力の失墜したヒンズー教を正しい東洋的民族の精神的基礎の上に再建せんとする運動であつたのである。又ガンデイも成程生活的には嚴格なヒンズー教徒であるかも知れないが、その運動方法、理想等を見れば、全く思想的には典型的な東洋宗教の一たるジエーン教の影響が強く、その集中的表現とも言ふべき「非暴力」の理想を通して佛教思想と最も近いのである。事實この外にも、ヒンズー教と佛教の兩者に共通する本質的な要素も極めて多い。例へばウバニシャッドに説く唯一不二の思想たる梵我不二の境地は、全くその眞理追求の道に於ける佛教の大悟徹底と同一であり、その本性への苦行は嚴格なカスト的義務を課する事によつて、佛教の修業に通じてゐる。故に今日印度民衆の中には、佛教をヒンズー教の一派と考へる者も多數ゐるのである。

かくの如く日印間の政治的關係は英國と言ふ要素を仲介として如何に悪化しやうと、この普遍的な佛教精神の上に築く文化的紐帶は決して切れる事がないであらう。事實若し我々が現在の東亞共榮圈問題を徒に「物」の上のみに築く事なく、これに最も普遍的な生命を與へるため「理想」の上に築くとすれば、勢ひその理想はアジア民族の復興でなければならぬ。アジア民族の復興と言ふ戰鬪的目標は、かくしてその精神的基礎として佛教を持ち、この佛教を通じて唐、天竺、大和の三國思想をその内容とすると言へるであらう。かくして八紘一字の理想を持つ東亞共榮圈問題は、日、支、印の三國を樞軸として發展せしめられなければならない。指導者たる日本に課せられた任務は、この

新しき佛教の發見とその上に立つ三國思想の發展でなければならない。

二

日・印間の經濟關係は明治十年の過去に始まり、明治三十八年最初の通商協定成立を見た古き歴史を有するものである。

知られる如く印度は、年平均六百萬バーレルと言ふ世界産額の一四%に上る原棉産地である。従つてこの原棉の消費問題は印度にとつて最大の問題であるが、この事は同時明治以來輕工業、特に紡績業を生命線として發達して來た我が國が原棉購入とその製品の消化を最大の問題とすると言ふ事によつて、兩者をこれ迄不可分の關係に置いてゐたのである。そしてこれは今に續く切つても切れぬ兩國の經濟的紐帶となつてゐる。

然しその後の國際情勢の變化は昭和八年四月に至り、遂に印度をして明治三十八年來の通商協定を破棄せしめ、爾來三年毎に會談を開き、日本の印棉買付量を基準としてその綿絲布輸出數量を決定するやう變更せられた。而もその會談はこれを開く毎に日本側に不利となり、一九三九年度の第三回會談などは全く歐洲大戰を口實として正式協定の締結に至らず、假協定の範圍で今日に及んでゐる有様である。この經濟條件の變化は、一體何處から生れたものであらうか。我々はこれを掘下げ、これを突き詰めて行つて常にその陰に動く英本國の魔手にぶつかるのである。昭和八年四月印度が始めて我が國に通商協定の破棄を申出た時も、その真相を突止めれば決して印度自體に罪があるのではなかつた。それは一九一四年に始まる英本國の世界的覇權の喪失過程に於て、これを喰ひ止める最後の方針として保

護貿易の採用を宣言した一九三二年のオタワ協定、それに印度が参加を強請せられたからに外ならない。言ひ換れば印度は英國の植民地である悲しさに英國覇權の衰退防止戰に動員せられ、そのため日本に最惠國の待遇を與へ得なくなつたからに外ならない。従つてこれは印度農民乃至印度産業資本家の要求でなくて、寧ろ英本國の命令によるものであると言ふ事が出来るのである。又爾後の會談に於ける印度の強腰も全く、英本國が自己の負擔する印棉買付義務量の一部を日本へ振向けて自己の負擔輕減を圖り、併せて輸入を許可する日本綿絲布を出来るだけ低番手の下級品に限定し、全くかくする事によつて上向線を進る印度紡績を苦境に落し入れ、高級品の高番手物はこれをランカシャー製品で獨占せんとする英國資本主義の要求に基くものに外ならなかつた。第一次會談から第二次會談にかけて日本の印棉買付義務量は百萬俵から百五十萬俵に増加したのに對し、その綿布輸入許可量は三億二千五百萬ヤードから三億五千八百萬ヤードに増加したに止つた。又これに反し一九三九年四月新に締結せられた英印通商協定の内容を見ると、英本國の印棉買付義務量は八十萬俵程度へ激減したのに對し、印度に強制せられるランカシャー製品の購入量は、綿布五億ヤードのストックを持つ同年度に於て三億七千萬ヤードと言ふ日本のそれを凌駕するもので、この義務の不履行に對しては印度側にのみ嚴重な輸入税の引上げと言ふ罰則さへ設けてゐる。事實この輸入税が引上げられれば印度産業家の計算で印度製品は一五%のコスト高となり、高番手の製品に缺く事の出来ぬエジプト、スーダン棉の輸入は不可能となり、益々發展を阻害される運命にある事は、その間の事情を明瞭に物語つてゐると言へやう。

今、日印貿易の消長の跡を辿つて見ると次の如くで、日本に於ける對印貿易の順位も第一次大戰前五年間の平均で輸出は第六位、輸入は第一位を占め、以下第二表の如くなつてゐる。

對印貿易額(單位一萬圓)

年 度	輸 出 額	輸 入 額	合 計
大正七年	二〇,一五〇	二六,八一九	四七,〇六八
昭和四年	一九,八五〇	二八,八一〇	四八,六六〇
昭和十二年	二九,九七〇	四〇,九〇九	七〇,八七九
昭和十三年	一八,八〇四	一七,三三三	三六,〇三七
昭和十四年	三三,〇九九	一八,三二六	四九,三二五

貿易單位(弧内は全輸入或は輸出額に對する比率)

輸 出 輸 入

大戰前五年平均	第六位(四・三%)	第一位(二一・三%)
大戰後五年平均	第三位(七%)	第三位(一四・八%)
昭和十二年	第三位(七・二%)	一 (一一・八%)
昭和十四年	第五位(九・一%)	一 (一五・四%)

かくの如く對印貿易のバランスは、我が紡績業の勃興期に當る明治初年から昭和四年迄はその老大な原棉買付量と製品賣込みのバランスが採れず、久し間入超続きであつたが、その後我が國から印度へ輸出する機械部分品や雜貨品の躍進によつてそして又世界的不況に基く英國産業の低調に補はれて、爾後昭和五年より四年間は出超に轉じた。然

し昭和九年より再び入超に轉じ、昭和十二年の如きは事變による見越輸入もあつて、その入超額は一億五千萬圓と言ふ未曾有の額に達した。然し昭和十三年以降は、我が産業界の建直りにより、それ迄間隙を狙つて南洋方面へ進出してゐた印度紡績を、見事驅逐する事に成功して再び出超に轉じ、更に昭和十四年以降は歐洲大戰によるヨーロッパ製の杜絶に惠れて躍進に躍進を続け、昭和十五年の下半年以降はその輸出貿易に於ても印度は、アメリカに次ぐ第二の顧客となり、緊迫する世界情勢の下にあつて日本の貴重なドル箱となつてゐる。事實この昭和十五年の上半期は、歐洲市場の閉塞に伴ふ印度輸出産業の打撃により彼等の購買力も著しく減退し一時悲觀すべき状態にあつたが、六月以降は近東、北阿戰線の活況と印度國防計畫の實施によつて、これに動員せられた印度産業には、最早や國內需要に應じ得る餘力なくその肩替りも大部分日本へ振向けた事と、日英開戰の危機に基く見越し輸入が開始されたため、注文の殺到となり、昨年下半年の貿易額は未曾有の額に達し、日本の業者をして一時原料難に陥入らしめた程である。今對印輸出入品の内譯を昭和十三年の貿易表に見ると左の如くで、その孤内の金額は一萬圓を單位とするものである。

輸 出

一、纖維類、總計一三、八六一

(1) 絲類、計 三、七二二

綿絲(二、〇五七)、人絹絲(四五五)、毛織絲(三六七)、毛編絲(一四五)、スフ絲(一一四)、生絲(一五二)、紡

績絹織絲(一四七)

日・印關係の將來

(四)織物類、計 九、六二四

綿織物(六、七八八)、人絹物(一、一六三)、絹織物(七八三)、毛織物(三四六)

(五)衣類、計 五一五

シャツ類(一四〇)、靴下類(九八)、肩掛その他(八一)

二、その他、總計四、九四三

腕輪(二五五)、陶磁器(二四〇)、内食器類一七二、建築用タイル六八、硝子製品(五五三)、内瓶類(二〇三)、金屬及鑽石(三六一)、内珐瑯鐵器五三、機械類(八五一)、内紡織機三三二、織布機一四五、自轉車類九一、玩具(一七二)、セルロイド製品(八六)、ゴム製品(五九)、その他(三六五)

輸入

棉花(一一、〇九九)、黃麻(三二四)、鑽石及金屬(四、五六四)、内雲母二六七、羊毛(一〇九)、その他(一一七)

右の商品別は明かに日本と印度の關係が丁度英國と印度のそれの如く、工業國と原料提供國の關係にある事を示してゐる。然し日本が工業國として供給する品目は、右表に明かな如く機械類四・五%——これは、同年度印度の機械輸入額に於ても僅か四%にしか當つてゐない——に對し、綿絲布類は實に七三%と言ふ壓倒的數字を示してゐる。この事が日本と印度の關係が未だ産業資本主義時代にあつて、機械、技術、資本の輸出入關係に築かれる近代的領域に足を踏入れてゐない事を物語つてゐる。従つてこれを極言すると、日本はその自給量の六三%を既に供給可能となつてゐる印度紡績業の犠牲に於て、その經濟的野望を満してゐると言へるのである。かくては一部の原棉販賣者と日本

の紡績業者、或は日本の雜貨商と印度一部の商人との經濟關係はあり得ても、少く共東亞共榮圈の指導國家と印度の間の全體的な經濟關係の基礎となり得るものはない。勿論印度の紡績業は、世界的水準を去る事未だ遠いと言へるかも知れない。又世界産額の一四%を誇る印度棉も、外棉の混入なくしてランカシヤ製品に對抗する高級綿絲布の紡績が不可能であるとも言はれてゐる。然しそれでも現在の印度紡績業は、如何に英國支配の壓迫踞踏下にあつて薄弱な經濟的基礎を餘儀なくされてゐるとは言へ、支那事變の當初には日本商品を南洋から驅逐するだけの力は有してゐたのである。又現在戦時下の好況を迎へて第一次大戰當時と異なる劃期的な發展を遂げんとして居り、その紡績業の投下資本がその七割八分迄、民族資本である事が注意されなければならない。この點その六割三分迄が外國資本で、而も現在完全に近い填減状態に陥ちてゐる支那紡績業とは全く異なる所で、この事は今一つの輸出大宗たる雜貨品に就ても言へる所である。事實戦後の印度民族産業の發達を豫想すると、最早や粗惡な日本雜貨品には喰込む餘地がないかも知れないのである。

三

新しい日印間の經濟關係は、以上の上に立つて決定されなければならない。今この上に立つて日印間の新しい經濟關係を作る物的基礎を再検討すると次の如くなる。

最初は棉である。印度は昭和十三年度に於て五百六十六萬バーレルの原棉産額を示してゐる。その中二百九十三萬バーレルはこれを海外へ輸出してゐるのであるが、實にこの輸出量の五〇%、即ち全産額の二四%に當る百三十六バ

トルが日本に對して賣られてゐるのである。従つて印度紡績業が現在の大戦下に如何程躍進し、如何程膨脹しやうと、この五百萬バーレルに上る原棉全量を消化する事は到底不可能である。従つてこの棉の購入問題をめぐる日本と印度との關係、即ち大戦以後も隨一の顧客として残る事には間違ひない。又印度としてもこの老大な原棉を他に振向けても、これを消化し得る國はないのであるから、結局この對日依存の關係は今後も持續するものと見なければならぬ。従つて若し日本に指導國家としての矜持があるとなれば、この矜持を維持するためにはこの對日依存の思慮は思慮として残すべきであつて、現在の如く、その原棉の購入量に比例する日本製の綿糸布買取りを義務づけすべきでない。何故なら日本は現在かくする事によつても、なほ英國からはランカシヤ製品と全面的に衝突を避ける面に於てのみ、その製品賣込みを許可せられてゐるに過ぎないからである。この事は勢ひ日本製品が低番手物を中心として、印度製品と競争しなければならぬ事を意味してゐる。勿論この競争に於ては、技術的に優れた日本品が印度商品を壓倒するであらう。然しそれは結局印度の民族産業を壓迫する事により、その窒息する事を心から願ふ英國の印度搾取に日本も一役買ふ事になるのである。事實日本紡績の印度進出にはかうした事實のあつた事を否定出来ない。又國民會議派の經濟學者なども、印度の獨立運動と民族産業發展の不可分關係を説いた後、若しランカシヤ製品の侵入がなかつたら印度は一九三〇年頃には獨立を達成してゐたし、若しこれに次ぐ日本製品の侵入がなかつたら、今回の大戦と言ふ好機に必ずや獨立を貫徹し得た筈であると主張してゐる。若しアジア民族の解放が東亞共榮圈建設の中心命題とあるとすれば、この言葉は玩味せらるべきである。事實その經濟的解放なくして、被壓迫民族の解放はあり得ないからである。

然しこの經濟不可分の日印關係は、日本の方からも言へる事である。原棉に就ては既に述べた通りである。然し印度の特産は棉だけではないのである。印度の東海岸、特にデカン高原の東北邊を中心として無盡蔵の鐵と石炭がその三分の一を開発せられただけで、今日に至つてゐるのである。ケオンジャールの鐵などはレールの枕木迄鐵と言ふ程で、印度の全埋藏量はアメリカの三分の二、石炭は支那の埋藏量二千八百億トンに對して三千六百億トンを越え、その中約二百億トンは露天堀りの可能なものであり、約五十億トンは現在我が國の重工業も冶金用に使用してゐる優良なベンガル炭である。従つて支那と滿洲と所謂東亞共榮圈諸國を原料國に持つだけで満足しやうとする現在の日本の工業力程度なら、かうした老大な未開發の寶庫も不要であらう。

然し日本がアジアの盟主として、眞實經濟的にもアジアを打つて一丸とする廣域經濟圏を率ひ、他の三大ブロックと對等の位置に立たんとする場合にはビルマ、蘭印の石油と併せて最も中心的な、不可缺の資源となるであらう。又その理想なくして事をアジアの一部に局限する東亞共榮圈問題には、實現の可能性がない。

然しこの鐵と石炭を離れても、印度は又雲母、クロマイト、マンガン、火藥原料等の一聯の貴重な軍需資源を獨占的に有する事が注意されなければならない。事實印度は一九三五——三六年度に百萬トンを超へるマンガン、十八萬トンの航空機用雲母、四萬一千トンのクロマイトを極めて低調な産業状態に於て輸出し、マンガンに於てソ聯と争ひ、硝酸鹽の製造に於て世界市場を獨占してゐるのである。それに就て思ひ出されるのは戦前の獨逸である。獨逸の一九三七——八年度に於ける對印貿易總額は二億五千八百三十一萬四千ルピーで、印度に於ける貿易順位に於ても日本に次ぐ第四位程度で、決して壓倒的な地位を占めてゐる譯でもない。又その二億六千ルピーも獨逸の貿易總額に占

める地位も極めて小さく、同年度に獨逸が印度から買付けた一億五百二十六ルビも印度總輸出額に於てその五・五六%を占めるに過ぎない。

獨逸の主要購入物資（一九三一—七八年度）

品目	印度の全輸出額	獨逸の購入量	品目	印度の全輸出額	獨逸の購入量
一、農産物			黄麻		
小 麥	二九七、五〇六トシ	一四八、〇〇四トシ	織維	八二九、七〇二トシ	九八、三五一トシ
米	一五〇、〇〇〇トシ	五三、〇〇〇トシ	布	四七九、四八六、三九三枚	一、九二六、五〇〇枚
茶	三三四、二二五、三九六トシ	九三一、一一〇トシ	袋	六二二、二六〇、三六九枚	二、一二四、〇〇〇枚
搾油用種子	六一九、三七〇トシ	一〇七、九七七トシ	棉	四八七、七六四トシ	二九、六六二トシ
植物油	一、五八三、五一六トシ	一七九、六一〇トシ	三、鑛産物		
油織 <small>（主として亞麻仁油）</small>	四七、〇〇三トシ	七六三トシ	鐵	七四、三八五トシ	二〇六トシ
ゴム	一七、七五四、五七二トシ	一、六七五、六七〇トシ	マンガン	一、〇〇一、〇九六トシ	一六、七八六トシ
二、纖維物			クロマイト	四一、〇〇〇トシ	四、二〇〇トシ
			ウオルフラム	一六トシ	四トシ

然し問題はその數量及金額にあるのではない。獨逸にしてなほこのアジャの一角に、日本と極めて接近する物資の買付けを行つてゐた事も、一つの驚異である。然し最も興味を惹けるのは、その買付け物資の品目と心構へで、この購

入物資の表を見ても判るやうにその買付けには賣らんがための買付けは一つもなく些かの無駄もなかつた事である。又この購入表には明確な數字となつて残つてゐなかつたため表記する事が出来なかつたが、この年獨逸は軍需物資に不可欠な皮革、化學及藥品原料には、英本國をも遙かに凌駕し、戦前の氣構へ既に充分であつたのである。勿論獨逸と我が國は、國情も異つてゐる。戦前の我が國に計畫的な獨逸の全體主義的經濟活動は不可能である。然し少く共印度が所上の如く今後の我が國にも不可欠の貴重な物資を持つ時、徒に資本主義的利益を追求するのみで、却て國家活動を阻害するが如き行動は採るべきでない。事實我が國の對印貿易面には、これ迄餘りにも賣らんがための買付けのみ多く、物資購入の計劃性を缺き、徒に極端な無統制と無駄を特徴としてゐたのである。

以上を綜合して、我々には日印間の經濟關係に就き次の如く言へるのである。

印度は今後も我が商品の老大な販賣市場として残るであらうし、その不可分の經濟關係を構成する基礎も所上の如く強固である。然し我が國の資本主義的要求は、この基礎を著しく歪曲し、印度を宛かも我が國の植民地視する所があつたのである。事實若し價格の低廉と言ふ條件なく、而もこれを印度に強制する政治力を日本が有してゐたなら、日本品の組織的ボイコットは一九三〇年以後の印度に於て不可避であつた筈である。これを要するに日本の政治的利益と經濟的利益の不一致、及至はその一致を可能ならしめる政治力の缺乏と言ふ事が出来やう。

従つてこの基礎の上に日印間の新しい經濟關係を築かうとすれば、現在が絶好の機會である。何故なら日本は現在統制經濟の計劃性を持ち始めてゐるし、それを義務付ける東亞共榮圈の指導國家を自ら標榜してゐるからである。その政治的要求を裏付ける日本の經濟活動は、先づ民族解放の目標に向ふべきであり、特に印度の如き植民地國家の

民族運動は、その實例を支那にも見る如き民族産業の發達と不可分の關係に置れてゐる事に想ひを致すべきである。従つてこの場合我が國の採るべき處置としては、先づ日本の紡績業が考へられる。事實日本の紡績業者は、今なほ國內に相當勢力を有してゐる。然しこれに對しても公平な國家的見地に立つ政治力が發動し、從來の如き低番手物の綿糸布は他——例へば南洋、アフリカ、中南米——へ振向けしめ、而もなほ日本の紡績業が餘力を持つとすれば、その餘力はこれを他の重要産業部門へ振向ける位の果斷と指導性は必要である。この事は現在の日本雜貨品に就ても言へる。

又從來の日印會商が回數を重ねる度に、不利な條件を強要されつゝある事實も一考せらなければならぬのであつて、これに對しても同様の事が言へるであらう。何故ならこれ迄の日印會商は常にこれを政治面から切放し、通商事務以外に何物も知らぬ外交官と一部業界代表の手によつて行はれ、その間には何等の政治的主體的な活動がなかつたからである。勿論日印會商は、日本と印度の間の經濟交渉である。即ち經濟的利益を追求する會商である。然しそれが如何に經濟的な本質を持つとは言へ、それが國と國との交渉であれば既に純然たる經濟活動から一步を踏み出し、經濟的利益の追求を内容とする政治行動の領域へ移る筈である。従つてそれは先づ政治的意欲に出發して政治的領域に解決せらるべき筈であつたのに、我が國の態度は徒に經濟的意欲にのみ出發し、經濟的利益の追求から一步を出なかつたやうである。政治的意欲と力の裏付けを欠く經濟活動が、會談の周圍を取巻く客觀情勢の支配を受けて悪化して行くのは當然である。性質は全く異なるが、自己の資本に數倍する和蘭及フランスの東印度會社を次々に破つて、遂に英國の東印度會社が東洋に經濟的覇權を打立てる事が出來たのも、偏へにその國家的支援があつたからである。

個人主義的、自由主義經濟の時代に於ては、日印會商のかかる行き方もあつたかも知れない。然し少く共今後先づ強力な政治行動として出發すべきであつて、日印間に築かるべき新しい經濟關係の基礎及形態に就ては、所上に盡きてゐると言へるであらう。

四

日本と印度の文化的、經濟的紐帶がかくの如く本質的には強固であるべき筈なのに、これを指導しこれを組織化する日本の政治力が貧弱であつたため、極めて憂ふべき状態にある事に就ては既にその一端に觸れたが、事實理想なき國家と國家の間には、「利益」以外に何等の關係もないのである。

今日日印間の各種關係に就ては、何よりも先づこの政治的危機が叫ばれ、その紐帶の脆弱さが憂へられてゐる。事實本年度の議會に於ても松岡前外相は、「これ迄東亞共榮圈問題に關し、印度に對しても日本の眞意を理解せしめんがため各種の政治工作を行つたが、その悉くが失敗であつた」と述べ、日、獨、伊の三國同盟以來兩國の關係の頓みに悪化してゐる事を率直に認めた。然し此處で一つの錯誤が行れやうとしてゐる。それは印度工作の失敗を單なる技術上の問題に歸せんとする企圖、言ひ換へれば木を見て林を見ぬ行爲が繰返されやうとしてゐるからである。

従つて此處では先づ日本人の政治的訓練の問題が採上げられなければならない。何故なら要するにこの問題も日本の政治力の問題に歸納する事が出来るし、日本の政治力はこれを擔當する國民の政治能力に出發し、この上に立つては政治的訓練の問題が各種の條件に先行するからである。然しその多くを論ずる餘裕のない此處では、兎も角も先づ

國民がその國際政治の領域で、訓練を受ける期間の極めて短かつた事が挙げられる。事實日本は第一次大戦以降世界的列強へ躍進したと言はれ、その國力は常に高く評價せられてゐたにも拘らず、その國際的政治活動は所謂經濟外交から一步も出なかつたのであつて、多少共これが政治性を有し自主的活動——極めて制限された條件の下に於てであつたが——を開始したのは國際聯盟からの脱退、即ち一九三六年以降に過ぎないからである。又今一つの不幸は、日本が遅れて國際政治の接觸面へ登場した時は、既に世界を舉げて資本主義時代であり、ヨーロッパ諸國の如き各時代の激しい經驗と傳統を持たなかつた事である。知られる如く資本主義時代には、それ自身に幾つかの段階があつても、結局個人の利益に出發し經濟が政治に優位する時代である。従つてこの時代に出發しこの時代より知らぬ日本が、その民族産業を犠牲とする面以外に印度へ進出する方法を知らなかつたのも又止むを得ない話である。然し最早やそれでは済まされぬ段階に達してゐるのである。異常な政治力の確立は、異常な努力と經驗と直感を必要とする。従つてこの三つの要素の中經驗を持たぬ日本國民には、その他二つの要素を倍加する以外に道はないのであるが、その不可能な時、それは取りも直さず日本の指導國家としての權威を拋棄する時である。これは異常にすぐれた一人の好く爲す所ではなく、國民全體の決意と努力の問題である。

然しこれを離れて日本と印度との政治關係とは、これ迄如何なる物であつたらうか。それが先づ印度を支配する英國との接觸面に於て、兩國間に築かれる經濟的利益を守らうとする方向に向つてゐた事は、否定出来ない。然し今一つこの關係を築き得る要素として、我が國の政治的關心が印度の民族運動に注がれてゐた事も否定出来ない。事實明日にでも獨立の實現しさうな客觀情勢を前に、瘦顔短軀、ジョン・ガンサーをして言はしむれば「東洋で最も汚い

男」たるガンデイが英國を手玉にとる壯觀は、それ自身一つの興味でもあつた。

然し我が國の關心は、從來この興味乃至は極めて現實主義的な要求から一步も出るものでなかつた事が、指摘せられてゐる。事實我が國ではこれ迄この民族運動を通して、その運動を生んだ印度社會の特質や特性迄、精確に把握しやうと言ふ熱意を示した事がなかつた。その特質、特性、更にその本質を知る事がなければ、それから生れる運動の本質を精確に認識し得ないのは道理で、この缺陷に基く所の全く相反する二つの意見——即ち希望を實際に置き代へて明日にでも獨立の實現するやうに考へる一派と、その社會状態の複雑さと文化程度の見地から永久に獨立を不可能と考へる一派——が日本に横行してゐるのである。事實印度の民族運動は、これを背後の宗教社會やガンデイ思想との關係に於て理解しない限り、この結論の生れるのは當然である。これは方法論的に認識の基礎をなす世界觀の誤謬とも言へやう。何故ならそれは十八世紀の宗教復興運動を母胎として發達したもので、それ自身は印度民族の復興とそれを可能ならしめる諸條件の獲得を具體的目標とする一種の社會運動であつて、決して政治運動でないからである。即ちそれは獨立なる政治的要求を、單に充足すべき一條件としてのみ實現せんとする點に特徴を有してゐるのであるから、これを例へばアメリカや愛蘭のそれの如き通常の獨立運動と混同する機械的な、西洋流の世界觀を基礎とする批判を本質的に拒絶してゐるのである。事實この世界觀に基く批判は、例へばガンデイの企圖する國產布獎勵運動や農村工業運動をも、徒にその經濟的過程に於て過小評價する事しか出來ず、その持つ政治的影響を正當に批判し得ない誤謬も犯すからである。

又この誤謬は、從來共我が國の對印工作に強く現れてゐた。その誤謬とは、獨り國民會議派を取上ぐる場合の左翼の

偏重である。事實印度の獨立運動を前記の如き世界觀を以て認識すれば、今後の運動のイニシアティブを採るのは左翼である。従つて我が國がこの會議派と連繫を採らんとする場合は、常にこの左翼のみが問題となり、ネール、ボース、又は特定の場合のガンデイのみが對象とせられたのである。然し印度社會の實狀を知れば、運動の主流がこれ等の人にない事を知るのである。ガンデイ自身の偉大さは、ガンデイ個人とその運動の眞の推進力たる一團を結ぶ連繫の上にもみ生れる所の政治力の偉大さである。又會議派の左翼とは、運動の西洋的解釋の上に立ち、その機械的な解釋故に常にこれ迄も彼等が行動のイニシアティブを採つて來た事を知つてゐる。然し行動のイニシアティブは飽く迄も運動を推進する一條件であつて、運動自體のイニシアティブとは異つてゐる。事實印度社會の特質とその發展段階は、常に彼等の採る行動のイニシアティブによつて一歩宛前進せしめられながらも、本質的には彼等の企圖する方向への運動の推進せられる事や彼等の思想自身を拒絶してゐるのである。又この左翼はその西洋的な世界觀の故に、多分に理想主義的一面を持つ我が東亞共榮圈問題を正當に批判する能力を最も缺いてゐる所の連中である。

かくて我が國の對印工作は、行動のイニシアティブと運動自體のイニシアティブの混同により、又それ自身に西洋的要素を多分に残すため結局印度社會の正確な認識の不可能な事によつて、みすみす運動の主流を見失ひ、今一つの有力な不可欠な政治的紐帶を自らの手で破壊してゐる觀がないでもない。従つて松岡前外相の述べる失敗とは決して政治技術上の失敗ではなく、印度社會に對する認識上の本質的な失敗であると言ふ事が出来るのである。

五

然し歐洲情勢の急變は、この日印間の政治的關係を、一段と危機に陥れてゐる觀がある。事實昨年十月の東方國會議以降、東洋の英國勢力を代表する觀のある印度の敵性は、露骨である。最早や舊交の復活は、絶望であるやうにも見受けられる。

然しこれを今一歩突込んで考へて見れば、成程英國の支配する政治面と日本の關係は最早や絶望であるかも知れない。然し印度の政治力は、常に英國の支配力と民族勢力の接觸面に表現せられ、その基礎に二元性を有してゐる事の特徴としてゐる。従つて後者との關係は、強ち絶望とのみは言へないのである。

事實會議派左翼を代表するジャワハルラル・ネールも、その自叙傳に於て印度の民族運動が直接擡頭するに至つた條件として日露戰爭を挙げ、この日露戰爭に於ける日本の勝利の傳へられる毎に感激の涙を浮べ、翻つて印度の現狀を憤つた旨が繰返し述べられてゐる。又一昨年九月彼が招れて重慶へ赴く時も、往訪の印度人記者に對し「自分としては同時に日本も訪れて東亞の現狀を正しく認識したいと考へた。然し各種の事情、特に支那が自分を招くに充分な機會と準備をして呉れる時、自分には日本と何等確實な聯繫を有しないため、訪問する事が出来ないだけである」と述べてゐる。勿論これを言葉通り受取る事は出来ないであらう。然しこれ迄の國民會議派の偏見が、十數年前たゞの一度だけ日本と特殊關係を持つた一地方指導者に今なほ親日派の烙印を押してその政治活動を封じてゐる現狀を考へれば、ネールの言葉は尊重せらるべきである。又彼が日本の政治的性格の變更を條件として、アジア民族解放のための日印提携に反對せぬ事にも留意する必要があるであらう。

此處にはたゞ日本政治の今後進まんとする方向に最も強く反對する筈の左翼代表者を、その一の例として挙げたに